

北柳1・2遺跡

発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-1997-1677-01

1997

1677

6

1997

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

きた やなぎ
北柳1・2遺跡

発掘調査報告書

平成9年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



1607 - 1677

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、北柳1・2遺跡の調査結果をまとめたものである。

北柳1・2遺跡は山形市の北部、天童市に接する大字青柳にあります。立谷川と高瀬川の複合扇状地にあたるこの地は田畠の広がる農業地帯でしたが、流通センターの建設、平成9年度に開校する山形県立保健医療短期大学の建設、更には県立中央病院の移転等と大きくその様相を変えつつあります。

この度、県立中央病院に隣接する健康の森の整備事業に伴い、工事に先立って北柳1・2遺跡の発掘調査を実施しました。

北柳1遺跡からは、古墳時代に属する竪穴住居跡が2軒検出されたのを始めとして、縄文時代終末期から弥生時代中期にわたる遺物の大きなまとまりが10箇所で確認されました。出土した遺物の総数は約7,100点にも達し、当該期としては県内でも有数の資料を得ることができました。

また、北柳2遺跡からは古墳時代以降のものと考えられる溝状遺構が1条、土坑が5基検出されました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、先祖が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この先祖から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、先祖の足跡を学び、子孫へ伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成9年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は健康の森整備事業に係わる「北柳1・2遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県土木部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名　北柳1遺跡 (C Y G K Y - 1) 遺跡番号 平成7年度登録

北柳2遺跡 (C Y G K Y - 2) 遺跡番号 平成7年度登録

所　在　地　山形県山形市大字青柳字北柳

調　査　期　間　発掘調査 平成8年4月1日～平成9年3月31日

現地調査 平成8年5月8日～平成8年9月6日

調　査　主　体　財団法人 山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・整理作業担当者

調査第二課長 野尻 優

主任調査研究員 尾形 興典

調査研究員 小林 圭一

嘱託職員 大泉壽太郎

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県教育委員会文化財課、山形県土木部都市計画課、山形県公園事務所、山形市教育委員会、東南村山教育事務所等関係機関に協力をいただいた。また報告書作成にあたっては、石川日出志、大塚達朗、金子昭彦、鈴木正博、高橋龍三郎、寺崎秀一郎、中沢道彦の各氏からご指導、ご教示を賜った。深く謝意を表する次第である。

- 5 本書の作成・執筆は小林圭一、大泉壽太郎が担当し、I・II・III 1～4・IVについては大泉、その他は小林が執筆した。編集は尾形興典、須賀井新人が担当し、全体については野尻優が監修した。

- 6 出土遺物、調査記録については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

- 7 本書で使用した図面の方位はすべて磁北を指し、グリッドの南北軸はN-21°-Eを測る。

- 8 遺物実測図・拓影図の遺物番号に統いて、出土地点のグリッドを()内に併記した。

- 9 堆積土層・遺構覆土の色調及び出土土器の色調の記載については、「新版標準土色帳」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1990)に掲った。

- 10 本書で使用した地形図は下記の通りである。

第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図「山形北部」(NJ-54-21-11-3)

- 11 掃図に使用したスクリーントーンの用例は、図面に表記した。なお、繩文原体の表記は「日本先史土器の繩紋」(山内 1979)を参考として、下記のように簡略化し、また赤色顔料付着の土器については、遺物番号上に●を付した。

$$R \left\{ \begin{matrix} \ell \\ \ell \end{matrix} \right\} \rightarrow R \quad L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\} \rightarrow LR \quad R \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\} \rightarrow RR \quad L \left\{ \begin{matrix} \ell \\ \ell \\ \ell \end{matrix} \right\} \rightarrow 0 \text{段多条LR}$$
$$R \left\{ \begin{matrix} \ell \\ \ell \\ \ell \end{matrix} \right\}$$

目 次

I 調査の経緯.....	(大泉)	1
1 調査に至る経過.....		1
2 調査の方法と経過.....		1
II 遺跡の立地と環境.....	(大泉)	2
1 地理的環境.....		2
2 周辺の遺跡.....		2
III 北柳 1 遺跡.....	(大泉、小林)	7
1 造構の分布.....		7
2 遺跡の層序.....		7
3 旧河道路跡.....		7
4 住居跡.....		9
5 土坑.....		12
6 遺物集中地点.....		15
1 ブロック.....		18
2 ブロック.....		22
3 ブロック.....		29
4a ブロック.....		30
4b ブロック.....		36
4c ブロック.....		43
5 ブロック.....		48
6a ブロック.....		53
6b ブロック.....		63
6c ブロック.....		67
7 その他の遺物.....		68
IV 北柳 2 遺跡.....	(大泉)	70
V 調査の成果.....	(小林)	72
引用文献.....		87
報告書抄録.....		88

表

表 1 ブロック別遺物出土数.....	16
表 2 繩文時代晩期末葉～弥生時代中期編年試案	86

挿 図

第 1 図 北柳 1・2 遺跡グリッド配置.....	2
第 2 図 遺跡位置図.....	3
第 3 図 調査区概要図.....	4
第 4 図 北柳 1 遺跡全体図.....	5・6
第 5 図 旧河道路跡実測図.....	8
第 6 図 1 号住居跡実測図.....	10
第 7 図 1 号住居跡出土遺物.....	10
第 8 図 2 号住居跡実測図.....	11
第 9 図 2 号住居跡出土遺物.....	11
第 10 図 1 号・2 号土坑実測図.....	13
第 11 図 1 号・2 号土坑出土遺物	13
第 12 図 3 号土坑実測図・出土遺物	15
第 13 図 1 ブロック遺物出土状況図.....	19
第 14 図 1 ブロック出土土器(1)	20
第 15 図 1 ブロック出土土器(2)	21
第 16 図 1 ブロック出土石器.....	21
第 17 図 2 ブロック遺物出土状況図.....	23
第 18 図 2 ブロック出土土器(1)	25
第 19 図 2 ブロック出土土器(2)	27
第 20 図 2 ブロック出土土製品・石器	27
第 21 図 3 ブロック遺物出土状況図.....	28
第 22 図 3 ブロック出土土器.....	29
第 23 図 4a ブロック遺物出土状況図	31
第 24 図 4a ブロック出土土器(1)	33
第 25 図 4a ブロック出土土器(2)	35
第 26 図 4b ブロック遺物出土状況図	37
第 27 図 4b ブロック出土土器(1)	39
第 28 図 4b ブロック出土土器(2)	41
第 29 図 4c ブロック遺物出土状況図	44
第 30 図 4c ブロック出土土器	45
第 31 図 4 ブロック出土石器	47
第 32 図 5 ブロック遺物出土状況図	49
第 33 図 5 ブロック出土土器	51
第 34 図 5 ブロック出土石器	51
第 35 図 6a ブロック遺物出土状況図	54
第 36 図 6a ブロック出土土器(1)	57
第 37 図 6a ブロック出土土器(2)	59
第 38 図 6a ブロック出土土器(3)	61
第 39 図 6b ブロック遺物出土状況図	64
第 40 図 6b ブロック出土土器	65
第 41 図 6 ブロック出土石器	66
第 42 図 6c ブロック遺物出土状況図	67
第 43 図 6c ブロック出土土器	68
第 44 図 ブロック外出土遺物	69
第 45 国 2 ブロック出土土器(3)	69
第 46 国 北柳 2 遺跡全体図	70
第 47 国 北柳 2 遺跡造構実測図	71
第 48 国 北柳 2 遺跡出土土器	71
第 49 国 小型壺文様模式図	73
第 50 国 文様模式図	74
第 51 国 北柳 1 遺跡時期別変遷図	81

図 版

- 図版 1 北柳 1・2 遺跡航空写真
 図版 2 北柳 1 遺跡航空写真・発掘調査前状況
 図版 3 北柳 2 遺跡航空写真・遺構完掘状況
 図版 4 北柳 1 遺跡 1 号住居跡・同 2 号住居跡
 図版 5 北柳 1 遺跡旧河道跡・同 3 号土坑検出状況他
 図版 6 北柳 1 遺跡 1 号土坑検出状況他

- 図版 7 北柳 1 遺跡遺物出土状況
 図版 8 北柳 1 遺跡出土遺物
 図版 9 北柳 1 遺跡出土遺物(1・2 ブロック)
 図版 10 北柳 1 遺跡出土遺物(3・4a・4b ブロック)
 図版 11 北柳 1 遺跡出土遺物(4c・5・6a ブロック)
 図版 12 北柳 1 遺跡出土遺物(6a ブロック他)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

今回の北柳 1・2 遺跡の発掘調査は、健康の森整備事業に伴って実施されたものである。本遺跡の所在する村山高瀬川・立谷川扇状地、馬見ヶ崎川扇状地には多くの遺跡が分布しており、本遺跡の南側を西流している村山高瀬川の対岸には、下柳 A 遺跡、下柳 B 遺跡、白山堂遺跡等の所在が知られている。

この度、山形市青柳地区内に県立中央病院移転整備事業及び健康の森整備事業が計画され、予定地内にも遺跡の所在が充分考えられたため、山形県教育委員会文化財課では整備事業に先立って、1995年 5 月と 12 月の 2 回にわたり詳細分布調査(試掘)を実施し、両事業予定地区内に、北柳 1 遺跡及び北柳 2 遺跡が所在することを確認した(平成 7 年度登録)。

この分布調査の内容をもとに関係機関による協議が行われた結果、健康の森整備事業に係る部分について、財團法人山形県埋蔵文化財センターが県からの委託を受け、発掘調査を行い、記録保存することになったものである。

2 調査の方法と経過

発掘調査は1996年 5 月 8 日から 9 月 6 日までの実質 82 日間で実施した。調査面積は遺跡推定面積北柳 1 遺跡 12,300m²、北柳 2 遺跡 1,500m²のうち、健康の森整備事業に係る面積として前者が 8,000m²、後者が 500m²である(第 3 図)。

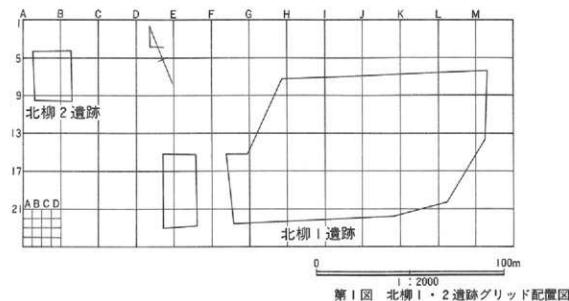
調査の工程は、5 月 8 日に発掘器材の搬入と現地事務所の開設を行い、同 10 日に調査区を設定した。その後遺物の出土状況や遺構検査面の深さ等を確認するための試掘を行い、その結果をもとに 14 日から重機を用いて、北柳 2 遺跡から表土の除去作業を開始し、北柳 1 遺跡は 16 日に表土の除去を開始した。

調査は表土除去終了後、順次面整理を行い、遺構及び遺物の検出に努め、統いて遺構精査、遺構実測、写真撮影、遺物取り上げ等の記録作業にあたった。北柳 2 遺跡は 7 月 4 日に空撮による写真実測を行い、調査を終了した。北柳 1 遺跡は 5 月 23 日から調査を開始し、8 月 30 日北柳 1 遺跡の空撮による写真実測を実施した。

8 月 29 日、関係者を含め多数の市民の参加を得て現地説明会を開催し、9 月 6 日現場事務所の撤収を行って、現場調査を終了した。

調査区内のグリッドの設定については、北柳 1・2 両遺跡の調査区全域を通して 20m 四方の大グリッドを設定し、更に各大グリッド内を 5 m 四方の小グリッドに区画した。東西軸は西から東に向かって大グリッドには A～M、小グリッドには A～D のアルファベットを付し、南北軸には北から南に順に 01～25 のアラビア数字を付番し、北西隅を基点に「AA01 区」等の呼称で表記した(第 1 図)。

なおグリッドの南北軸については、現水田の畦畔区画を基準に任意に設定したものであり、N-21° - E を測る。



第1図 北柳1・2遺跡グリッド配置図

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

北柳1・2遺跡は、山形市の北部、天童市に接した山形市大字青柳字北柳^{アオヤシキタヤマ}に所在する。JR奥羽本線南出羽駅の南方約350mの水田中に位置し、高瀬川と馬見ヶ崎川の合流点の間にあり、標高は約106mを測る。

この付近は奥羽山脈の面白山付近に源を発し、西流して須川に注ぐ立谷川と立谷川の南を西流し馬見ヶ崎川に注ぐ高瀬川との二つの河川によって形成された複合扇状地の扇端部付近にある。現在は長年の水田耕作により平坦化され、高瀬川も一本の河道に落ち着いているものの、立谷川、高瀬川ともこれまで度々氾濫を繰り返し、幾度となくその流路をかえてきたものと思われる。明治34年の地図(大日本帝国陸地測量部発行／2万分の1)には高瀬川の北側に幾本かの支流が看取され、南側にも1995年に実施された下柳A遺跡の発掘調査や航空写真により旧河道が確認されている。

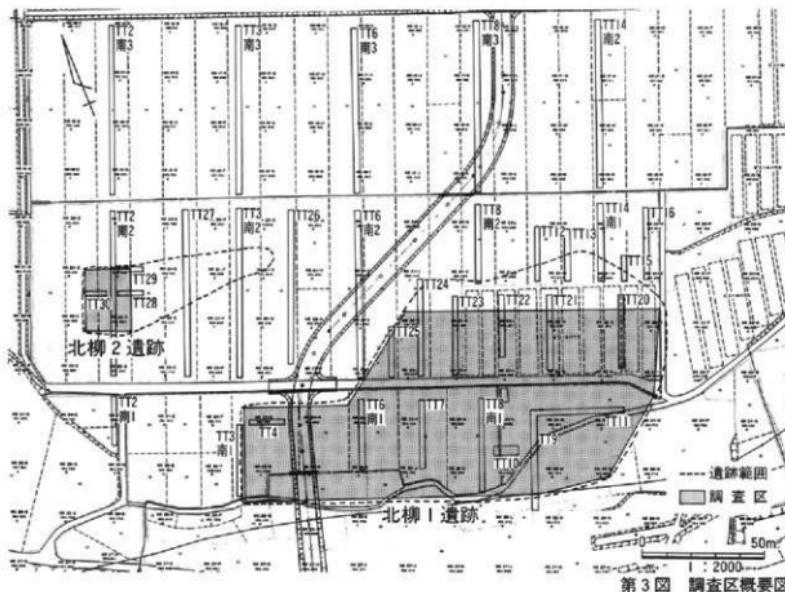
そのため立谷川・高瀬川扇状地のうち山形市域となる南半分は氾濫による堆積物に覆われており、上流に遺跡等があれば土砂とともに遺物などが流されて堆積することは十分考えられる地域である。

2 周辺の遺跡（第2図）

北柳1・2遺跡の周辺には弥生時代から古墳時代にかけての集落跡や古墳が数多く分布している。特に立谷川・高瀬川扇状地、馬見ヶ崎川扇状地の2つの扇端部及び前縁部の自然溝水地付近には、本格的な稻作が営まれる弥生時代中期後半以後の遺跡が多く所在している。これらの遺跡はいずれも地下水位の高い低湿地帯がひかえる扇端部に位置しており、多くは水稲耕作を中心とした集落跡と考えられている。



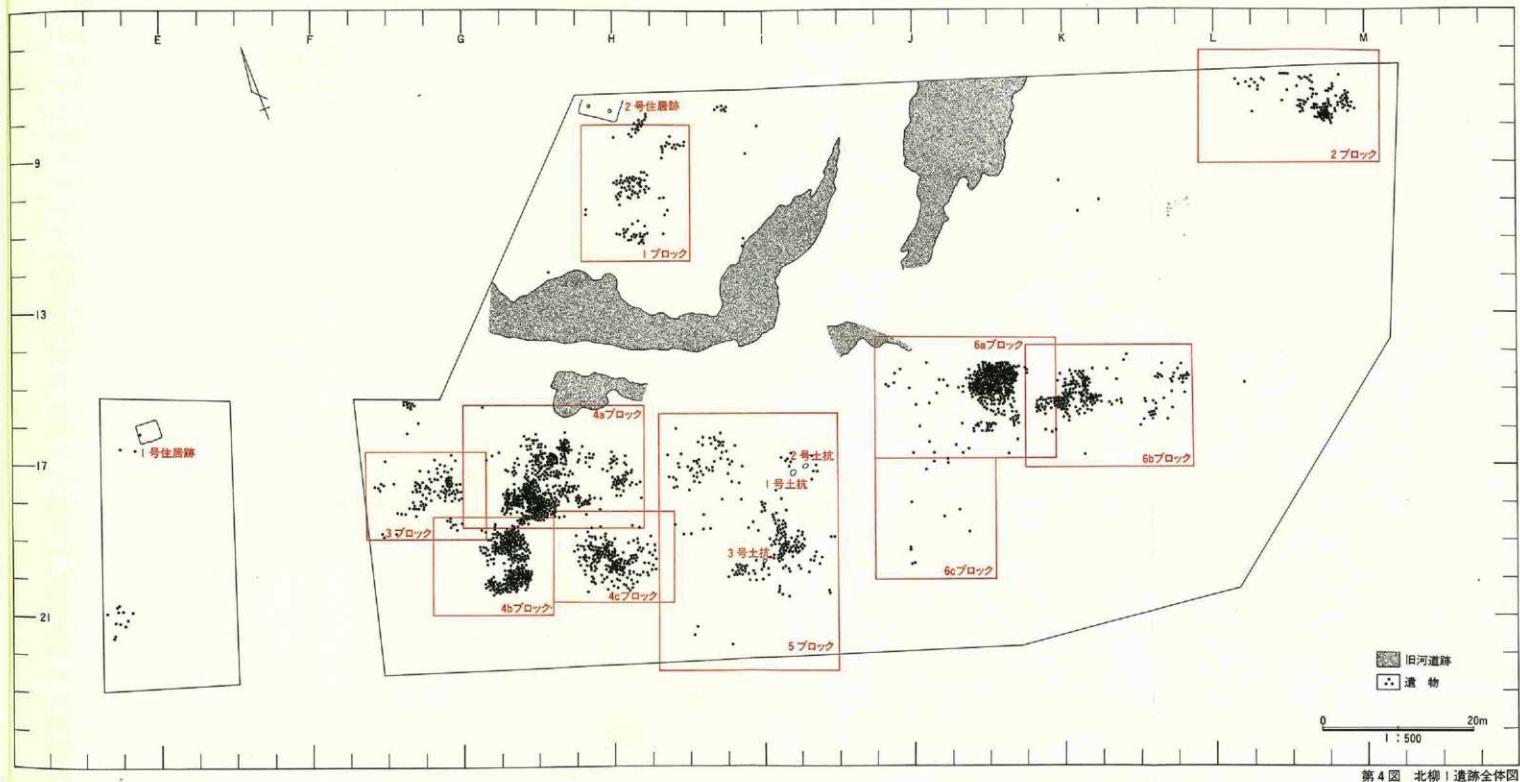
第2図 遺跡位置図



第3図 調査区概要図

本遺跡の周囲には山形県内の弥生時代を代表する遺跡が多く存在する。本遺跡の北2kmに位置する塗山遺跡(17)では、磨消繩文施文の良好な土器が出土し、中期樹形圓式併行として「塗山式」が提唱されている。また西800mに位置する七浦遺跡(10)では平行沈線文の桜井式併行の土器が多数出土し、「七浦式」が提唱され、石包丁が3点出土している。南西3.5kmに位置する江俣遺跡は七浦式に後続するとされる「江俣式」の標識遺跡で、ここでは粗痕を持つ土器と石包丁が出土し、弥生時代後期に山形盆地南半で水稻耕作が一般化していた証左として七浦遺跡とともに重要視されている(柏倉 1968)。南東2.2kmの丘陵上に位置するお花山遺跡(21)は古墳群として著名であるが、ここでは平行沈線による連弧文・山形文・雷文を持つ後期天王山式に類する土器群が出土している。ほかの弥生時代の遺跡としては長町遺跡(8)、長町北河原遺跡(7)、西ノ神遺跡(5)、境田D遺跡(13)が知られており、いずれも広義の桜井式が出土している。

本遺跡の南側を西流する高瀬川の対岸には古墳時代を主体とする下柳A遺跡(3)、下柳B遺跡(4)、白山堂遺跡(6)等が位置する。下柳A遺跡については1995年に緊急発掘調査が実施され、古墳時代中期の竪穴住居跡が多数検出され、弥生時代後期の天王山式も出土した。また7~8世紀の集落遺跡で国史跡である嶋遺跡は南西約3kmに位置している。このように当域には弥生時代中期後半から奈良・平安時代の遺跡が多数存在しており、水稻の生産地帯として積極的に開拓が行われていたことが推測される。



第4図 北柳1遺跡全体図

III 北柳1遺跡

1 遺構の分布（第4図）

北柳1遺跡で検出された遺構は竪穴住居跡2軒、土坑3基と僅かであったが、他には土器集中地点が10箇所と旧河道跡が検出された。住居跡はいずれも古墳時代中期に属するもので、調査区の西側で検出された。土器の集中地点は旧河道に沿うように形成され、総数で約7,100点の遺物が出土した。遺物は縄文時代晚期大洞A式から古墳時代までのものが含まれ、それぞれが時期的なまとまりを持って構成されている。特に2ブロックは大洞A乃至A'式期、4bブロックは大洞A'式期、4cブロックは青木畠式期、6aブロックは鱗沼式期の良好なまとまりといえる。調査区内は土層が不均一で、砂の互層が所々見受けられたことから、過去に冠水したことが想定される。しかし時期的なまとまりを有するブロックの在り方や遺物の遺存状況は、二次堆積によるものではなく、河川沿いに土器等を廃棄した営為の結果によるものであったことが推測される。

2 遺跡の層序

本遺跡の土層は、前述したように一定ではない。それは調査区内の旧河道跡が検出されたように、水の影響を多く受けたものと思われ、砂の互層が至る所で散見される。しかし遺物が出土した土層は暗褐色の粘質土に限られており、遺物が集中していた地点に限っては激しい冠水の影響を免れていたものと思われる。

本遺跡の基本層序は2ブロックの中で示した（第17図）。1・2層が耕作土で、3層は現況が水田であったことから、多量の酸化鉄を含む土層となっている。4・5層が遺物を包含する暗褐色の粘質土層で、4層の方により多くの遺物が集中する。遺物の高低差は15cmの幅で収束し、下層は砂の混じりがやや多くなる。6層は黒褐色土で、遺物の包含はみられない。

遺物を出土する地点の土層も、ほぼ同様の状況が取扱されたが、2ブロックのように包含層を二分することはできていない。調査区の表土は北部分が浅く、南部分が深くなっていたが、南半の広い範囲で、旧地権者による土取りが行われており、一部包含層の上面まで及んでいた。

3 旧河道跡（第5図、図版5）

調査区の北側中央部から南進し、途中大きく折れ曲がり、調査区の西端に抜ける平行する砂利の層が検出された。この砂利層の間には小礫を多く含む黄褐色の粘質土が認められ、旧河道跡の可能性が予想されたため、3箇所でトレンチを開設し掘り下げを行った。その結果砂利層が急激に落ち込み、木片等の纖維質を含む黒色の粘質土と砂質土の堆積がみられた。いずれも河水が激しく、埋没しているものの今なお流路として機能していることが窺える。

土層断面の詳細な検討は1トレンチで実施した。検出面での河幅は8m、底面では6m、深さは1mを測る。底面は比較的平坦で、基盤は青灰色の砂利層となっている。覆土は上層に黑色粘質土層が、下層には粘質土と砂質土が交互に堆積し、木片は下層に多く出土したが、人為

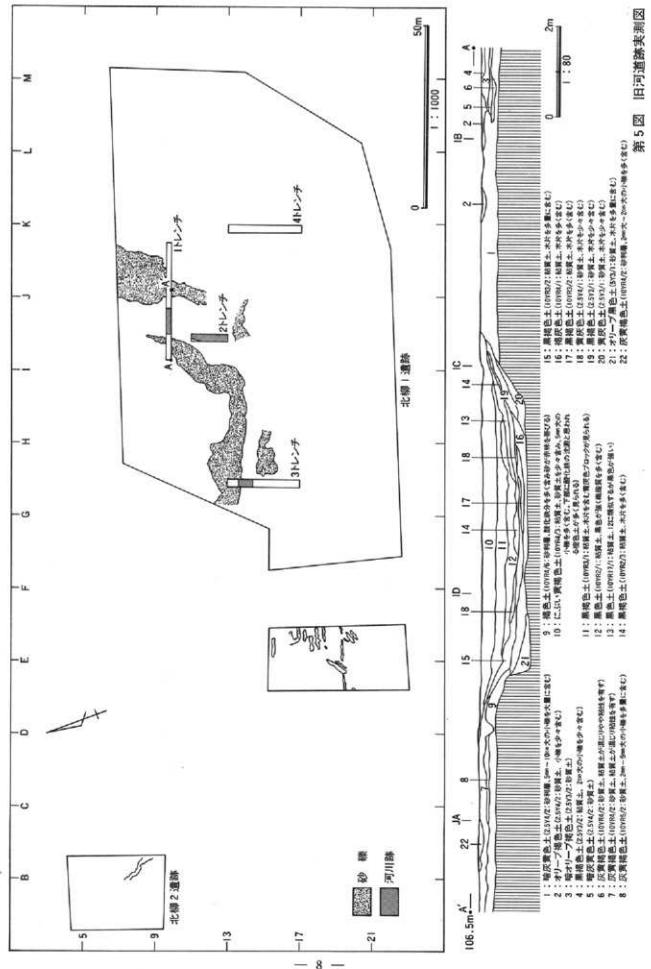


図5 図 旧河道跡実測図 第5圖

的な遺物は全く検出されなかった。河道の幅は3トレンチでは4mと狭くなる。水の流れの方向は、砂利層の検出面が北側で高く、西側で低いことから、北から西にあるものと推測されるが、河幅は減じることになる。

旧河道の時期は、遺物等の出土が認められず特定することはできないが、遺物の廃棄ブロックが河道跡に沿うように形成されていることから、縄文時代晚期終末から弥生時代中期には流路として機能していたことが想定される。この河道跡は調査区の南に接する高瀬川の支流または流路の一つになっていたものであろう。

調査区西端では砂の互層が河道跡と同様の方向で認められた。流れの方向が一致していることは、この区域が旧河道の冠水にさらされていたことがうかがえる。この河道跡は北柳2遺跡では検出されていないが、恐らく北柳2遺跡の南側を西流するものと思われる。

調査区東部分にも砂の互層が至る所で見られたため、6bブロック調査終了後4トレンチを開設し東西方向の河道跡の確認作業を行ったが、青灰色砂質土の落ち込みが確認されたのみで、河道跡を特定するには至らなかった。6bブロックはこの砂質土上に形成されており、冠水による堆積作用を受けたとしても、包含層形成以前ということになろう。

4 住居跡

今回の調査では2軒の竪穴住居跡が検出された。いずれも古墳時代のもので、後世の振削を受けたため検出面から直ぐ床面に達しており、壁の立ち上がりははっきりしない。遺物の出土はいずれも土器片が多く、復元し得たものは少數で、全て南小泉式に属すると思われる。従って1995年に発掘調査された隣接する下柳A遺跡とは、時期的に強い関連を有することが想定される。

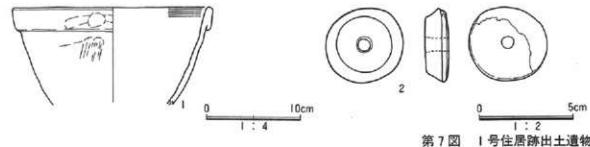
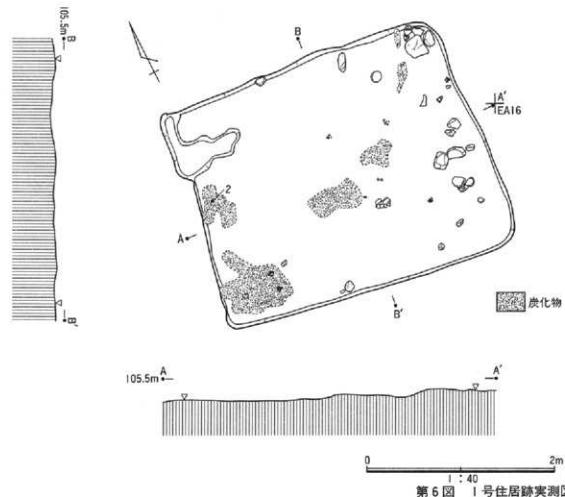
1号住居跡（第6・7図、図版4）

調査区の西端のDD16区に位置する。各辺の中央部で計測すると、東西3.1m、南北2.6mを測り、東西方向に僅かに長い方形を呈する小規模な住宅跡である。東西軸を主軸とする主軸方向はN-83°-Wを測る。

本住居跡が検出されたこの区域(DC15～EB22)は、今回の調査に入る前に既に旧地権者によって住居跡の床面近くまで土取りが行われており、遺構検出面と床面とはほぼ同じ高さで覆土の堆積は余り認められなかった。住居跡の形状は炭の分布状況から検出することはできたが、壁溝、柱穴は検出できなかった。

住居内の東側中央部に河原石が多く遺存していたが、石に燃焼と関係する焼け跡が認められなかったこと、また周囲の土色・土質から煮炊き用の領域と特定することはできなかった。また西壁側や中央部にやや厚い炭の層や炭化材が検出され、薄い炭の層も散在的に確認されたことから、焼失住屋の可能性が考えられる。

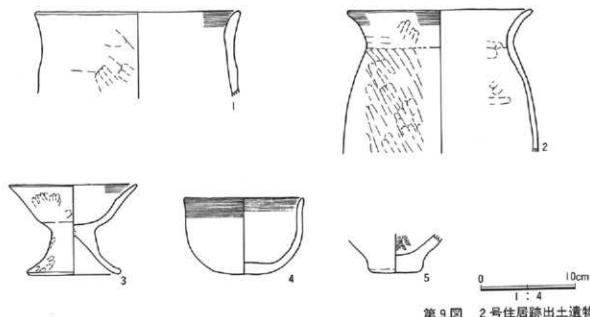
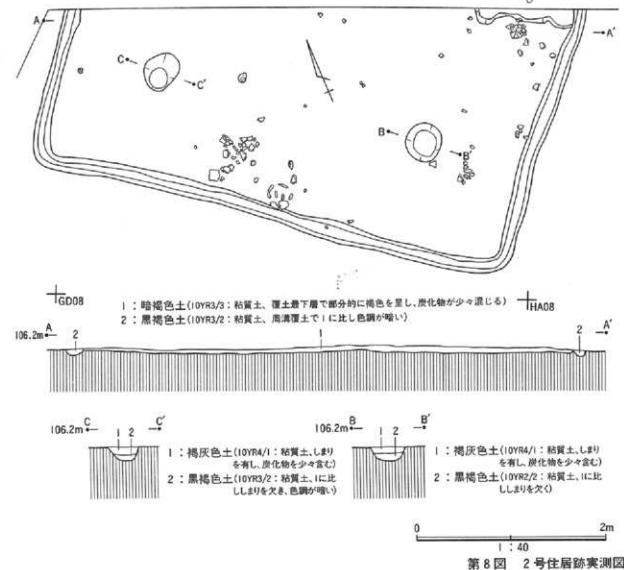
出土遺物としては、西壁中央部近くに石製紡錘車(第7図2)が出土したのをはじめ、床面から散在的に多数の土器片(約180点)が出土した。しかしそれも小片ばかりで、固化し得たものは第7図1の壺に限られる。



2号住居跡（第8・9図、図版4）

調査区の北西端のCD07区に位置する。北側は調査区外になるため調査できず、全容は把握し得なかったが、検出部から推定すると、平面形態は東西軸を長軸とする長方形を呈し、東西軸の長さは5.2m、南北軸の長さは3m以上を測る。東西軸を主軸とする主軸方位はN-52°-Wを測る。

この土地は元々農地整理によって土地改良がなされ、住居跡覆土下面まで耕作が及んでおり、表土（耕作土）を除去した時点で既に遺物が現われ、覆土は非常に薄く、最も厚い地点で8cm、薄い所では2cm弱であった。



柱穴は南西隅と南東隅に2基確認できた。いずれも壁から1m離れた隅部に位置し、円形を呈し、掘り込みは浅い。また北東端の部分からは炭層及び炭を混合する焼土ブロックが検出され、煮炊きに使用された領域と考えられる。

遺物としては土師器の破片が320点出土した。特に南壁中央部付近に集中し、北東端からも多く出土した。いずれも小片で固化し得たのは壺、高杯、碗等の5点に限られる。

5 土坑

土坑は調査区の中央部5ブロックの付近からのみ検出された(第32図)。いずれも略完形の土器が埋設され、小規模なものである。

1号土坑(第10・11図、図版6)

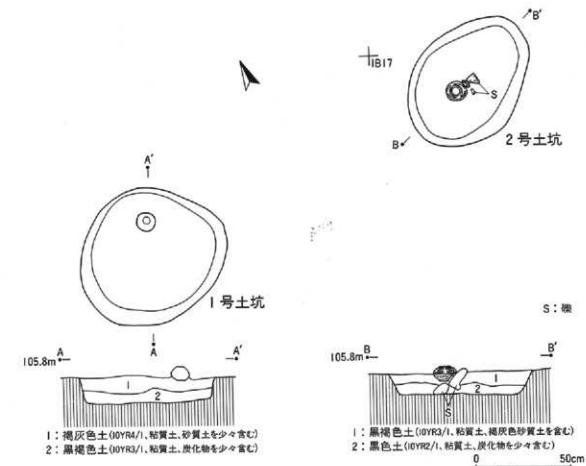
5ブロックの中心からやや北側に離れたIA17区に位置する。2号土坑とは1.1mしか離れておらず、近接した時間関係が想定される。平面形態は70~80cmの円形を呈し、底部では60~65cmで、検出面からの深さは15cmを測る。底面は比較的平坦で、覆土は2層に区分され、周囲の土質よりも暗い。

出土した遺物は第11図1に示した小型壺1点のみである。土坑のやや北側から倒立し、底面から約10cm浮いた状態で出土した。土器の内部は土が充填しない中空の状態で、口頸部が欠損している以外は、全くの完形である。現存の器高は6.9cmで、胴中央部に最大径を有し9.8cm、底径は4cmで、弱い上げ底をなす。器厚は5mm、底面では7mmを測る。頸部は接合面から剥離し、内径が2.8cmと細口となる。外面は無文で、斜位乃至横位に丁寧に研磨され、部分的に光沢も見られるが、底部付近には若干の剥落が認められる。色調は暗褐色を呈し、下半は黒色を帯び、胎土には砂粒、金雲母が多く含まれる。底径が小さく、胴部が球状を呈する細口の無文の小型壺は大洞A式に多く見受けられる。多くが口縁部に墻帶による工字文が配されるが、本例も同様のものと推定される。但し本遺跡では大洞A式新段階以降の遺物しか出土しておらず、また近接する2号土坑の小型壺を考慮すると、大洞A式新段階~大洞A'式に位置付けられる可能性が高い。

2号土坑(第10・11図、図版6)

1号土坑同様5ブロックの北側IB17区に位置する。平面形態は80×60cmの稍円形を呈し、底部は70×45cmで、長軸の方向はN-65°-Eである。検出面からの深さは12cmで、底面は比較的平坦である。覆土は2層に区分され、周囲の土質よりも暗い。

出土した遺物は第11図2に示した小型壺と碟3点である。壺は口頸部を欠損するが、それ以下は全くの完形で、正位の状態で検出され、直ぐ脇に頸部の破片と碟が接して認められた。掘り下げる結果、碟は壺の東脇と底面に壺を支えるように2点配置されており、意図的に埋納されたことが推測される。壺の内部からは口頸部の破片と小碟1点が出土し、赤色顔料が混じる黒褐色土が充填されていた。頸部は体部との接合面から剥離しており、接合の結果口頸部の半分が復元できた。現存の器高は10.6cmで、体上半に最大径を有し、肩が強く張り出す。最大径は10.4cmで、底径は4.5cm、頸部の内径は3.6cm、器厚は5~6mmを測る。口縁部は破損してい



第10図 1号・2号土坑実測図



第11図 1号・2号土坑出土遺物

るが、僅かに上端の痕跡らしきものがみられ、器高は10.6cmを大きく越えることはないと思われる。口縁直下には2条の沈線が巡回され、頸部には焼成前の貫通孔が1つ穿たれる。体上半の文様は、上下裏とも沈線で区画され、その間に沈線文手法による2単位の工字文が施される(第49図2)。沈線は幅が2.5mmで彫り込みは浅く、文様は結合することなくそれぞれで完結する。文様の反転部はやや尖鋭的で、沈線間には空隙が存する。体下半には長さ1cm程度の原体による横走するLRが施され、底面近くにまで及び、底部は平底となる。頸部と体上半は丁寧に研磨されるが、器表の一部に剥落がみられ、文様が不明瞭となる。色調は暗褐色を呈するが、下半の一部は黒色、剥落部は橙褐色をなし、胎土は細砂粒、石英を多く含む。器面には赤色顔料の付着が微かに認められるが、内面上半は顯著である。

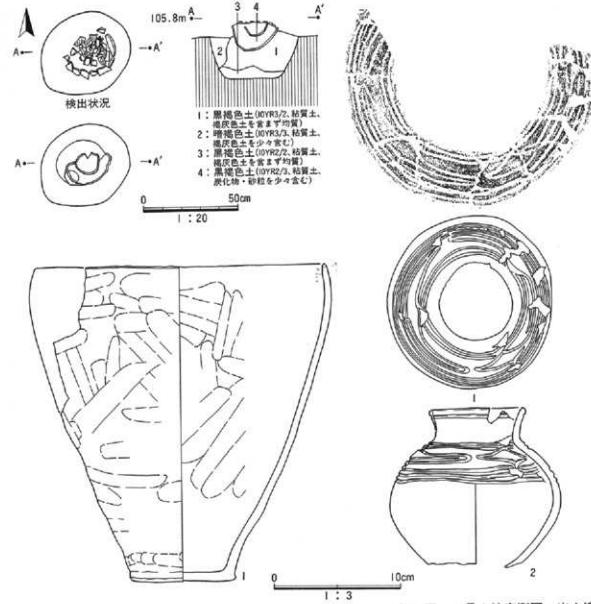
本資料は工字文を有することから大洞A式への位置付けも可能であるが、文様は沈線文手法による幅を有するもので、結合部を持たず、反転部がやや尖鋭的になることから、本来の工字文とは質異である。また体上半が強く張り出し、体部に対する底径の割合が高くなることから、大洞A'式またはそれ以降に属するように思われる。

3号土坑(第12図、図版5)

5ブロックの中心部のHD19・IA19区に位置し、1号土坑からは南西方向に約12m離れる。土坑は深鉢形土器を埋設したもので、平面形態は40~50cmの円形を呈し、底面では25cm前後、深さは検出面より30cmを測る。周囲の土質との識別は困難であったが、深鉢の埋設を確認した時点で、内側に有文土器の小破片が多数認められた。深鉢は底面より15cm浮いた状態で北東方向に寝かし気味に埋設され、更にその内側からは小型壺が横倒しの状態で出土した。深鉢と壺の間には土が堆積しており、同時期の埋設とは即断できないものの、内部に意図的に埋納されたと思われる、時期的に極めて近接したものといえよう。

第12図1は無文の中型の深鉢である。体下半はほぼ完形であるが、口縁部は1/3しか残存しない。器形は底部が張り出し、体部は屈曲を持たず立ち上がり、口縁付近で緩く内傾する。口唇はやや尖鋭となるが、平坦とは言い難く、口縁の一部に指頭圧痕が認められる。器高は24.6cm、口径は推定23cm、最大径は口縁直下2.5cm付近にあり推定23.9cm、底径は8.4cm、器厚は5~6mmを測る。器表は全くの無文で凸凹に富み、体下半には製作時の横位のナデの痕跡が顯著に残り、口縁部付近には横位、体部には斜位乃至縱位、底部には横位の弱い範囲が観察される。内面は斜位方向に表面よりも丁寧に研磨されるが、口縁付近と底部はやや粗雑である。色調は暗褐色を呈し、胎土は粗い砂粒を多量に含み、内面よりも器表で多く観察される。

第12図2は小型の壺で、底部と口縁部2/3程度を欠損するものの、体下端は底部との接合面から剥離しており、全体を復元することができる。体部は球状を呈し、中央に最大径を持ち、頸部はやや外反して立ち上がる。現存の器高は12.5cm、最大径は13.4cm、頸部幅は6.6cm、口径は推定7.6cmで、器厚は5~6mmを測る。口縁部は平縁で、沈線が1条巡らされ、口内の沈線は認められない。体部の文様は体上半に限られ、2.5mm幅の浅い沈線により、3単位からなる変形工字文が施されるが、器表の剥落が顯著で、文様の結合部の様相は明確ではなく、文様も稚拙で、三角形のモチーフの内1単位は、横幅が非常に狭く菱形状をなす。文様の模式図は第49図1に



第12図 3号土坑実測図・出土遺物

図示したが、文様は四字状の彫り込みから斜めに沈線が垂下し、屈曲部で鋭く反転し、水平沈線として四字状の彫り込み直下から上向きに反転してきた沈線と組むように表現した。しかし沈線は実際には直線的ではなく錯綜しており、下限の2条の区画沈線の内上方の沈線が文様に参入するかは判然とせず、かなり恣意的に描出している。色調は褐色を呈し、肩部は橙褐色をなし。胎土は細砂粒・石英を多く含み、調整は外側とも丁寧に研磨される。

小型壺は変形工字文が施されることから、大洞A'式に位置付けられる。従って無文の深鉢もこれに近い年代が与えられる可能性が強く、周囲から出土した土器の年代とも合致する。

6 遺物集中地点

今回の調査では、縄文時代終末～弥生時代中期後半の遺物の集中地点が、10箇所で検出され

た。一部古墳時代の遺物も含まれるが、晩期大洞A式乃至A'式～弥生中期鱗沼式期までを主体とし、ブロック毎に時期的なまとまりが把握された。特に2ブロックでは大洞A式乃至A'式期、4bブロックでは大洞A'式期、4cブロックでは青木細式乃至山王III層式期、6aブロックでは鱗沼式期、1及び4aブロックでは量的には少ないが桜井式期のまとまりが検出され、ブロック毎の時期的な変遷を看取することができる。

遺物集中地点の調査は、全点ドットによる遺物取り上げを原則とし、極力記録化に努めた。その結果ドット点数で2,473点、総数で7,119点の遺物が出土した。特に多かったのは4aブロックで1,415点、次いで4bブロック、6aブロックであった(表1)。発掘調査段階では遺物のまとまりを大きく6つとして取り扱ったが、整理作業の段階で4・6の各ブロックを3つずつに区分し、全部で10のブロックとして捉え直した(第4図)。ブロック間の接合関係は、4bブロック出土の第28図207が4a・4cブロックの間で、同ブロック出土の第28図152が4aブロックの間で、また6aブロック出土の第36図281が5ブロックの間で認められた他は、5ブロックと6cブロック間で認められた1例の僅か4例に過ぎない。4ブロック内の3つのブロックは近接しており、ある程度相互の関連があったとしても、他のブロックにおいてはそれぞれが完結するまとまりであったことが想定される。

遺物を含む土層はいずれも暗褐色の粘質土で、砂質土や砂利層からは遺物は出土していない。各ブロック内の遺物出土のレベル差はほぼ15cmの範囲内であるが、ブロック間の出土レベルを見ると、2ブロックが高く106.5m前後、次いで6aブロックが106m前後、最も低い4bブロックが105.5m前後と、1mの高低差をもって形成されている。

遺物集中地点から出土した遺物は土器がほとんどで、他に石製品が309点と少なく、toolは図示したものに限られる。土器は縄文時代終末～弥生時代中期の土器と土師器が出土したが、弥生初頭の土器には縄文土器の伝統が色濃く残り、型式の区分が困難なものもあり、縄文終末～弥生中期前半を第I群土器とし、改めて同一の器種区分を適応した。厳密には縄文晩期大洞A式～弥生中期前葉鱗沼式まで、中期後葉の桜井式併行は第II群土器とした。

第I群土器の器種構成は、先学により甕、深鉢、鉢、高杯、壺、蓋の6器種が知られている(須藤 1973)。しかし甕と深鉢の区分は厳密とは言い難く、また本遺跡出土資料は縄文土器からの系統性を強く引いていることから、深鉢形、鉢形、浅鉢形、台付浅鉢形、壺形、蓋形の6器種に分類し、甕、高杯の呼称は差し控えた。なおこれらの分類に該当しない器種も若干みられ、それ等はその都度説明を加えることにする。

	第I群土器	第II群土器	土師器	石製品		第I群土器	第II群土器	土師器	石製品
1ブロック	524	86	556	10	4cブロック	558			126
2ブロック	270		1	22	5ブロック	430			15
3ブロック	265		17	1	6aブロック	477		345	66
4aブロック	1,338	29		48	6bブロック	227	6	522	9
4bブロック	1,041	31	28	12	6cブロック	43			16

表1 ブロック別遺物出土数

深鉢形土器：須藤 隆氏は旧稿で、最大径が口縁部にあり、口縁部から体部にかけて緩やかにすぼむものが深鉢で、「く」の字状に屈折する口頸部を有し、最大径が体部の上位に位置するものが甕と分類した(須藤 1973)。しかし後年提示された資料には、体上位に最大径を有するものも深鉢に分類されており(須藤 1983)、両者を厳密に区分することが困難と思われたため、本遺跡では甕と深鉢の区分は行わず、深鉢形として包括した。

A類：頸部にくびれを有するもの。いずれも口頸部が無文で、体部には縄文が施文されるが、屈曲の度合い、口頸部の幅、口端の形態等に差異が認められる。

B類：屈曲のみられないもの。いずれも平縁で、体部には縄文が施文され、口縁部が外傾するものと、内傾するものがある。

C類：胴部が内側し、頸部にくびれを持ち、体上半に装飾が加えられる。口縁部には山形突起が配される。破片資料では鉢形B類との区分が困難である。

鉢形土器：須藤氏は器高の低い器形を一括して鉢に分類するが、本遺跡では浅鉢形と深鉢形の中間形態で、口径に比し器高が同程度乃至それ以上のもので、中・小型のものを含めた。但し深鉢形や浅鉢形との区分が困難なものも存し、分類は厳密とは言い難い。

A類：口縁部から体部にかけて緩やかに内側するもので、装飾を持つ。体部資料のみではB類との絞りが困難なものもあり、また大型のものは本来深鉢形B類に分類区分すべきものかもしれないが、有文であることを考慮して本類に含めた。

B類：頸部から体部にかけて緩やかに内側し、口縁部が屈曲し、短く立ち上がるもの。

C類：外反する無文の頸部を有し、頸胴界に屈曲を持つ広口の鉢形で、口縁部に文様が施されるものと、無文で突起が配されるもののがみられる。

浅鉢形・台付浅鉢形土器：浅鉢形は口径に比し器高が半分以下の鉢・椀形の形態に代表されるが、例外も多々みられる。須藤氏の分類の鉢に相当するが、本遺跡の場合底部を欠損するものが多く、台付浅鉢形との分別が困難なものが多く、誤認を避ける意味で同一に扱った。

A類：体部が内側気味に立ち上がり、口縁部がほぼ直立乃至外傾するもので、口縁部が屈曲して僅かに外反するものも含むが、少数である。

B類：体部が内側気味に立ち上がり、口縁部が強く内側するもので、台付になるものが多く含まれる。

C類：体部から口縁部へとほぼ直線的で、外傾気味に立ち上るるもので、逆台形状をなすものや、底部が張り出すもの(第18図31)、口縁部が少し内側するもの(第30図209)がある。

D類：C類に類似するが、底部付近が外反し、体部から口縁部へと直線的に立ち上るものであるが、口縁部付近の破片のみでは、C・F類との分別が困難で、確認し得た例は第18図30に限られ、底部はやや丸味を帯びる。

E類：体部から口縁部へとほぼ直線的で、強く外傾するものであるが、蓋形との区分が困難で、口内に沈線が造らされたもの、器表に沈線による文様が施されるものを含めた。

F類：体部が内側気味に立ち上がり、頸胴界で大きく屈曲して口縁部が立ち上るもので、

頸部から口縁部へと外傾して直線的に立ち上がるものと、内嚢気味のものとがあり、後者には底部付近で屈曲し、そのまま丸底状をなすD類に類するものを含む可能性もある。

壺形土器：口頸部が部の半分より要縮するものを指すが、体上部が強く内傾し、頸部が短く立ち上がる広口の壺も含む。全体を窺える資料は少なく、類型化を図ることが困難であったため、文様施文の状況により区分した。

A類：大型の研磨された壺。体中央部に最大径を有し、球状を呈する(第28図208)。

B類：頸部または肩部に文様が施される壺。

C類：口頸部が無文で、部体に繩文が施されるもので、繩文のみの粗製壺や、肩部に沈線が囲繞される壺が含まれる。

F類：その他の壺。

蓋形土器：弥生土器特有の器種であるが、繩文終末期には土器館の蓋として鉢・浅鉢形が用いられた経緯もあり、浅鉢形との分別は困難である。口内に沈線を持たず、部体から口縁部にかけて直線的で、強く外傾するものを基準としたが、浅鉢形E類との区分は厳密とは言い難い。なお本遺跡では台状の摘み部を有する粗製蓋形や、扁平な逆皿状の蓋形は出土していない。

A類：体部が屈曲し、口縁部にかけて直線状な笠形のもの。

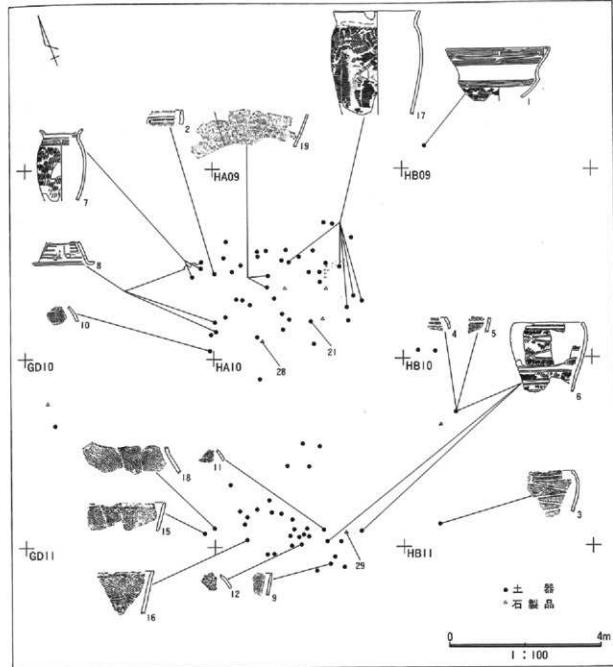
B類：口縁部にかけて内窓し、丸底状をなすと思われるもの。

1ブロック（第13～16図、図版9）

調査区の北西部、旧河道跡の北側に位置する。その分布は $4 \times 5\text{m}$ 、 $4 \times 4\text{m}$ の2つのブロックで構成され、約2m離れ、接合関係は認められない。出土した遺物の総数は620点で、繩文終末～弥生中期後半まで年代的に幅を持つ散漫なまとまりである。遺物の出土レベルは105.8～105.9mを測り、この付近は他のブロックよりも多くの湧水がみられた。なお第13図の範囲よりやや北側の2号住居跡付近からは、土師器の小片が多く出土した(556点)。1ブロックとは近接した位置にあり、ここで合わせて紹介する。

第I群土器（1～7・13・14・17）

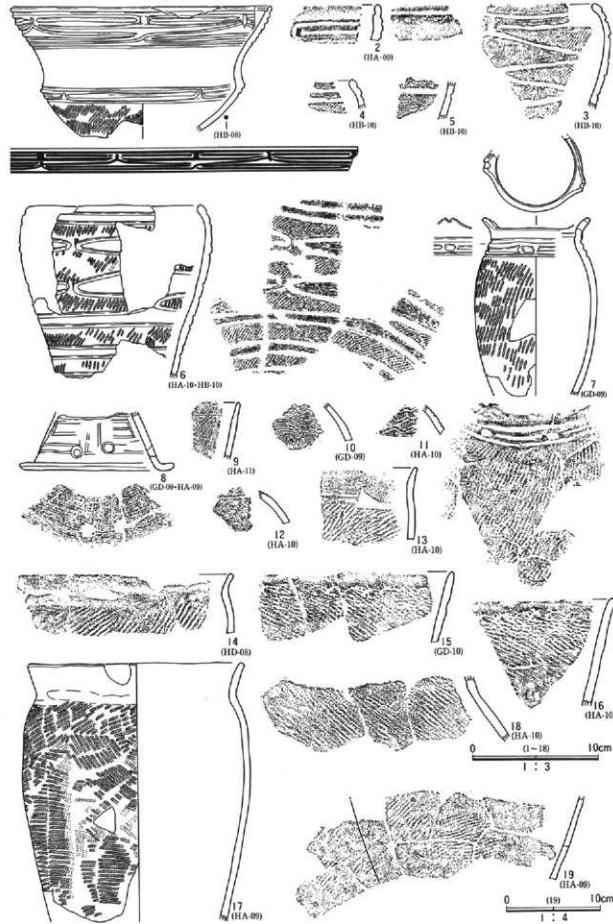
1は浅鉢形F類で、ブロックの中心からやや離れて、倒立の状態で出土した(図版7)。現存の器高が10.2cm、口径が20.8cm、屈曲部の径が16.2cm、器厚が4～5mmを測る。底部と口縁部の1/3程度を欠損し、口頸部は僅かに内嚢気味に立ち上がる。口頸部の文様は推定3単位からなる変形工字文で構成され、基点直下の底辺部には結合点は持たず、基点から斜位に垂下する沈線の反転部が、実測図正面では隣接する下段の沈線とのみ結合し、裏面ではスリットが加えられ、一定ではない。また反転部の直上にも幅広のスリットが加えられ、粘土がつまみ出される。体上部には口頸部の基点に一致して四字状の抉り出しが加えられ、体下部には細かい擦りのLRが施される。沈線の幅は2～3mmで、器面の研磨により浅く作成され、口内にも1条巡らされる。胎土は洗練され微細な石英が含まれ、内外面とも丁寧に研磨され、体下部には赤色顔料が付着する。変形工字文で構成されることから大洞A'式に位置付けられる。



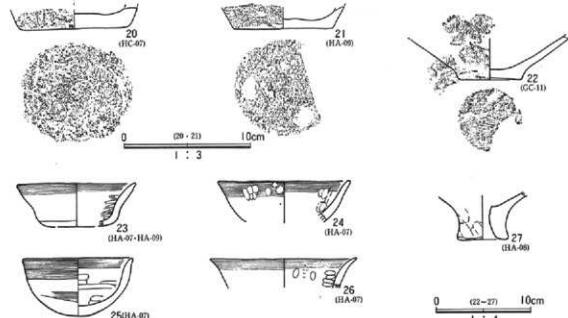
第13図 1ブロック遺物出土状況図

2は浅鉢形A類で、隆線文手法による工字文で構成される。口内には沈線が巡らされ、磨きはあまり丁寧ではなく、器表には炭化物が付着する。

3～6は鉢形A類で、同一個体である。6は1/3程度の破片で、現存の器高が13.5cm、推定口径は13.6cm、最大径は15.5cm、器厚は5～6mmを測る。口唇はやや肥厚し口内に張り出し、口縁部が強く内傾する。文様は口縁直下の沈線から幅の狭い膨去が加えられ、それを基点に変形工字文に類するモチーフが2段重ねられ、反転部は結合せず、3単位をなすものと思われる。沈線の区画内は無文で丁寧に研磨され、区画外は擦りの細かいLRで充填され、下位には2条の繩文帯が巡らされる。内面も丁寧に研磨され、胎土には石英を多く含む。3の器表には炭化



第14図 I ブロック出土土器(1)

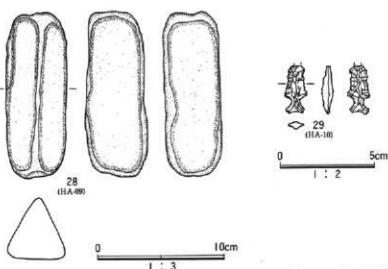


第15図 I ブロック出土土器(2)

物が若干付着する。5は体上半の破片で、磨消された部分に相当する。弥生中期初頭に位置付けられるであろう。

7は小型の長胴の鉢形で、体中央に最大径を持ち、体上半が内弯気味に立ち上がり、口縁部が屈曲し直立する。現存の器高は14cm、口径が7.1cm、最大径が9.6cm、器厚が5~6mmを測る。底部と口縁部の1/4を欠損し、口縁部には外傾する山形突起が配され、頂部に刻目を持つ。口内には1条の沈線が巡らされる。口唇には沈線が施されるが、研磨のため痕跡と化し、不明瞭である。頸部には突出直下とその中間に深い抉り込みを持つ匹字文が施され、沈線は浅く、匹字部の両脇は抉り出された粘土で多少盛り上がる。突起の単位は3単位で構成されると思われ、体部には長さ1.3cm前後のLRが、横位方向に回転施文される。口縁部及び内面は丁寧に研磨され、内面には炭化物が付着し、胎土は緻密で石英を多く含む。匹字状の文様で構成されることから大洞A式新段階~大洞A'式に位置付けられよう。

13・14・17は深鉢形A類である。13は頸部のくびれが弱く、口唇は薄く作出される。頸部に浅い沈線が微妙に認められるが、中途でなくなる。14は頸部の屈曲が強く、



第16図 I ブロック出土石器

口唇が薄く作出され、口縁直下に強いナゲが加えられる。17は体上半に最大径を持ち、底部と口縫部の1/2を欠損する。現存の齶高は20.5cm、口径は17cm、最大径は17.8cm、齶厚は5mmを測る。頸部の屈曲は強く、口頭部は研磨され、体部との境界に弱い段が形成され、体部には1.5cm前後のLRが縦横に回転施され、条の方向は一定ではない。内面の上半に磨きが加えられるが、あまり丁寧ではなく、胎子は石英・砂鉄などを多く含む。

第II群土器 (8~12・15・16・18)

8は口縁部が強く張り出すことから台付の脚部として図化した。表面の磨耗が著しく文様の詳細は不明瞭だが、2.5mm幅の平行沈線により方形区画状の文様が施され、また焼成後器表から穿たれたと思われる2個の孔が存する。色調は灰黄色を呈し、胎土は粗砂粒・石英を多く含む。9は口縁部等で、横位の区画沈線直下に2.5mm幅の平行沈線による鋸齒文が施される。10～12は蓋の胴上半部の破片で、10は平行沈線による連弧文と鋸齒文、11は重層する鋸齒文、12は锯齒文とその下にRLが施文される。

15・16・18は反の捺りが施される変形である。15・16は同一個体で、体部から口縁部へは直線的に立ち上がり、口縁部が無文となり、体部にはR Rが横位方向に回転施文され、口縁部との境界にはZ字状の結束が認められる。口唇部にも同一原体による施文が加えられるが、磨耗が甚しく痕跡をみるに留まる。

底部 (20・21) : 21は底径が7.8cmで、底面に凹みとアンペラ状の圧痕を有し、圧痕は凹みの中まで及んでいる。また側面には 7×4 mmの初期の圧痕がみられる(図版8)。しかし第I群・第II群のいずれの土器に属するかは判然としない。

土師器 (22~26) : 22は壺の底部で、底径が6.7cmを測る。23~25は壺、26は壺、27は高壺で、いずれも南小泉式に属するものと思われる。

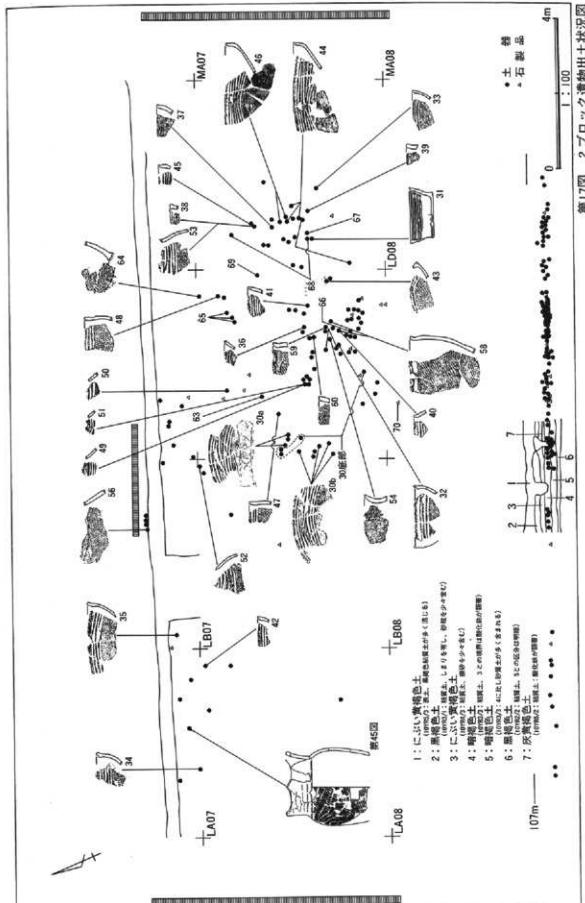
石器(27・28)：27は安山岩製の磨石で、断面三角形をなし、三面とも研磨され、下端に弱い敲打痕を持つ。28は頁岩製のアメリカ式石鎌で、先端は欠損し、基部が魚尾状に作出される。

2ブロック (第17~20・45図、図版9)

調査区の北東端、LA06～LD08区に位置し、他のブロックからは全く離れて形成される。中心となるのはLC07・LD07区の5×7mのまとまりであるが、周囲にも散漫な分布が認められ、ブロックは調査区の北側にまで広がるものと推察される。出土した遺物の総数は293点と少ないが、全てが第1群に属する土器で構成されており、特に大洞A式乃至A'式に位置付けられる極めて時間幅が限定されるまとまりである。遺物の出土レベルは106.4～106.5mで、他のブロックより高所に位置する。包含層である暗褐色粘質土は2分され、上層に遺物が多く出土し、下層には砂がやや多く混じり、遺物の出土は少ない。また本ブロックの北側には調査区内で検出された旧河道路跡の続きが、1995年の試掘調査で確認されており、本ブロックも旧河道路跡に沿って形成されたことが明らかになっている。

第Ⅰ群土器 (30~68・第45図)

30は浅鉢形D類に属する。プロックの中心の西側からまとめて出土し、30a・30b・底部の



17

3体別に接合し、図面上で復元した。30aと30bで口縁部が約1/2となり、推定口径は19.3cm、底径は11.7cm、器高は8cmで、器厚は4~6mmを測る。底部が張り出し、体下半が外反して、口縁部にかけて直線的に立ち上がり、底部は弱い丸底をなす。口内には沈線が巡らされ、口唇は薄く、丸棒状の形態を呈し、底部の張り出し直上にも沈線が回続される。文様は匹字状の単位文と斜位の補助単位文が交互に配置され、30aが後者、30bが前者の文様に相当し、3単位をなすと思われる。30bは三角形類似の匹字状の彫去と、輪郭沈線文による隆線文手法で文様が描出され、30aは単位文様間に左下がりの匹字状の抉り出しと、斜位の平行沈線文、そして水平に対向する匹字文で構成される(第50図1)。沈線は3mm幅で深く明瞭で、丁寧になぞられるが、隆線部や沈線間の磨きはあまり丁寧ではない。体部及び内面は丁寧に研磨され、胎土は細砂粒・滑石を多く含み、色調は黒褐色を呈し、器表には赤色顔料の付着が微かにみられる。匹字状の単位文と斜位の補助単位文の構成から、大洞A式新段階(A₂式)乃至大洞A'式古段階に位置付けられる。

31は浅鉢形C類に属する。ブロックの中心の東側から出土し、近接して44~46が出土している(図版7)。1/2強が欠損し、器高が4.7cm、口径が10.8cm、底径が8.9cm、器厚が4~5mmを測る。底部が張り出し、やや外傾して直線的に立ち上がる器形で、底部は平底であるが、中央が僅かに張り出す。口内には沈線が巡らし段と化し、口縁直下に文様帯が形成される。文様は平行沈線間に上下対向する匹字状の彫去が加えられ、隆線文手法で描出され、4単位をなすと思われるが、文様下端の区画沈線は持たない(第50図2)。沈線は3mm幅で深く明瞭で、底部の沈線のみ浅く細い。内外面とも丁寧に研磨され、胎土は砂粒・金雲母を多く含み、色調は暗褐色を呈す。対向する匹字文の構成から、大洞A式新段階(A₂式)乃至大洞A'式古段階に位置付けられる。

32~37・41~42は浅鉢形A類である。32は1/4が残存し、推定口径が12.2cmで、口縁部が屈曲し僅かに外反する。口内の屈曲直上に沈線が巡らされ、口唇は薄く、山形突起が配される。口縁直下は無文で、口頸部には平行沈線間に口唇の突起に符合して匹字状の彫去が加えられるが、左端の隆線の太さから推して、匹字状の彫去が上下交互に描かれる可能性がある。胎土は細砂粒を多く含むが、赤色粒子も少々含む。33は口縁直下に2条の沈線が回続され、体部にはLRが施文される。口内には沈線が巡らされ、その直下に稜が形成される。器厚は3~4mmと薄く、丁寧に研磨されるが、器表の体部は磨耗が著しい。34は口縁部が僅かに外反し、口内には明瞭な段が形成される。口頸部には平行沈線が施され、隆線文手法による文様で構成され、体部にはLRが施文される。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰色~灰白色を呈し、器表には赤色顔料が付着する。

35~42は同一個体で、口縁部が僅かに外反し、口内に稜が形成され、沈線が巡らされる。口唇には突起が配されるが、破損のため形態は不明瞭である。文様は31同様平行沈線間に上下対向する匹字状の彫去が加えられ、匹字部分は抉り出された粘土で多少盛り上がる。口縁及び隆線部は丁寧に研磨されるが、体部と内面はやや粗雑で、胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒子も少々含む。色調は灰白色を呈す。36は口唇に突起が配され、口縁直下に2条の沈線が回続さ



第18図 2ブロック出土土器(I)

れるが、沈線間は平坦である。外面とも丁寧に研磨され、胎土は石英・滑石を多く含む。37は無文で、口縁に沿って丁寧なナデが加えられ、弱い凹線状をなす。胎土は細砂粒・石英を含み、色調は灰白色を呈す。41は口縁部は外反しないが、口内に弱い稜が形成され、沈線が巡らされる。文様は5本の浅い平行沈線が施されるが、上位2本目の沈線の右端が途切れしており、陽刻部が反転するものと思われる。外面とも研磨されるが、粗い仕上げで、胎土は細砂粒を多く含み、色調は淡黄橙色を呈す。

38・39は鉢形C類に属する。38は口唇が肥厚し、口唇及び口内に沈線が巡らされる。39は口唇が平坦で、灰白色を呈する。いずれも器表は丁寧に研磨されるが、内面はややざらつく。

40は鉢形B類に属する。口内に沈線が巡らされ、口頭部には平行沈線による隆線文が作出され、沈線はやや平坦な工具が用いられる。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。

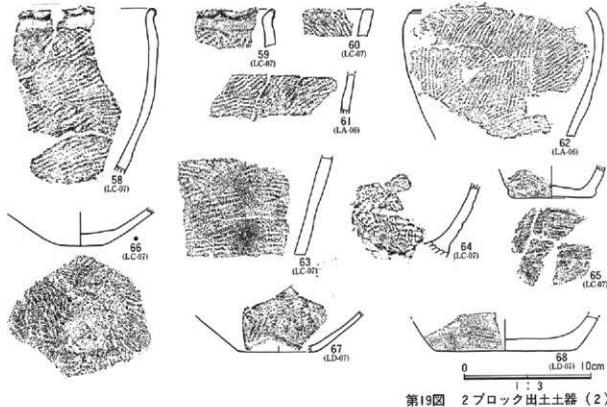
43は浅鉢形F類の体部資料で、屈曲部の沈線間に断続する沈線と突起が交互に配される。体部にはLRが施文され、赤色顔料が僅かに付着する。器面の調整はやや粗く、胎土は細砂粒を多く含む。

44～46は同一個体で、浅鉢形・台付浅鉢形B類に属し、台付と思われる。いずれもブロックの中心の東側から出土し、近接して31が出土している(図版7)。44をもとに口径を復元すると26.6cmを測る。体部は弱い内唇気味に立ち上がり、頸部で強く内屈し、ほぼ直立するが、口縁部は僅かに外反する。口内には弱い稜が形成され、沈線が巡回し、口唇は丸棒状をなす。口縁直下は無文で、粘土が削り出されたため、区画沈線が消失しつつあり、隆線部とは段差が明瞭である。文様は2.5mm幅の沈線で、変形工字文が描かれる。変形工字文は幅広の四字状の彫去を基点とし、斜位に垂下した沈線が結合せずに反転し、水平沈線として底辺部の四字文まで続く。三角形の区画内には沈線が1本充填され、彫去部の両脇は粘土が多少盛り上がり、文様帶の幅は狭小で、横長扁平の構成となる(第50図3)。器厚は体部が3.5～4.5mm、頸部が5～7mmと一定ではなく、色調は灰白色で、一部黒斑がみられる。器面は丁寧に研磨されるが、文様の陽刻部はやや粗く、内面に横位の擦痕を残す。胎土は洗練された粘土が用いられ、微砂粒・石英が含まれる。なお44と46は体部の一端で接合する可能性があるが、確定するには至らず別々に提示した。本例は変形工字文が施文されることから、大洞A式に位置付けられ、本ブロックの年代の下限を確定するものである。

47・48は同一個体で、頸部から体部にかけて緩やかに内彎し、口縁部が弱く外反する鉢形である。口縁直下には3条の平行沈線が巡回されるが、沈線は浅く、沈線間は狭い。体部は0段多条LRが施文され、器面はややざらつき、胎土は砂粒を多く含む。

49～53は壺形B類に属する。49・51は同一個体で、肩部に沈線が3条巡らされる。器面の磨耗は著しく、胎土は細砂粒を多く含み、色調は淡黄色を呈す。50は隆線文手法による工字文で構成されるが、体部には細い撚りのRLが施される。52・53は同一個体で、31同様に平行沈線間に上下に対向する四字状の彫去が加えられ、体部にLRが施文される。沈線はなぞられるが、はみ出した粘土の処理は粗で、粗々しさを残し、胎土は石英を多く含む。

54・56は壺形C類に属する。54は頸部が強く外反し、口唇は尖锐で、口頭部は丁寧に研磨さ

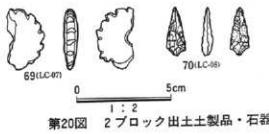


第19図 2ブロック出土土器(2)

れる。体部にはLRが微かに認められるが、境界は明瞭ではない。内面は研磨されるが、ややざらつき、胎土は細砂粒・金雲母を多く含む。色調は淡黄色を呈す。56は頸部の粘土が削り出され、体部とは段差をもって明確に区分される。体部は0段多条LRが施文されるが、頸部との境界付近はナデ調整で筋が消失し、赤色顔料の付着が僅かに認められる。内面はややざらつき、胎土は細砂粒・石英・金雲母を多く含み、色調は灰白色～灰黄褐色を呈す。

55・57・61・62は壺形C類に属する。原稿執筆時それぞれが接合することが判明したため、第45図に改めて図示した。ブロックの中心から西へやや離れた地点で出土し、近辺からは34・35・42が出土している。底部は欠損するが、口縁・体部が1/2強残存しており、体上部に最大径を持つ長胴の壺形である。現存の器高が16.3cm、口径は12.7cm、頸部は11.6cm、最大径は15.4cm、器厚は5～6mmを測る。口唇はやや平坦で、推定6単位の山形突起が配され、突起は尖鋭になるものと、平坦に作出されるものの2通りがある。口頭部はやや外反気味に立ち上がり、傾きは部位によりややばらつく。器面は横位に丁寧に研磨され、体部との境界に明瞭な段差が作出され、体部はLRが密に施文される。また製作時の輪積痕が明瞭に観察され、胎土は細砂粒・滑石を多く含む。

58・59は同一個体で、深鉢形A類に属する。体部がやや内唇気味に立ち上がり、口縁部が屈曲し外反する。最大径は体上部にあり、口唇は小波状をなし、



第20図 2ブロック出土土製品・石器

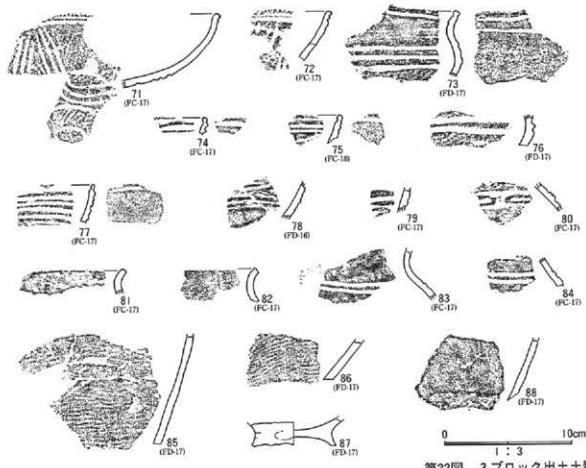
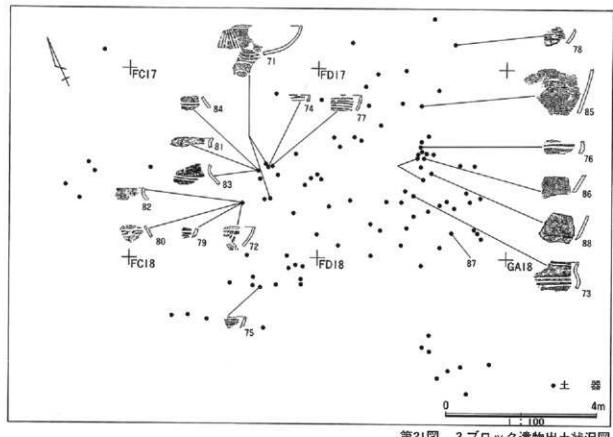
その直下には強いナデが加えられる。体部は筋があまり明瞭ではないが、LRが施文される。内面にもナデが加えられ、胎土は粗砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。

60は深鉢形B類で、口唇は平坦で内傾し、口縁直下からRLが施文される。色調はにぶい黄橙褐色を呈し、内面は丁寧に研磨され、胎土は砂粒を多く含む。器厚は8mmで、推定口径が7.8cmと小さいことから、蓋形の台状のつまみ部の可能性もある。

63・64は深鉢形の体部破片で、いずれもLRが施文される。64は底部付近で、屈曲がみられ、下端に磨きが加えられる。

65~68は底部資料である。65は底径が7cmで、弱い上げ底をなし、底面は9mm幅の箇状工具で、一定方向に削りが加えられる。側面はやや張り出し、弱い指頭圧痕がみられ、内面は凸としており雜な作りである。66は底径3cmの浅鉢形の底部で、体部にはLRが施文され、赤色顔料が付着する。胎土は細砂粒を多量に含み、器表はややざらつく。67は浅鉢形の底部で、体部にLRが施文される。器面は磨耗が著しく、胎土は細砂粒・滑石を多く含み、色調は灰白色を呈す。68は底径が11.2cmで、側面は無文で丁寧に研磨され、胎土は細砂粒を多く含む。深鉢形乃至大型壺の底部と思われる。

土製品・石器(69~70)：69は有孔の土製円盤で、推定径は3.2cm、孔径は1.1cm前後を測る。孔付近が厚く縁辺に向かうにしたがい薄く、側面には刻目が加えられる。器面はナデが加えられ、指頭圧痕が残り、胎土は金雲母・細砂粒を含む。70はチャート製の有茎石鏃で、長さ26mm、幅10mm、重量1.1gを測る。基部は切断されており、アスファルトが若干付着する。



第22図 3ブロック出土土器

3ブロック (第21・22図、図版10)

調査区の西側、FC17・FD17を中心とした旧河道跡の南に位置する。ブロックの中心は7×7mの散漫なまとまりで、遺物の総数は283点で、ほとんどが第I群に属する小片の土器である。遺物の出土レベルは105.7m前後で、隣接の4aブロックとほとんど変わらない。

第I群土器 (71~88)

71・72は浅鉢形A類として図化した。推定した口径は16cm前後、器高は6cm弱で、体部から屈曲を持たずに、そのまま底部に至る椀形を呈する。口縁部は僅かに外反し、口内に弱い稜が形成され、口外には刻目が加えられる。口縁直下は平行沈線が2条回繰り、体部は3本単位の沈線で台形状の区画が描出され、区画内がLRで充填される。底部は2重の円文が描出され沈線間のみLRで充填され、中心は無文となる。体部の台形状区画間に網文？がみられるが、器表の磨耗が著しく、判然としない。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰黄色を呈す。本例は磨消網文で構成され、3本単位の沈線が用いられることがから、弥生中期初頭に位置付けられ、蓋形B類に属する可能性が高い。

73~76は同一個体で、鉢形C類に属する。口縁部は波状口縁をなし、口端に沿って沈線が回繰りされ、口内にも間隔をおいて2条の沈線が巡らされる。体上位には3条の平行沈線が巡らされ、その直下にLRが施文される。器面はざらつき、胎土は細砂粒を多く含む。口内に2条の

沈線が巡らされることから、大洞A'式に位置付けられよう。

74・75・77~79は浅鉢形A類に属する。74は口唇がやや平坦で、深く明瞭な沈線で隆縁文が描出される。75も同様の土器であるが、沈線は74ほど深くはない。77は口唇が薄く作出され、6本の平行沈線が施されるが、文様構成は明瞭ではない。内面は研磨されるが、器表はざらつき、胎土は細砂粒・玉石を多く含む。78は器面の磨耗が著しく、平行沈線が施される以外は判然としない。いずれも大洞A'式新段階~大洞A'式と思われる。

80~84は壺形B類に属する。80は肩部に隆縁文手法で工字文が描出される。81~84は同一個体で、肩部に2条の平行沈線が巡らされる。その直下にも沈線文様を持つようであるが、判然としない。81・82は口唇が平坦で外削ぎ状なし、口内には弱い四線がみられ、口縁部として図化したが、器表のざらつきが著しく、擬口縁の可能性も考えられる。いずれも灰白色を呈し、胎土は細砂粒・赤色粒子を含む。

85は深鉢形の体部破片で、横走するLRが施文される。86も一部横走するLRが認められる。87は台付浅鉢形で、底径は6cm、底面の器厚は5mmを測る。内面は丁寧に研磨されが、脚部内面はやや粗雑で、屈曲部にナデが加えられる。

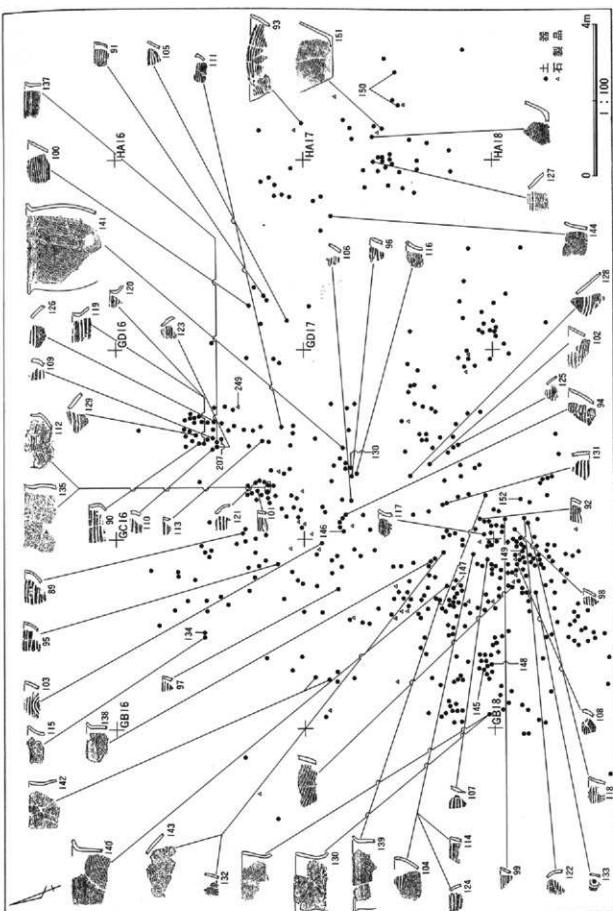
4aブロック（第23~25図、図版6・10）

調査区の西側の遺物集中地点は、当初4ブロックとして包括して調査を進めた。しかし整理作業において、このまとまりが3つのブロックとして再編し得ることが判明したため、旧来の4ブロックにアルファベットを付すことで、細別名とした。ブロックは旧河道跡の直ぐ南のGB16~HA18区に位置し、その範囲は11×17mを測るが、GB17区付近、GC16区付近、HA17区付近と分布の多寡から、更に細かなブロックに分離することができる。出土した遺物の総数は1,415点と、全ブロック中最も多いが、小片がほとんどで、第I群土器が圧倒的に多く、第II群土器も少数だが出土している。ブロックの南西部は4bブロックと接しており、2点だけであるがブロック間の接合関係が認められる（第27図152、第28図207）。遺物の出土レベルは105.6~105.7mで、4bブロックよりは若干高い位置にある。

第I群土器（89~131・133~137・145~151）

89・91・92・95~97・101~104は浅鉢形A類に属する。89は口縁部が僅かに外反し、口内に強い稜が作出される。文様は匹字状の彫去と、その直下の沈線間が幅広になることから、変形工字文で構成されると思われる。匹字状の抉り出しは浅いが、両脇は粘土でやや盛り上がる。内面は丁寧に研磨されるが、器表はざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は暗赤褐色を呈す。91は厚径が4mm弱と薄く、口唇は丸棒状をなす。文様は2mm幅の細い沈線で施文され、3段目の沈線が反転して5段目の沈線との連結が見取れることから、変形工字文で構成されると思われる。器面は磨耗が著しく、色調は灰白色を呈す。92は口唇の粘土がやや剝離しており、擬口縁の可能性もある。隆縁が収束していることから、匹字状の彫去の可能性もあるが、器表の磨耗が顕著で判然としない。内面は丁寧に研磨され、色調は灰白色を呈す。

95は器面の磨耗が顕著で、口内に段が作出されるが、沈線は明確ではない。口唇は薄く、文



第23図 4aブロック遺物出土状況図

様は斜位に垂下する沈線がみられることから、変形工字文で構成され、文様の下端に底辺の結合部がみられる。色調は灰白色を呈す。96は口内に沈線が巡らされ、文様は匹字状の彫去が加えられる。胎土は石英を多く含み、色調は灰白色を呈するが、遺存状況はあまり良くない。

97・103は同一個体である。口唇は平坦で、文様は2.5mm幅の深く明瞭な沈線で、口縁直下に3条の平行沈線、体部は2本単位の曲線文が施される。器面はざらつきが、一部磨きがみられ、胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は淡黄色を呈す。101は口内に段が作出され、口唇は薄く外反する。器面は磨耗し、色調は器表が黒褐色、内面が灰白色を呈する。

102は口唇が薄く作出され、文様は4mmの幅広の沈線で施文される。反転部が認められるところから、変形工字文の系統を引くと思われるが、沈線間にはR L ?が施文される。器面はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。104は口縁直下に3条の沈線が回繞され、体部には横走するLRが施文される。内面は丁寧に研磨されるが、器表はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含む。なお口縁部資料として図化したが、擬口縁の可能性もある。

90は浅鉢形B類で、口縁部が強く内弯し、而し屈曲して外反する。口内には槽が形成され、口唇は薄く尖続となる。口縁部には3条の平行沈線が回繞され、屈曲直下にも文様が認められるが、器表は削離しており、判然としない。器面は磨耗が著しく、色調は淡黄橙色を呈す。

93・94・98・99は浅鉢形F類に属する。93は1/4強の破片で、推定口径が17.2cmを割り、口縁部は緩く内弯する。文様は口縁直下の沈線に狭小な彫去が加えられ、それを基点に横長の変形工字文で構成され、基点直下の結合点は判然としない。器面は丁寧に研磨されるが、磨耗がみられ、色調は灰白色～淡黄色を呈す。94も口縁部が緩く内弯するが、器表の磨耗が顕著で、文様は明確ではなく、微かに7本の沈線が確認され、口内にも沈線が巡らされる。内面は丁寧に研磨され、胎土は石英を多く含み、色調は灰白色を呈す。98・99は4bブロック出土の第27図152と同一個体で、ブロックの西南から出土した。口縁部は直線的に立ち上がり、器壁は4.5mmと薄く、沈線内は丁寧なナゾリが加えられるが、陽刻部はやや粗雑である。

100は口縁部が外反気味に立ち上がり、浅鉢形C類乃至D類に相当すると思われる。口内に沈線が巡らされ、口唇は薄く尖続となる。文様は平行沈線を基本とするが、幅は一定ではなく、半截状工具ではなく、2mm幅でやや鋭利な箇状工具で施文される。沈線に反転部が看取されるところから、変形工字文で構成されると思われるが、沈線が細く沈線間が幅広であることから、大洞A'式以降に属する。器表はざらつきが、内面は磨きが加えられ、胎土は細砂粒・石英を多く含む。色調は灰黃色～灰白色を呈す。

105は浅鉢形C類乃至D類の口縁部資料で、やや外反する。沈線による逆三角形状のモチーフで構成され、変形工字文風の文様をなすと思われる。内面は丁寧に研磨されるが、器表はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含む。

106～110は浅鉢形の頭・体部資料である。107は3mm幅の沈線で、工字状の文様が描出され、結合部は彫去した粘土で盛り上がる。磨耗が顕著で、色調は灰白色～黒褐色を呈し、器表に赤色顔料が僅かに付着する。108は口縁部近辺の破片で、変形工字文で構成される。器面は磨耗が顕著で、色調は灰白色を呈す。109・110は同一個体で、口縁部付近が弱く外反し、文様は平



第24図 4 a ブロック出土土器 (1)

行沈線で太い隆線文が作出される。内面は丁寧に研磨されるが、沈線間はややざらつき、胎土は細砂粒・石英を多く含む。色調は黒褐色を呈し、4bプロック出土の第27図207に類似する。

111・112は台付浅鉢形F類の体部資料である。いずれも肩曲部の隆帯に刻目が加えられ、体部には細かい擦りのLRが施文される。器面の磨耗が顕著で、色調は灰白色へ淡黄色を呈す。111は隆帯直下に2条の沈線が囲繞され、112は肩曲部の径が11cmを測る。

113・114は浅鉢形C類に属すると思われるが、判然としない。いずれも口縁部が直線的に立ち上がり、口唇が外傾し、口縁直下に沈線が巡らされる。113は沈線直下に細かい擦りのLR?が施され、色調は淡黄色を呈する。114は内面が丁寧に研磨され、黒褐色を呈す。

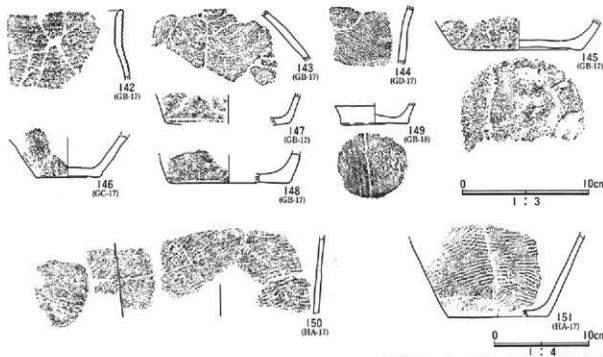
115~118は鉢形C類に属する。115は口唇が平坦で、山形突起が配される。器表はやや丁寧に研磨されるが、内面は粗雑で、胎土は砂粒を多く含む。116は口唇がやや平坦で、突起の頂部に刻目が加えられる。器面はややざらつき、胎土は砂粒・石英を多く含む。117は口唇が平平坦で、口内に沈線が巡らされる。器面はざらつき、胎土は砂粒を多く含み、色調は灰白色へ灰黄色を呈する。118は口唇に2山状の突起が配され、頂部の刻目で粘土が内側に弱く張り出す。口縁部は3条の平行沈線が囲繞され、内面はやや丁寧に研磨されるが、器表はざらつく。

119~124は鉢形B類に属する。119・120は同一個体で、口縁部が強く屈曲し、外反して立ち上がる。口唇は薄く丸棒状をなし、口縁直下及び肩曲部に沈線が巡らされる。区画沈線下の体上部には四字状の彫去がみられ、変形工字文で構成されると思われる。器面はざらつき、胎土は粗砂粒・赤色粒子を多く含み、色調は灰白色を呈す。121は文様下端に工字状の彫去が看取される。磨耗が顕著で、色調は淡黄橙色を呈す。122・123は同一個体と思われる。123の文様の上部には四字状の彫去と、その直下に沈線の反転がみられ、変形工字文を構成すると思われる。頸部と内面は丁寧に研磨されるが、体部はややざらつき、色調は黒褐色を呈す。124は文様上端に工字状の彫去がみられる。内面は丁寧に研磨されるが、器表はざらつき、胎土は細砂粒を多量に含む。色調は黒褐色を呈し、赤色顔料が微かに付着する。

125~127・129・134は蓋形の肩部・体部資料である。125は沈線の反転がみられることから、変形工字文で構成されると思われる。器厚が4mm弱と薄く、器面はざらつき、胎土は細砂粒・滑石を多く含み、色調は灰白色を呈す。126・129は同一個体で、3条の平行沈線が囲繞される。肩曲部にも弱い凹線がみられ、体部にはLR?が微かに認められる。器面は粗雑で、胎土は粗砂粒を多量に含み、色調は灰白色を呈す。134も同一個体と思われ、LR?が施文される。127は平行沈線が3条囲繞され、体部にはLR?が施文される。沈線は深く明瞭であるが、沈線間の幅は一定ではない。胎土は細砂粒を多量に含み、色調は灰白色を呈す。

128・130は蓋形に属すると思われるが、確定的ではない。128は3条の平行沈線が囲繞され、その下に曲線的な文様が描出され、細かい擦りのLR?が施される。調整・胎土・色調は浅鉢形の102に類似する。130は蓋形のつまみ部として図示した。底径が4.2cmで、上げ底をなし、側面は弱く張り出し、指頭によるナデが顕著にみられる。胎土は粗砂粒を多量に含み、色調は灰白色を呈す。いずれも蓋形とする積極的根拠に欠ける。

131は台付の脚部で、4条の平行沈線が巡らされるが、下から2本目の右端が途切れており、



第25図 4a ブロック出土土器(2)

工字状の文様をなすと思われる。器面は研磨されるが磨耗しており、色調は淡黄橙色を呈する。

133は2本の沈線による円文が描出され、区画外にLRが施される。断面は平坦で、浅鉢形乃至鉢形C類の底部の可能性が高い。

136は壺形の口頸部で、推定口径は12cmを測る。口唇はやや平坦で、口縁付近に磨きが加えられるが、他の部位はあまり丁寧ではない。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。

135・137は深鉢形A類に属する。135は最大径が体上部にあるが、口縁部とはほとんど変わらない。口唇は薄く作出され、やや凸凹し、外に弱く張り出す。口縁部にはナデが加えられるが、雑な仕上げで、体部にはLRが施文される。内面はやや丁寧に研磨され、胎土は粗砂粒を多量に含む。137は口内に稜が形成され、口唇は弱く面取りされ、やや平坦である。口縁直下には対状工具で横側に削りが加えられ、体部との境に弱い段が作出され、体部には縱位方向に条痕文が施される。条痕文は条溝が細く、条間が不揃いで、器厚は4.5mmと薄い。色調は黒褐色を呈し、内面は丁寧に研磨され、胎土は細砂粒・石英を多く含む。浮線文系の条痕文土器に関連を持つと思われ、大洞A'式に位置付けられよう。

145~151は体部・底部資料である。145は底径が10cmで、底面は弱い上げ底をなし、凹凸に富む。側面は無文でややざらつき、内面は研磨される。146は底径が5cmで、弱い上げ底で、側面は無文となる。器表はざらつき、内面は研磨される。147は浅鉢形D類の底部であるが、外反の状況は判然としない。推定底径は9.8cmで、丸底を呈し、器面は研磨されるが、磨耗が著しい。148は推定底径が9.5cmで、側面は無文である。149は底径が5.6cmで、側面が張り出す。器面の磨耗が顕著で、底面に笠葉状の圧痕が確認される。色調は灰白色を呈す。150は体部資料で、推定径が22.2cmを測り、LRが施文される。器面はややざらつき、胎土は細砂粒を多く

含む。151は推定底径が10.4cmを測り、体部には横走するLRが施され、底部付近は弱いナデが加えられる。内面・底面は丁寧に研磨され、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。

第II群土器（132・138～144）

132・142～144は平行沈線が施される。132は2.5mm幅の平行沈線で重層山形文、142は3.5mm幅の平行沈線で連弧文、143は2.5mm幅の平行沈線で渦巻文、144は1.5mm幅の平行沈線で弧状の文様が施される。143のみ壺形で、他は變形になるとと思われる。

138～141は繩文施文の要形で、いずれも口縁に最大径を持つ。138は頸部にナデが加えられ、体部には太さの異なる擦りのLRが施される。頭部との境界にはZ字状の結束が認められ、口唇は剥落して文様の有無は判然としない。胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は黒褐色を呈す。139は推定口径が14.9cmで、口縁部が強く外反する。口内及び口縁直下には強いナデが加えられ、口唇と体部にはLRが施される。頭部との境界にはZ字状結束がみられ、胎土は細砂粒・金雲母を多く含み、色調は黒褐色を呈す。140は口縁部が強く外反し、直下にナデが加えられる。体部には羽状の擦文が施される。附加条Rのみが印され、軸は圧痕としては残らない。口唇にも繩文が施されるが、原体は判然としない。内面はざらつき、胎土は細砂粒・滑石・金雲母を多く含む。141は推定口径が17.7cmを測り、口縁部が強く外反し、直下及び口内にナデが加えられ、体部との境界にはS字状結束がみられる。S字の入組部直下のみに深い条が看取されることから、LRの開いた端の結節が回転され、一方の条が強調されたものと思われる。またその下には太さの異なる擦りのLRが施される。胎土は細砂粒・金雲母・石英を多く含み、内面はややざらつく。

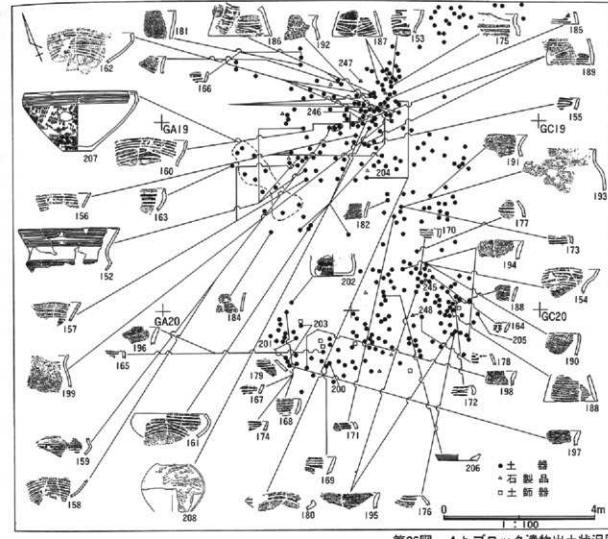
石器（249）：249は頁岩製の有茎石錐で、長さ38mm、幅10.5mm、重量2.3gを測る。完形であるが、先端はあまり尖端ではなく、基部にはアスファルトが付着する。

4bブロック（第26～28図、図版10）

4aブロックの西南にはほぼ接するように位置する。その分布は $5 \times 6\text{ m}$ と $3 \times 6\text{ m}$ の2つのブロックで構成され、一部で連続するものの、双方のブロック間での接合関係はみられず、北側の小ブロックで比較的大きい破片が出土した。出土した遺物の総数は1,112点で、4aブロックに次いで多く、特に大洞A式に比定される土器が多数を占め、第II群土器も少数ではあるが出土している。遺物の出土レベルは105.45～105.65mで、約20cmのレベル差と全ブロックの中では最もばらつきが大きい。なお本ブロックに主要な分布を持つ第27図152は4aブロックと、第28図207は4a・4cブロック間で接合関係が認められる。

第I群土器（152～180・185～208）

152～160は浅鉢形下類に属する。152・156～159は同一個体で、北側の小ブロックで出土し、接合資料や同一個体（第24図98・99）が4aブロックの南西部にも認められる。体部は内側気味に立ち上がり、頸胴界で大きく屈曲し、口縁部が直線的に立ち上がる。152は口縁部が1/4弱の破片資料で、現存の器高は8.4cm、推定口径は20.2cm、周辺部径は17cm、器厚は4～5mmを測る。口内に沈線が巡らされ、口唇は丸棒状をなし、口頸部文様は推定3単位の反転部が結合する変



第26図 4 b ブロック遺物出土状況図

形文字で構成される（第50図4）。文様の上下幅は4.5cmで、2.5mm幅の沈線で直線的に描出され、匹字部の両脇は抉り出した粘土で多少高まる。文様直下は約3cm幅の無文帯となり、丁寧に研磨される。屈曲部には刻目帯が巡らされ、所々匹字状の彫去が加えられ、体部にも変形工字文が施されるが、モチーフは判然としない（158・159）。器面はやや丁寧に研磨され、胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は灰白色～灰黃褐色を呈す。

153は北側の小ブロックからの出土で、口頸部は緩く内彎し、口内の沈線が段と化し、口唇が外反する。文様は3mm幅の深く明瞭な沈線で描出され、上下に匹字状の彫去がみられることがから変形工字状の文様で構成されると思われ、匹字部の両脇は抉り出された粘土で多少高まる。器面は丁寧に研磨されるが、器表はやや磨耗し、色調は灰白色を呈す。154は南側の小ブロックから出土し、口頸部は緩く内彎し、口唇に沈線が施される。文様は2ブロックの第18図30に類似し、三角形類似の匹字状の彫去と、輪郭沈線による隆線文手法で単位文が構成され、左端に補助単位文と思われる斜位の沈線が認められる。器面は丁寧に研磨されるが、器表はやや磨耗し、色調は灰白色を呈す。

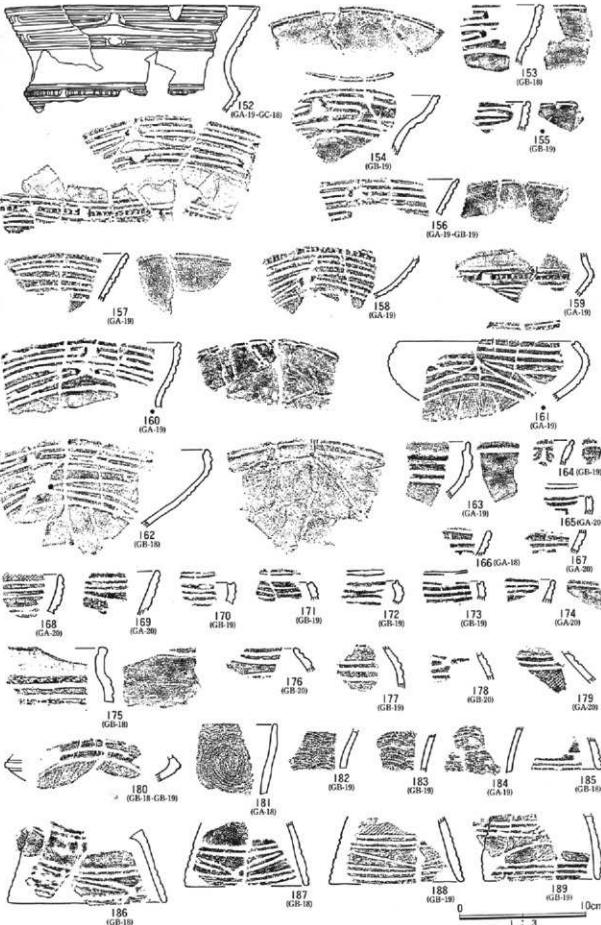
155・160は同一個体で、北側の小ブロックから出土した。口頸部は緩く内脣し、口内に沈線が巡らされ、口唇はやや外傾する。160の口頸部は1/4が残存し、推定口径は14.9cmを測る。文様は3mm幅の深く明瞭な沈線で描出され、上・下段に匹字状の抉り出しを持つ横長扁平の変形工字文で構成され、匹字部の両端が抉り出した粘土で多少高まる。153の文様に類似し、器面は丁寧に研磨されるが、器表はやや磨耗し、色調は灰白色～にぼい橙色を呈し、赤色顔料の付着が微かにみられる。

161・162・163は浅鉢形B類に属し、いずれも北側の小ブロックから出土した。161は口縁部が強く内屈し、頸部に最大径を持ち、内傾する口唇に沈線が施される。口頸部は1/4弱が残存し、推定口径は14cm、最大径は16cm、器厚は5mmを測る。口縁部に沿って2条の沈線が周続され、その直下に狭く深い匹字状の彫去が加えられ、それを基点に斜位の沈線が垂下され、区画内は間隔を置いて2本の沈線が充填される。沈線は2～2.5mm幅で、体部には燃りの細かいLRが施される。器表は本来暗褐色で、滑沢に富むが、磨耗が著しく、部分的に痕跡を留めるのみで、また内面も丁寧に研磨されるが、磨耗する。赤色顔料の付着が微かにみられる。162は口縁部が強く内脣し、やや内傾気味に立ち上がり、口内は沈線が段と化し、口唇は薄く丸棒状をなす。口頸部は1/5が残存し、推定口径は20.5cm、器厚は5mmを測る。文様は口頸部に四字文が施され、連続して体部には変形工字文が施され、匹字部直下で沈線が反転し、粘土の高まりがみられる。しかし器面の磨耗や剥落が頗著で、文様の詳細は判然としない。色調は灰白色～浅黄橙色を呈す。163は口内の沈線が段と化し、口縁部が弱く外反し、口唇は薄く丸棒状をなす。口縁直下は粘土が削り出され、区画沈線が消失したため、隆線部との段差が明瞭で、その下は平行沈線で3本の太い隆線文が作成される。内面は丁寧に研磨されるが、沈線間及び体部はややざらつき、胎土は細砂粒。石英を多く含む。色調は黒褐色を呈し、4aブロック出土の第24図109・110と同一個体で、原稿執筆時207と接合することが判明した。

168・169・174は浅鉢形A類に属する。168は口唇が丸棒状をなし、口縁部にはLRが施される。文様は深く明瞭な平行沈線が施され、沈線は2mm幅のやや銳利な工具が用いられ、沈線間及び内面は丁寧に研磨される。胎土は微砂粒・石英を含み、色調は灰白色～淡黄色を呈す。169は口唇が丸棒状をなし、口縁部に3本の平行沈線が巡らされ、斜位の沈線と底辺をなす水平沈線が認められることから、変形工字文で構成されると思われる。器面は磨耗が著しく、色調は灰白色を呈する。径が小さいことから、台付の脚部の可能性もある。174は口内に沈線が巡らされ、口唇は薄く丸棒状をなす。口縁直下には3本の沈線がみられ、2本目が途切れてしまい、匹字状の文様をなすと思われる。沈線は2mm幅で浅く不明瞭で、器表の研磨はあまり丁寧ではない。胎土は細砂粒を多く含む。

164は浅鉢形C類と思われ、口縁部が直線的に立ち上がる。口内に沈線が巡らされ、口唇は丸棒状をなし、口縁直下の沈線に幅狭の深い彫去が加えられ、変形工字文で構成される。器面は脆弱でざらつき、色調は浅黄橙色～暗褐色を呈す。

165・170～173は浅鉢形乃至台付浅鉢形B類に属する。165は口唇に沈線が巡らされ、口縁直下に匹字状の彫去がみられる。磨耗が頗著で、色調は灰白色を呈す。170・171は同一個体で、



第27図 4bブロック出土土器(1)

口唇に沈線が巡らされ、口縁直下に3本の沈線が施されるが、文様は判然としない。磨耗が顕著で、色調はにぶい橙色を呈す。172・173も同様の文様をなし、磨耗が顕著で、色調は灰白色を呈す。

166・167は浅鉢形の体部資料で、166は沈線の溝底がやや平坦で、167は弱いV字状をなす。いずれも斜位の沈線がみられることから、変形工字文で構成されると思われる。

175は鉢形C類に属し、頸部は短く、最大径は体上部にある。口内には沈線が巡らされ、口唇は弱く面取りされ、粘土が少々外に張り出す。頸部は丁寧に研磨され、区画沈線が消失したため、隆線部との段差が明瞭で、体部は平行沈線で3本の太い隆線が作出される。沈線は幅3.5mmで、溝底はやや平坦で、沈線間にはR L ?が施文されるが、ナデのため一部消失する。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色～黄灰色を呈す。

176は鉢形A類に属する。口唇は薄く丸棒状をなし、口縁部に沿って2条の沈線が囲繞され、斜位の沈線がみられることから、変形工字状の文様を構成すると思われる。器表は丁寧に研磨されるが、内面はやや劣り、胎土は石英を多く含む。色調は黒褐色を呈す。

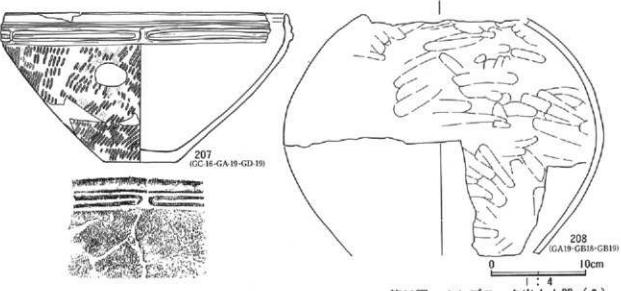
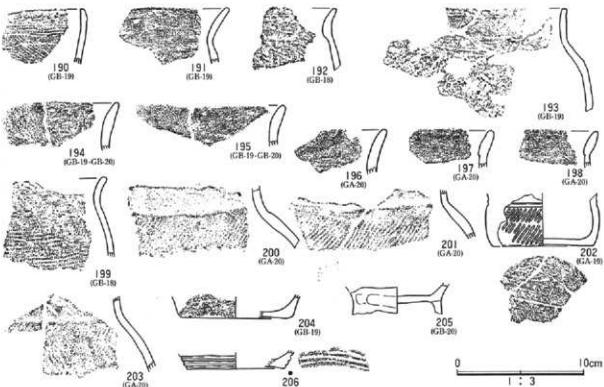
177・178は鉢形B類に属する。177は頸部の屈曲部が弱い凹線をなし、体部には3本の沈線が施される。その下にも沈線が認められ、変形工字状の文様で構成されると思われる。器面の調整はあまり丁寧ではなく、胎土は細砂粒を多く含み、色調は黒褐色を呈す。178は沈線が反転し結合するが、スリットは加えられない。内面は丁寧に研磨されるが、器表はやや粗く、胎土は石英を多く含み、色調は黒褐色を呈す。

179は蓋形として図示した。3条の沈線が囲繞され、沈線間は研磨され、体部には擦りの細かいR Lが綴位に回転施文され、一部ナデが加えられる。内面は研磨されるがやや粗く、胎土は石英を含む。蓋形の肩部の可能性もある。

180は台付浅鉢形F類に相当する。北側小ブロックの出土で、屈曲部の径は13.8cmを測る。屈曲部には刻目帯が巡らされ、破片右端で途切れ、工字状の膨去が加えられる。体部はR L ?が施文され、器面は磨耗が顕著で、胎土は微砂粒・石英を含み、色調は灰白色を呈す。

185～189は台付の脚部である。185は口唇が丸棒状をなし、口縁に沿って沈線が2条囲繞され、上段の沈線に四字状の膨去が加えられ、変形工字文を構成すると思われる。器面の磨耗が顕著で、色調は浅黄褐色を呈す。186は口径が12.6cmで、底部直下と口縁に沿って2条の沈線が囲繞され、文様帶の幅は口唇から2.9cmを測り、変形工字文で構成される。文様は上下の区画沈線に幅狭の膨去が加えられ、それを基点に山形状の沈線が上下交互に配され、斜線は平行沈線をなす。器面は磨耗が顕著で、色調は灰白色～にぶい橙色を呈す。187も同様の土器で、同一個体の可能性が高いが、口径(9.8cm)や文様帶幅(3.2cm)に差異がみられるため、別に提示した。

188は口唇が丸棒状をなし、文様帶の上下端に3条の沈線が囲繞される。口唇からの文様帶の幅は3.9cmで、区画内は斜位の沈線が直線的に施される。沈線は2mm幅で、溝底はV字状を呈し、区画沈線の上には、細かい擦りのR Lが施文される。器面は磨耗が顕著で、色調は灰白色を呈す。189は口唇が丸棒状をなし、体部は弱く内弯する。口径は9cm、口唇からの文様帶の幅は4.6cmで、上下端に3条の沈線が囲繞され、その間に波状の沈線が施される。器面の磨



第28図 4 b ブロック出土土器 (2)

耗は著しく、色調はにぶい橙色を呈する。

190は深鉢形B類で、口唇は外傾し、粘土が外に折り込まれる。口縁直下は横位に幅2cm弱の擦痕を残すナデ調整が加えられ、体部は斜位に擦文R ?が施されるが、筋が不明瞭で、条痕文の可能性もある。内面は丁寧に研磨され、胎土は細砂粒・石英を含む。

191～199は深鉢形A類に属する。191は口頸部がやや長く、口唇は弱く面取りされる。内面は研磨されるが、器表はややざらつき、胎土は細砂粒・赤色粒子を多く含み、色調は灰白色～灰黄褐色を呈す。192は口内に稜が形成され、口唇は薄く、口頸部には磨きが加えられるが、やや

凹凸する。体部にはL Rが縦位方向に施文され、頸部との境界は不明瞭で、内面は丁寧に研磨され、胎土は細砂粒・石英・金雲母を含む。193は体部に最大径を持ち、口縁部はほぼ直立し、口唇は弱く面取りされる。頸部は横位に研磨され、体部とは明確に区分され、体部にはL Rが施文される。器表の剥落が顕著で、内面は研磨されるがややざらつき、胎土は細砂粒・赤色粒子を多く含む。194~196は同一個体で、南側小プロックから出土した。口唇は外傾し、口内と口頸部は研磨されるが、磨耗が顕著でざらつく。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。197・198は同一個体で、口唇は丸棒状をなし、口内に折り返しを持つ。口内と口頸部は研磨されるが、磨耗が顕著でざらつく。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。199は体上部に最大径を持ち、口縁部が強く外反する。口頸部は研磨されるが、体部との境界は不明瞭で、体部にはL Rが施文される。内面の磨耗はあまり丁寧ではなく、胎土は細砂粒を多く含む。

200・201・203は壺形C類に属する。いずれも南側小プロックから出土し、色調は灰白色を呈し、胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒子を少々含む。また頸部の粘土が削り出され、体部とは段差をもって明確に区分される。200は体部にL R ?が施文され、一部R L ?が看取されるが、器面の磨耗が顕著で判然としない。201は体部に0段多条L Rが施文され、頸部との境界付近はナデで筋が消失する。203は0段多条R LとL Rの2通りの原体が施される。

202・204~206は底部資料である。202は浅鉢形乃至鉢形の底部で、推定底径が7.8cmで、弱い上げ底をなし、底面には筆葉状の圧痕が認められる。器形は体下端が内彎気味に直立し、更に外反すると思われる。体下端にL Rが施文され、その区画沈線上は無文で研磨される。胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は灰黄褐色~黒褐色を呈す。204は推定底径が8.4cmで、弱い上げ底をなし。側面に僅かに筋が認められるが、器面はざらつき原体は判然としない。胎土は細砂粒を多量に含み、色調は黒褐色を呈す。205は台付浅鉢形の底部で、底径は7.7cm、底面の器厚は5mmを測る。底面はやや凹凸し、側面は横位の磨耗が加えられる。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰黄褐色~黒褐色を呈す。206は浅鉢形乃至鉢形の底部で、底面は弱い上げ底をなし、底部に沿って3条の平行沈線が囲まれる。器面は研磨されるが、磨耗が顕著で、器表には赤色顔料の付着が認められる。

207は大型の浅鉢形B類で、北側の小プロック西端でまとまって出土したが、4aプロック北側や4cプロックでも接合資料が出土している(図版7)。口縁部を一部欠損するが略完形で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部が強く内屈して内傾する。口内の沈線は段と化し、口縁部が弱く外反し、口唇は薄く丸棒状をなす。器高は15.7cm、口径は30.2cm、最大径は31.2cm、底径は7.7cmで、体部の器厚は6~8mm、底部は12~13mmを測る。口縁直下は粘土が削り出され、区画沈線が消失したため、隆線部との段差が明瞭で、その下は平行沈線で3本の太い隆線文が作出され、沈線間に工字状の彫去を加えることで、2本目と3本目の隆線が反転し工字文をなし、推定5單位で構成されると思われる(第50図5)。反転部は彫去された粘土で多少高まり、体部にはL Rが施文される。器面は丁寧に研磨されるが、部分的に多少ざらつき、器表や内面上半には炭化物が多く付着する。胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は黒褐色を呈す。4aプロック出土の第24図109・110とは同一個体で、原稿執筆時163と接合することが判明した。

208は壺形A類の大型の研磨壺で、北側の小プロックからまとまって出土した。体部が1/2弱残存し、最大径は体中央にあり、推定33.8cmを測り、断面形態は球状を呈する。現在の器高は25.4cm、器厚は6~7mmで、輪積痕が明瞭に観察される。器表は体上半で横位、下半では斜位に研磨されるが、下半ではざらつき、内面の上半も横位に研磨されるが、粗雑な仕上がりである。胎土は細砂粒を多く含み、器表の一部には炭化物の付着が認められ、色調は灰白色を呈し、体下半は灰黄褐色を呈す。

第II群土器 (181~184)

いずれも壺の破片資料で、平行沈線が施文される。181は2.5mm幅の平行沈線が、口縁直下に小波状、体部に渦巻状に施文される。胎土は細砂粒を多く含み、色調は褐灰色~黒褐色を呈す。182~184は2mm幅の平行沈線で、連弧文が施され、同一個体と思われる。器面の磨耗が顕著で、色調は灰白色~浅黃橙色を呈す。

石器 (245~248) : 245~247は磨石・凹石で、いずれも安山岩製である。245は重量547gで、表裏・側面とも研磨され、下端に弱い敲打痕を持つ。246は重量354gで、表裏面とも2個の凹みを持つ。247は重量828gで、表面と下端に敲打痕を持つ。248は頁岩製の石窓で、長さ62mm、幅35mm、厚さ16mm、重量33.24g。楔形を呈し、両側縁に調整が加えられ、断面三角形をなす。

4cブロック (第29・30図、図版6・11)

4aブロックの南方4m、4bブロックの東方7mに位置し、8×11mのほぼ梢円形状の独立したまとまりとなっている。遺物の総数は684点と多くはないが、ブロックの中央部で密度が濃く、縦横では散漫な分布となっている。出土土器は第I群土器がほとんどで、特に弥生初頭に位置付けられる土器がまとまっている。また他のブロックに比し石製品が多く、そのほとんどを剝片・chipの類が占め、toolは第31図250の石核に限られる。遺物の出土レベルは105.6~105.7mで、4bブロックよりは若干高く、4aブロックと同様の位置にある。なお4bブロックとは第28図27に接合関係が認められる。

第I群土器 (209~244)

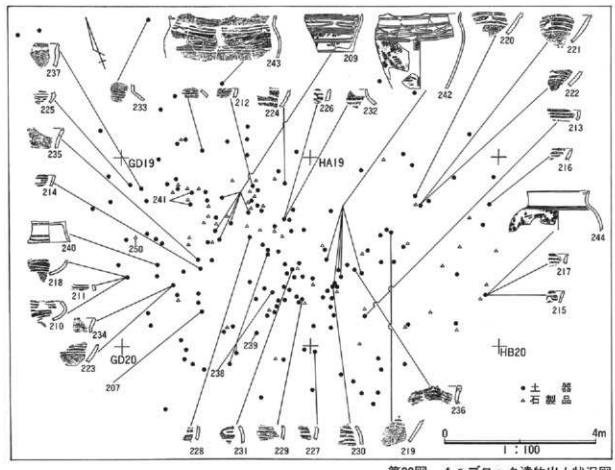
209は浅鉢形C類に属する。底部から体上半へとほぼ直線的に立ち上がり、口縁部が若干内彎し、最大径は口縁直下にある。1/4が欠損する略完形で、器高は10.9cm、口径は17.3cm、最大径は17.7cm、底径は10.4cm、器厚は7mmで、底面は9~12mmを測る。口内の沈線が段と化し、口唇は薄く丸棒状をなす。口縁直下には沈線が2条回繞され、下段の沈線に工字状の彫去が加えられ、これを基点に左右対称に反転する沈線が垂下され、下端の沈線にも対向して同様の彫去が加えられ、緩い逆三角形状をなす。彫去部の両脇は抉り出した粘土でやや高まりを持つ。逆三角形状のモチーフの間は、工字状の区画が形成され、この区画内の上下線に沿って沈線が1本充填される(第50図6)。体部文様は推定4単位で構成されるが、209aの右端には右傾の沈線が1本みられるのみで、文様は一様ではない。沈線は2.5mm幅で、溝底は弱いV字状を呈す。体下半には無文帶を介して繩文帯が2条巡らされ、L Rが充填される。器表は丁寧に研磨されるが、一部ざらつき、内面もややざらつく。底部は上げ底をなし、内面は強く凸彎し、体部下

端には沈線が巡らされる。また底面には木葉痕を持つが、丁寧に研磨され、中心の葉脈のみが観察される。胎土は細砂粒・金雲母を多く含み、色調は灰白色～暗灰黄色を呈す。

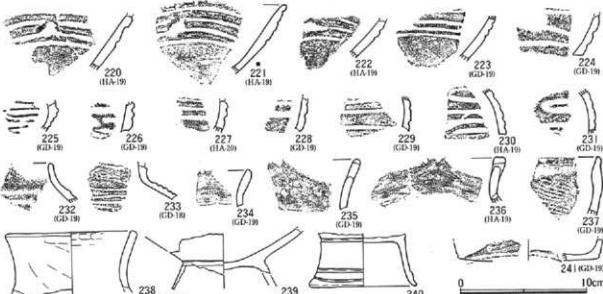
210・211・213・218は浅鉢形B類に属する。210・211・218は同一個体で、口縁部は内傾し、口唇に沈線が施される。口縁直下には沈線が3条巡らされ、屈曲部より下に変形工字文が施され、体下部には細い擦りのLRが施される。器表は黒色の付着物(漆?)が微かにみられるが、器面の磨耗が顕著で判然としない。色調は黒褐色～灰白色を呈す。213は口内の沈線が段と化し、口唇は薄く尖錐となる。文様は口縁直下に3条の沈線が巡らされる。器面の磨耗が著しく、色調は淡黄色を呈す。

212・214は浅鉢形A類に属する。212は口唇がやや平坦で、口縁直下に3条の沈線が巡回されるが、磨耗のため溝底と陽刻部の段差がなく、拓影図では文様を表現し得なかった。色調は灰白色を呈す。214は器面の磨耗が顕著で、口内の状況は不明瞭で、文様は口縁直下に四字文が観察される。色調は灰白色を呈す。

215～217は浅鉢形C類と思われる。215は口内に沈線が巡らされ、口唇は丸棒状をなす。口縁直下の沈線下に、幅狭の四字状の彫去が加えられ、変形工字文を構成するとと思われ、沈線は3mm幅で深い。器面はややざらつき、色調は灰白色～黄灰色を呈す。216は口唇が薄く尖錐で、文様は沈線が3本施されるが、沈線間は平行ではなく、斜線をなすものと思われる。器表はざ



第29図 4c ブロック遺物出土状況図



第30図 4c ブロック出土土器

らつくが、内面は丁寧に研磨され、溝底には赤色顔料が付着する。胎土は石英を多く含む。217は口唇が薄く、文様は沈線が3本施され、2本目と3本目の沈線が平行して弱いカーブを描く。器面はややざらつき、胎土は石英を多く含む。

220～228は浅鉢形A類に属し、別個体であるが、いずれも沈線間が幅広で、下から2本目の沈線に影去が加えられ、四字文をなす。220は三角状の影去で、器面は研磨されるが、ややざらつき、胎土は石英を多く含み、色調は淡黄色を呈す。221は口唇がやや尖锐で、文様は4条の沈線が巡らされ、四字状の影去が加えられる。器面は丁寧に研磨され、胎土は石英を多く含み、色調は褐灰色～黒褐色を呈す。器表に赤色顔料が付着する。222は三角状の影去で、沈線は浅く、器表はざらつくが、内面は丁寧に研磨される。胎土は石英を多く含み、色調は灰白色～黒褐色を呈す。

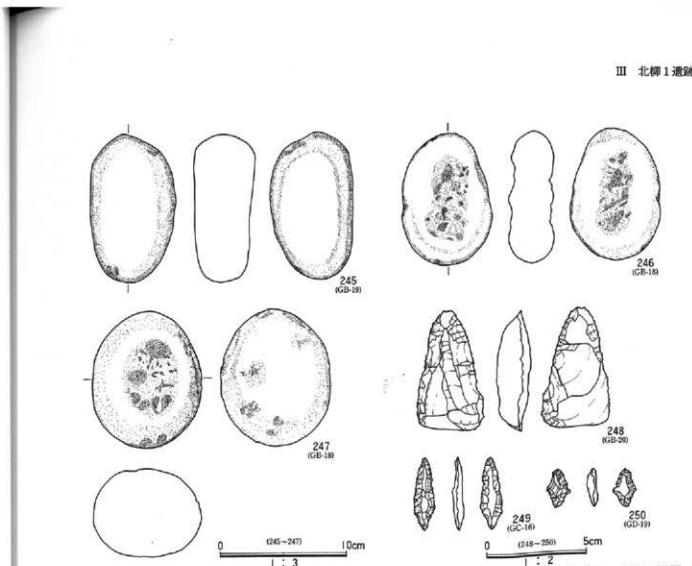
219・223・224は浅鉢形A類の体部資料である。219は沈線が浅く、器表はざらつくが、内面は丁寧に研磨される。胎土は石英を多量に含み、色調は灰黄色を呈す。223は3条の沈線が巡らされるが、上端に斜位の沈線が看取されることから、変形工字状の文様で構成されると思われる。器面は研磨されるが、磨耗が著しく、色調は灰黄色を呈す。224は沈線が3.5mm幅と幅広で、沈線間も間隔が広い。斜位の沈線が施されることから、変形工字状の文様で構成されると思われる、器面は研磨されるが、剥落が顕著である。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰黄色を呈す。

225は浅鉢形B類の体部資料で、屈曲部より垂下する弧状の隆線がみられ、変形工字状の文様をなすと思われる。器面の磨耗が顕著で、色調は灰白色を呈す。

226～228は浅鉢形の体部資料と思われる。226は四字状の影去がみられ、器表は研磨されるが、内面はざらつく。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。227は明瞭な沈線が3条巡らされ、器面は丁寧に研磨される。胎土は細砂粒を含み、色調は灰白色～灰黄色を呈す。228は沈線間が広く、下端が斜行することから、変形工字状の文様を呈すると思われる。器面はざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。

229～231は鉢形B類乃至深鉢形C類の体部資料である。229は2.5～3mm幅の沈線が3本施され、沈線間は一定ではなく、変形工字状の文様で構成されると思われる。器表はややざらつき、胎土は細砂粒を含み、色調は灰黄色を呈す。230は深鉢形C類で、242と同一個体である。幅4mm弱の沈線で、流水文と四字文で文様が構成され(第50図7)、四字部は影去のため三角状に凹み、下端は粘土で多少高まる。内外面とも丁寧に研磨され、色調は黒褐色を呈す。231は沈線の反転がみられ、その区画外にLRが施される。器表はざらつくが、内面は研磨され、胎土は細砂粒を多く含み、色調は黒褐色を呈す。

232・233は壺形B類に属する。232は短頸の広口壺で、口縁部は内傾して、短く立ち上がる。肩部には浅い沈線が2条巡回され、沈線間は幅が広い。器面は研磨されるがざらつき、胎土は細砂粒を多量に含み、色調は灰白色を呈す。233は肩部に1.5mm幅の浅い沈線が4本施され、沈線間がばらつくことから、変形工字状の文様で構成されると思われ、また破片上端の頸部にも沈線が巡らされる。器面は研磨されるが、内面は多少凸凹し、胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は黒褐色を呈す。



第31図 4 ブロック出土石器

234～236は鉢形A類に属する。234は口縁部がやや肥厚し、口唇は外傾する。器面は丁寧に研磨され、屈曲部は特に丁寧で、胎土は微細な石英を多く含む。235は大波状口縁で、波頂部に刻目が加えられ、2山状をなす。器表は一部滑沢で、赤漆と思われる塗り付けが認められるが、剥落が顕著でざらつく。胎土は細砂粒・石英を多量に含み、色調はにぶい赤褐色～暗褐色を呈す。236は弱い波状口縁で、波頂部は肥厚し刻目が加えられ、2山状をなす。内面は研磨されるが、器表はざらつき、胎土は細砂粒・石英を含む。

237は深鉢形A類で、口唇は薄く外傾するように面取りされ、口縁直下は強いナデが加えられ、凹線状をなし、緩く外反する。体部はLRが縱位方向に回転施文される。内面は丁寧に研磨され、胎土は細砂粒・滑石を多く含み、赤色粒子を少々含む。色調は黄灰色を呈す。

238は壺形の口頭部で、3/4が残存し、口径は10.5cmを測る。口唇はやや平坦で外傾し、器面は研磨されるがざらつき、胎土は細砂粒を多量に含む。色調は灰白色を呈す。

239～241は底部資料で、239・240は台付である。239は底面が丸底状をなし、体部との境界は不明瞭である。底径は6.4cm、器厚は5mmを測り、脚部との接着部には凹線が巡らされる。器面は研磨されるが、磨耗が顕著で、胎土は微細な石英を多く含む。色調は灰黄色～黒褐色を呈す。240は現存の器高が4.2cm、口径が8.4cmを測り、底部との接合面より剥離する。口縁部は弱く外反し、脚部上端と下端に沈線が巡らされるが、器面の磨耗が著しい。胎土は細砂粒

を多く含み、色調は淡黄色を呈す。241は浅鉢形D類に属するが、底部は張り出さない。体部下端に沈線が巡らされ、底面は丸底をなす。器面は磨耗が顯著で、色調は灰白色～浅黄橙色を呈す。

242は深鉢形C類に属する。体上半が内彎し、最大径を持ち、口頸部が屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる。1/2の残存状況で、現存の器高は19.7cm、推定口径は21.8cm、最大径は24cm、器厚は6mmを測る。口唇は弱く外反し、面取りされ平坦で、山形突起が配される。口縁直下には沈線が巡らされ、頸部は粘土が削れ出され、体部との区画沈線が消失し、体部との段差が明瞭である。体上半には1段の流水文と、その直下に反転部に符合して上向きの四字文が施され、推定6単位をなすと思われるが、沈線は蛇行し、反転部が左右対称をなさず、やや稚拙な感を持つ(第50図7)。体下半にはLRが施されるが、筋は浅く不明瞭で、下位では横走する。器面は研磨されるが、体上半の沈線間に一部繩文の痕跡が残り、また体下半はややざらつく。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色～黒褐色を呈す。

243は深鉢形C類に属する。体上半が内彎し、最大径を持ち、口頸部が屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる。口頸部は1/4の残存で、現存の器高は11cm、推定口径は28.2cm、最大径31.2cm、器厚は6mmを測る。口唇はやや平坦で、山形突起が配され、突起は弱く外反する。口頸部は無文で、横位に研磨され、屈曲部の区画沈線が痕跡と化し、体部とは段差をもって明瞭に区分される。体上半は四字状の彫去を基点にジグザグ状に反転する沈線が左右対称に垂下され、半単位ずれた下向きの四字文を終点とし、また基点の直下にも対向する四字文が施される。終点部の直上は破損のため彫去の状況が判然としないが、充填沈線を持たない2段の変形工字文で構成されることになる(第50図8)。沈線はやや蛇行するが、3mm幅で深く明瞭で、四字部の抉り込みは沈線の深さとあまり変わらない。体下半はLRが施文されるが、筋は浅く不明瞭である。器表は滑沢に富むが、剥落が顯著で、内面はややざらつく。胎土は細砂粒を多く含み、色調は淡黄色～暗褐色を呈す。

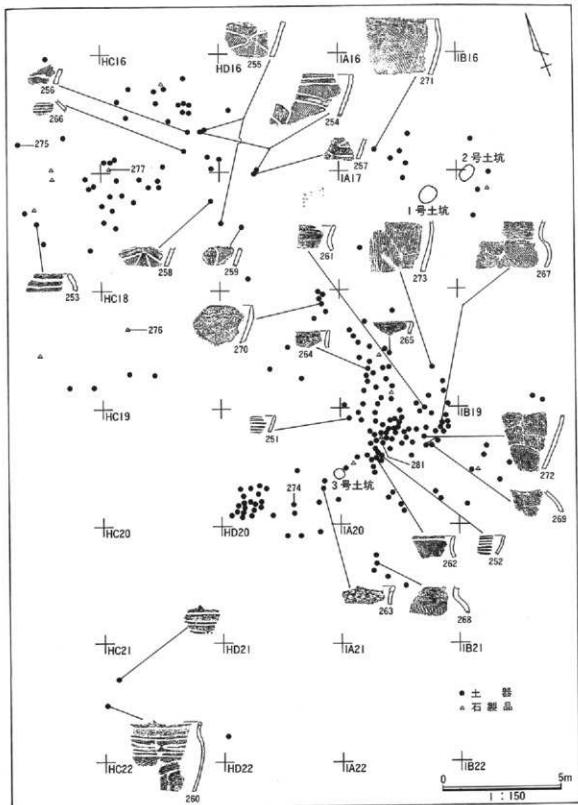
244は壺形C類で、肩部より上部は略尖形をなし、体上部に最大径を持つ。現存の器高は10.5cm、口径は16.6cm、最大径25cm、器厚は7mmを測る。口頸部は弱く外反し、口唇はやや平坦で、口内には沈線が巡らされる。肩部には沈線が3条回繞され、沈線間は一定で、一部溝底に赤色顔料の痕跡が認められる。体部はLRが施文されるが、筋が細長く密接していることから0段多条の可能性がある。器面はやや丁寧に研磨されるが、部分的に磨耗しておりざらつく。胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒子を少々含む。色調は灰白色～暗灰黄色を呈す。

石器(250)：250は頁岩製の有茎石鏃で、尖頭部は短く、基部と同程度で、長さ20mm、幅11.5mm、重量0.88gを測る。剝離調整は中央まで及ばず、尖頭部も尖銳でないことから、未成品と思われる。

5ブロック (第32～34図、図版11)

4ブロックの東側に位置し、本遺跡の中では最も広い分布を示す。その中心はIA19区付近の6×5mのまとまりで、繩文晩期終末の遺物が多く出土し、その西側に3号土坑が位置する。中心から北方7mには1・2号土坑が存在するが、この付近の遺物の密度は薄く、土坑の時期に

相当する遺物は判然としない。またHC16区付近にも、散漫ではあるが7×8mのまとまりが存在し、弥生中期初頭の遺物が出土している。従ってIA19区付近とHC16区付近の小ブロックは本



第32図 5ブロック遺物出土状況図

来別々に取り扱うべきものであろう。本ブロックからの出土遺物総数は445点で、ほとんどが第1群土器であるが、縄文晩期終末～弥生中期初頭と時間幅を持つ。遺物の出土レベルは105.7～105.85mで、4cブロックより若干高い位置にある。接合関係は6aブロックの第36図281との間に認められ、また同一個体(第33図251・252)も出土していることから、大洞A'式期に6aブロックとの間に相互の関連を有していることが窺える。なおHC21区から260が出土しているが、これは4cブロック第30図242と同一個体で、出土位置は4cブロックと5ブロックの中間それぞれ約10mの位置にあり、挿図作成の都合上本ブロック中で提示したが、本来は4cブロックの延長として扱うべきであろう。

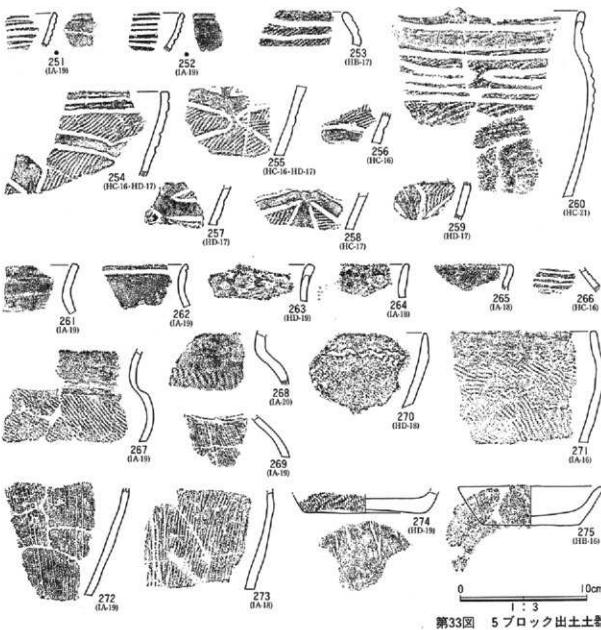
第1群土器 (251～275)

251・252は浅鉢形A類で、同一個体である。口内に沈線が巡らされ、口唇はやや外傾し、文様は2mm幅の沈線で描出され、溝底に工具の擦痕を明瞭に残す。6aブロック出土の第36図281と同一個体であることから、変形工字文が施されると思定され、大洞A'式に位置付けられる。器壁は4mmと薄手で、溝底には赤色顔料が残り、器面は研磨されるが、沈線間はややざらつく。胎土は微砂粒・石英を含み、色調は灰白色～暗褐色を呈す。

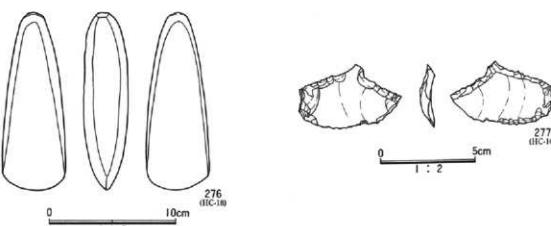
253～259は鉢形A類に属し、HC16区付近の小ブロックから出土した。253は口縁部が内傾し、口唇は丸棒状をなす。口縁部は無文で、その直下に3条の沈線が囲繞され、2条の縄文帯が形成される。縄文はLRが施され、2本目の溝底には押し引き痕がみられる。器面は磨耗が顕著でざらつき、胎土は細砂粒・石英を多量に含む。色調は灰黄褐色～暗褐色を呈す。254～259は同一個体で、口縁部は緩やかに内彎するが、内傾はせず、最大径は口縁部にある。口唇はやや平坦で、ナデが加えられ、口縁直下に2条の沈線が巡らされ、体部は対向するハート状の範描文を上下で交互に半位半ずらして配置する複雑な構成をなし、区画内はLRが充填される。器面は丁寧に研磨され、口内及び体上半には炭化物が多く付着する。胎土は微砂粒を含み、色調はよい橙色～黒褐色を呈す。弥生中期初頭に位置付けられる。

260は第30図242と同一の個体で、5ブロックの中心からは南西に10m離れた位置で出土した。深鉢C類に属し、体上半が内彎し、口縁部が屈曲しほぼ垂直に立ち上がり、口唇は弱く外反する。口唇は平坦で、山形突起が配され、口縁直下には沈線が囲繞される。頭部は粘土が削り出され、体部との区画沈線が消失し、体部との段差が明瞭である。体上半には対向して沈線の反転がみられ、流水文を構成し、沈線間にLRが施される。体下半にはLRが施されるが、筋は浅く不明瞭である。内面は丁寧に研磨されるが、器表はやや劣り、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰黄褐色～黒褐色を呈す。

261～263は鉢形C類に属する。261は口唇がやや平坦で、頭部に沈線の痕跡があるものの、口縁部は無文で、器表は多少凹凸する。器面は研磨されるが、ややざらつき、胎土は細砂粒・石英を多量に含む。色調は灰白色を呈す。262は口縁直下に沈線が巡らされ、溝底に工具の擦痕を明瞭に残す。器表は磨耗が顕著でざらつくが、内面は丁寧に研磨され、胎土は石英・滑石を多く含む。色調は灰白色～灰黄褐色を呈す。263は口唇に山形突起が配され肥厚し、口縁部は無文となる。器面は磨耗するが、一部滑沢な面が残存し、胎土は細砂粒・金雲母を多く含む。



第33図 5ブロック出土土器



第34図 5ブロック出土石器

色調は灰白色～灰黃褐色を呈す。

264・265は深鉢形A類の口縁部資料である。264は頸部が緩く外反し、口唇は薄く平坦に作出され、器表の多くは剝落しがらつく。内面はナデが加えられ、胎土は細砂粒を多く含み、石英・海綿骨針を含む。265は口縁部が内畫気味に立ち上がり、外側に肥厚し、口唇は弱く面取りされ、肩曲部直上には細かい擦りRL？の痕跡が認められる。口縁部と口内は弱く研磨されるが、縄文施文部はざらつく。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。

266は壺形の肩部資料で、HC16区付近の小ブロックから出土した。文様は4条の沈線が認められるが、沈線は蛇行し、沈線間の処理も粗雑である。沈線間に縄文の痕跡が看取され、器面はざらつき、胎土は細砂粒・石英・海綿骨針を多く含む。

267・268は壺形C類に属する。268は頸部下端の粘土が削り出され、体部とは綫をもって明確に区分され、体部には0段多条RLが施文される。頸部・内縁はやや丁寧に研磨され、胎土は細砂粒を多く含み、色調はやや黄橙褐色を呈す。268は頸部が無文で外傾し、体部には0段多条RLが施文されるが、頸部との境界に段差は作出されない。器面は研磨されるが、あまり丁寧ではなく、器厚は8mmと分厚な作りで、胎土は細砂粒を多く含み、器表に炭化物の若干の付着が認められる。色調は灰白色～黒褐色を呈す。

269・272は壺形の同一個体の体部資料で、前者は肩部付近、後者は体下半に相当する。頸部とは弱い沈線で区画され、体部には綫位の条線文が施文される。条線は幅1.8cmの5本を単位とする櫛齒状の工具が用いられ、条の間隔は不揃いで、肩部では深く施される。器面は研磨されるが体下半はざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰褐色～黒褐色を呈す。

270は深鉢形B類で、口唇は薄く尖銳に作出され、口縁直下は無文で、体部にはLRが施文され、その境界にはZ字状結束が認められる。器表は磨耗が顕著で、内面はややざらつき、胎土は細砂粒・石英を多量に含み、色調は褐灰色～黒褐色を呈す。

271は深鉢形A類で、1号土坑の近くで出土した。体部が内畫気味に立ち上がり、弱く屈曲し、口縁部がやや内傾する。口唇は弱く面取りされ、口頸部には横位に強いナデが加えられ、指頭圧により多少凸凹する。体部はRLが施文されるが、斜行するS字状結束が看取されることから、条の開いた端を結束した原体が用いられる。頸部との境界にも微かに結束が認められるが、ナデ調整により痕跡と化している。内面は丁寧に研磨され、胎土は細砂粒・赤色粒子を多量に含み、色調は灰黃褐色～暗褐色を呈す。

273は深鉢形の体部資料で、条痕文が施文される。条痕文はやや太い条溝を有し、条間は不揃いで、綫位方向に密に施文される。器面はややざらつき、胎土は石英・細砂粒を多く含む。

274は推定底径が9.6cmで、上げ底状をなし、底面には葦葉状の压痕を持つが、研磨のため剥離しか認められない。側面は底面ぎりぎりまでLRが施文され、内面はざらつき、胎土は細砂粒・石英を多く含む。

275は小型の皿形で、北側の小ブロックから出土した。器高は3cm、口径は11.4cm、底径は7.8cmを測り、器面はざらつく。第I群土器の範疇には含まれない。

石器（276・277）：276は安山岩製の磨製石斧で、完形品である。長さ138mm、幅49mm、厚さ32

mm、重量345gで、楔形を呈し、刃部は丁寧に研磨される。両面と側面も研磨されるが、中央及び頸部付近に敲打痕があり、表皮が割がれざらつく。277は頁岩製の石匙で、つまみ部に対し横方向に長い刃部が作られ、縦長削片が使用される。表裏面とも側縁に調整が加えられるが、つまみ部の作り出しは粗雑である。長さ33mm、幅52mm、厚さ7mm、重量9.68g。

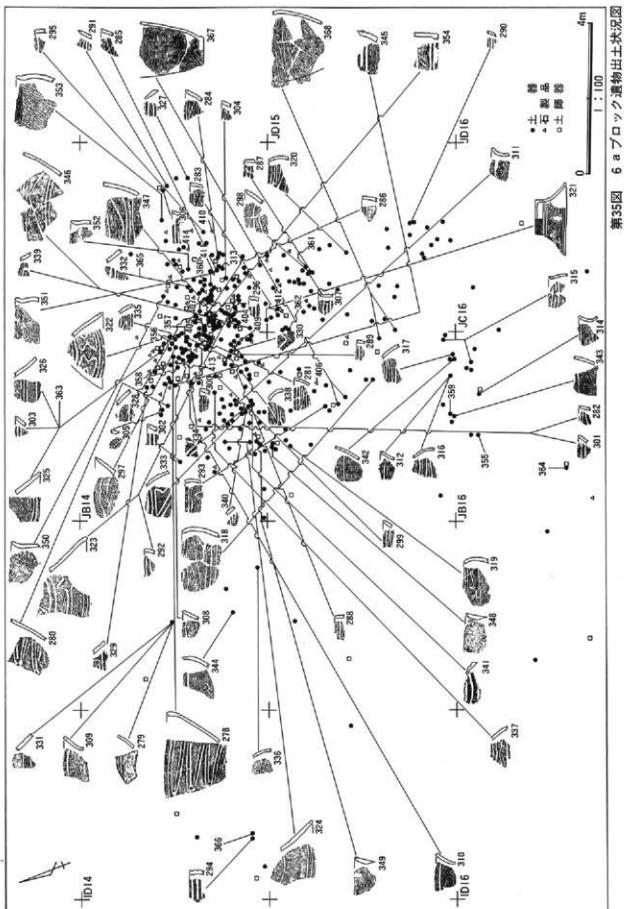
6aブロック（第35～38図、図版11・12）

調査区の中央の遺物集中地点は、当初6ブロックとして包括して調査を進めた。しかし整理作業において、このまとまりが2つのブロックとその他に再編し得ることが判明したため、旧来の6ブロックにアルファベットを付することで、細別名とした。ブロックは旧河道路跡が西へ屈折する部分の南東に位置し、その中心はJB14・JC14区の5×8mのまとまりである。遺物は周辺にも散漫な分布がみられるが、狭い範囲に集中して出土しており、6bブロックとは4mの距離がある。出土した遺物の総数は883点で、土師器の小片が含まれるが、主体は第I群土器で、特に弥生中期初頭の鱗沼式期の土器がまとまっている。遺物の出土レベルは105.85～106mであるが、特に105.95～106mに集中しており、レベル差は少ない。なお第36図281が5ブロック出土の土器と接合関係が認められており、大洞A'式期に5ブロックと相互に関連を有していたことが窺える。

第I群土器（278～368）

278～280は浅鉢形B類に属し、同一個体である。口縁部が肥厚し、口内に稜を形成し、そのまま沈線が巡らされ、口唇は薄く内傾する。口縁直下に2条の沈線が回続され、無文となり、体部は下段の沈線の匹字状の彫去を基点に、少なくとも3段重層の変形工字文で構成され、沈線は2本1組で、交点には彫去した胎土の貼付がみられ、区画内は細かい擦りのLRで充填される。沈線は直線的で幅3mmで浅く、沈線間に無文で、丁寧に研磨され、沈線付近の縄文は部分的に磨消される。内面も丁寧に研磨されるが、器表の下部は磨耗が著しく、また口縁の一部に光沢を持つ黒色の付着物（漆？）が認められる。胎土は石英を多く含み、色調は黒色を呈す。磨消縄文の文様構成から、大洞A'式直後に位置付けられる。

281～286・304は深鉢形A類に属する。281は器壁は4mmと薄手で、口内に沈線が巡らされ、口唇はやや外傾し、文様は2mm幅の沈線で変形工字文が施文される。溝底には工具の擦痕が明瞭に残り、微かに赤色顔料の付着がみられる。器面は研磨されるが、沈線間にややざらつき、胎土は微砂粒・石英を含み、色調は灰白色～暗褐色を呈す。大洞A'式に位置付けられる。282～285・304はほぼ同一の土器と思われ、283のみ口内に弱い稜が形成される。口唇は内側が薄く、丸棒状をなし、口縁に沿って2条の沈線が回続され、下段から斜位の沈線が垂下され、下端も2条の沈線で区画される。283は下部の頂点が区画沈線に接しておらず、また284・304の上部の頂点に彫去がみられないことから、波状のモチーフで構成されると思われる。沈線は1～1.5mm幅と細く、器表はざらつく。内面は研磨され、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色～灰黃褐色を呈す。304の器面は丁寧に研磨される。286は口唇が強く内傾し、口内に稜が形成される。口縁に沿って2条の沈線が回続され、破片の下端にも横位及び右傾の沈線が看取され、282～



第35

285に類する文様で構成されると思われる。器面は丁寧に研磨され、胎土は細砂粒・石英を含み、色調は黒褐色を呈す。波状の文様から大洞A'式直後に位置付けられる。

287~289は鉢形A類に属する。いずれも口唇が強く内傾し、口内に稜が形成され、口縁に沿って2条の沈線が巡らされる。287・288は丁寧に研磨されるが、器表は多少粗雑で、胎土は細砂粒を多く含み、色調は黒褐色を呈す。289は口内に段が形成され、口唇が薄く立ち上がる。器裏は丁寧に研磨され、胎土は微砂粒を多く含み、色調は褐灰色へ黒褐色を呈す。

290は浅鉢形A類乃至B類の体部資料で、3mm幅の深く明瞭な沈線で、隆線文が作出される。器面は丁寧に研磨されるが、やや磨耗しており、色調は灰白色を呈す。大洞A~A'式に位置付けられ、ブロックの中心からやや離れて出土した。

291は浅鉢形C類乃至F類に属すると思われ、上端が丸味を持つことから、口縁付近の資料である。ほぼ直線的に立ち上がり、文様は平行沈線と斜行の沈線で構成され、沈線間の一部にLRが認められる。器面は研磨され、胎土は石英・細砂粒を含み、色調は灰黄褐色を呈す。

293～295は鉢形A類に属する。293は口唇が内傾し、口内に粘土が折り込まれやや肥厚する。口縁部は無文で、2条の沈線が回繞され、その直下に323に類する山形の沈線が施され、LRが充填される。器表の無文部は研磨されるが、内面は粗雑で、胎土は細砂粒を多く含む。色調はにおい黄橙色～暗褐色を呈す。294は口内に粘土が折り込まれやや肥厚し、口縁に沿って4mm幅の沈線が回繞される。陽刻部が反転することから、匹字状乃至工字状の彫去が加えられると思われ、反転部は粘土で盛り上がる。器面はややさらつき、器表には炭化物が付着する。胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は褐灰色を呈す。プロックからはやや離れて出土している。295は口唇が平坦で、口内はやや肥厚する。口縁に沿って3mm幅の沈線が巡らされ、直下にはLRが施される。繩文施文後沈線がなぞられ、沈線の兩端は引き出された粘土が多少隆起し、筋を覆っている。口唇及び内面は研磨され、胎土は細砂粒を多く含み、色調は暗褐色～黒褐色を呈す。

296は浅鉢形A類で、口内に棱を持ち、口唇が外向きに作出され、口縁直下に沈線が2条巡らされる。沈線間は無文で、下端のみにLR?認められ、器面は研磨される。胎土は細砂粒を含み、色調は浅黄色を呈す。

297～303は浅鉢形E類で、蓋形の可能性もある。297・298は同一個体で、口内に沈線が巡らされ、口唇は薄く丸縦状をなす。器表にはLR旋文後に平行沈線が巡らされる。沈線は蛇行し、3.5mm幅で浅く、溝底には工具の擦痕が明瞭に残り、沈線の両脇は引き出された粘土が多少隆起し、筋を覆っている。内面は研磨されるが、かなり粗く、胎土は細砂粒・石英を多く含み、海綿骨針が認められる。色調は灰白色を呈し、一部黒班がみられる。299～301は同一個体で、口唇は内側に薄く作出され、口縁に沿って2条の沈線が囲続される。器面は丁寧に研磨され、胎土は微砂粒を含み、色調は灰白色～黒褐色を呈す。302は口唇が内側に薄く作出され、口縁に沿って平行沈線が巡らされ、口縁及び沈線間に織文の痕跡が認められる。器面はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰黄褐色～黒褐色を呈す。303は口唇が内側に薄く作出され、弱く面取りされ、口縁に沿って2条の沈線が囲続され、その直下にも沈線がみられる。器面は丁寧に研磨され、胎土は石英を含み、色調は灰黄褐色～黒褐色を呈す。

305は器種が不明確だが、曲線的な区画に沿って刺突文が施される。刺突は区画沈線に対し寝かし気味に、2個1組を単位として加えられ、最大径は2mmで、平べったい棒状工具が用いられる。器表は研磨されるが、内面は粗く、胎土は微砂粒を含み、色調は灰黄褐色を呈す。

306は浅鉢形F類乃至C類と思われるが、判然としない。口内の沈線は段と化し、口唇は薄く丸柳状をなし、文様は四字文で構成される。沈線は3mm幅で明瞭に描出され、沈線間は平坦で、器面は研磨されるが、多少ざらつく。胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒子も少々含み、色調は暗褐色を呈す。

307は鉢形C類と思われ、頸部が外反氣味に立ち上がり、口内に沈線が巡らされ、口唇は薄く丸柳状をなし。口縁部には2~2.5mm幅の刺突文が右に寝かし気味に加えられ、その直下に平行沈線が施され、工字状の彫去が加えられる。沈線は3mm幅で、彫去部の脇は粘土がやや高まり、器面は丁寧に研磨される。胎土は細砂粒を多く含み、色調は浅黄橙色を呈す。

308~312は鉢形C類に属する。308は口唇が弱く面取りされ、口内及び口縁部に沈線が巡らされる。内面は研磨されるが、器表はざらつき、胎土は細砂粒・石英を多く含む。色調は灰白色を呈す。309は中心からやや離れて出土した。口唇は丸柳状をなすが、一部角頭状を呈し、口内及び口縁部に沈線が巡らされる。内面は丁寧に研磨されるが、器表はややざらつき、胎土は細砂粒・石英を多く含む。色調は灰白色~褐灰色を呈す。310は口唇が丸柳状をなすが、一部角頭状を呈し、口内及び口縁部に沈線が巡らされ、口縁部にL Rが施文される。器面は丁寧に研磨され、胎土は石英・細砂粒を多く含む。色調は灰白色を呈す。311は口唇が平坦で、山形状の突起が配されるが欠損し、口内には沈線が巡らされる。口縁部には細かい捺りのL Rが施文され、区画沈線が削り出され、頸部とは明瞭な段をもって峻別される。器面は研磨されるが、多少ざらつき、胎土は細砂粒を多量に含む。色調は暗褐色を呈す。312はブロックの中心より南の小ブロックから出土した。口唇は平坦で、山形突起が配され、頂部には刻目が加えられ、口縁部には2mm幅の沈線が周縁されるが、沈線の深さは一様ではない。器面は研磨されるが、器表はややざらつき、内面には炭化物が付着する。胎土は微砂粒・石英を含み、色調は黒褐色を呈す。

313は壺形の頸部資料で、内面上端に沈線の痕跡が認められる。器面は研磨されるが、内面がやや粗雑で、胎土は細砂粒を多く含む。色調は灰黄褐色~黒褐色を呈す。

314は鉢形C類で、中心より南の小ブロックで出土した。口唇は平坦で外側を向き、突起が配されるが欠損する。口縁部に沈線が巡らされ、頸部は無文で、屈曲直下に文様を持つ。器面は丁寧に研磨され、体上部の文様は頸部が削り出されるため、隆線状をなす。胎土は石英を多く含み、色調は黒褐色を呈す。

315~317は鉢形B類に属し、いずれも中心より南の小ブロックで出土した。315は口縁部資料として提示したが、上端は磨耗しており、口縁部がより上部に位置し、壺形乃至鉢形C類になる可能性もある。文様は四字文と斜行の沈線がみられることから、変形工字文で構成され、沈線間に細かい捺りのR Lが施される。器面は研磨されるが、磨耗しており、胎土は細砂粒・石英を含む。色調は黒褐色を呈す。316は頸部との区画沈線が削り出しのため消失し、体部文様の上端が隆線状をなし、下位に斜行の沈線がみられることから、変形工字文で構成されると思



第36図 6a ブロック出土土器 (1)

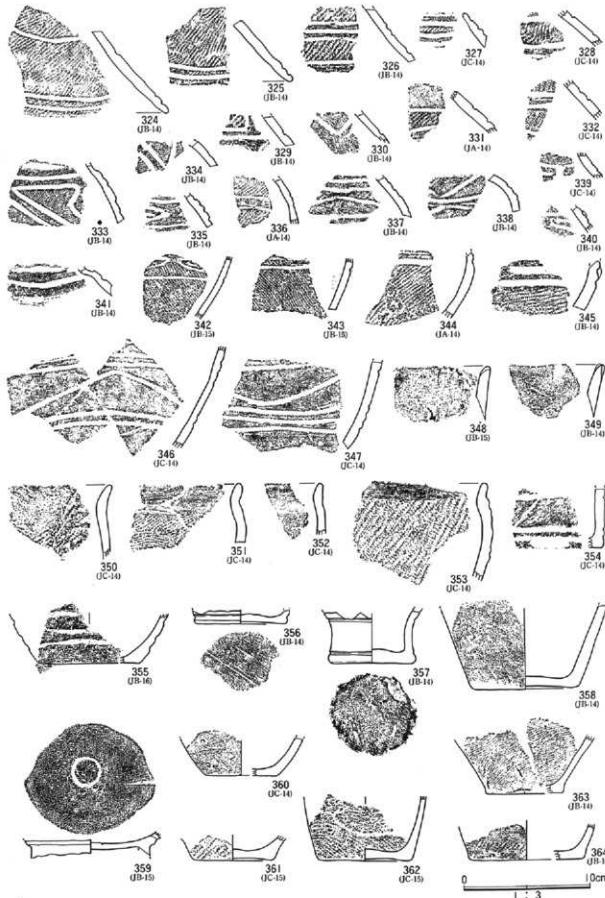
われる。沈線間は細かい擦りのRLで充填されるが、上2段は無文となる。外面とも丁寧に研磨され、胎土は石英・細砂粒を含み、色調は黒褐色を呈す。317は水平と斜行の沈線で構成され、沈線間に細かい擦りのRLが充填され、316同様の文様で構成されると思われる。内面は丁寧に研磨されるが、器表は磨耗し、胎土は微砂粒を含む。色調は灰白色～黒褐色を呈す。

318・320・368は鉢形A類に属し、いずれもブロックの中心の縁辺で出土した。318・319・368は同一個体で、口縁部が内傾し、口唇は丸棒状をなす。文様は口縁部に沿って平行沈線が囲繞され、その下に複数の斜行沈線が描出され、下端には平行沈線が巡らされる。368は刺突文を挟んで、弧線の区画が描出され、318・319とはやや様相を異にしている。沈線は3mm幅で浅く、蛇行して、稚拙に描出され、口縁部を除き、地文としてRが施される。器表はややざらつくが、内面は丁寧に研磨され、胎土は粗砂粒を多く含む。色調は灰黄褐色～黒褐色を呈す。320は口唇が平坦で、口内に弱く張り出し、口縁部にRL?が施される。文様は口縁部に沿って2条の沈線が巡らされ、下段の沈線から工字形状の圧痕が加えられ、陽刻部が反転し、変形工字文を構成すると思われる。沈線は2.5mm幅で深く明瞭で、斜行沈線は2本存する。彫去部は粘土がやや高まり、沈線間は無文で、丁寧に研磨される。胎土は細砂粒を多く含み、色調は黒褐色を呈し、器面上には炭化物が付着する。

321～332は蓋形である。321は口縁部を1/3欠損するものの略完形で、器高は6.2cm、口径は14.4cm、底径は6.4cm、器厚は4～5mmを測る。口縁部は弱く外反し、口唇は面取りされ、外側を向くが、一部薄く丸棒状をなす。文様は3.5～4mm幅の幅広の沈線で描出され、3単位からなる対向する三角形と舌状突起のモチーフで構成され、LRが充填される。器面は丁寧に研磨され、底部には箆葉状の圧痕がみられる。胎土は細砂粒・滑石を多く含み、色調は浅黄褐色～暗褐色を呈す。322は1/4弱の残存で、推定口径は15.2cmを測る。鼓状のモチーフで構成され、区画内は細かい擦りのLRで充填されるが、筋は不明瞭で、口縁部の一部にも繩文が認められる。器面はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は褐灰色を呈し、器表には赤色顔料の付着が認められる。323は口縁部が弱く内嚙し、口内に稜を形成し、口唇は口内から引き出された粘土がやや突出する。文様は箆描文で上下に対向した山形状突起が描出され、区画内に1段多条LR?が充填される。内面は研磨されるが、器表はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色～黒褐色を呈す。なお292は浅鉢形A類として提示したが、323と同一個体で、328も同様である。

324は口内が薄く作出され、口唇は尖錐で、口縁部と体部に沈線が囲繞され、地文にLRが施される。内面は研磨されるが、ややざらつき、胎土は細砂粒・滑石を多く含み、色調は浅黄褐色を呈す。325も同様の土器であるが、口唇が面取りされ、外側を向き、内面は丁寧に研磨される。326・327は底部付近の資料で、平行沈線が巡らされ、繩文帯と無文帯で構成される。329～332も蓋形の破片資料で、329・330は直線的な区画で構成され、331・332は繩文帯を持つが、幅は一定ではない。332は器面が丁寧に研磨されるが、他はややざらつき、胎土は細砂粒・石英を多く含む。

333～338は壺形の肩部資料である。333は頸部との境界に段差を持ち、3～3.5mm幅の沈線で、



第37図 6 a ブロック出土土器 (2)

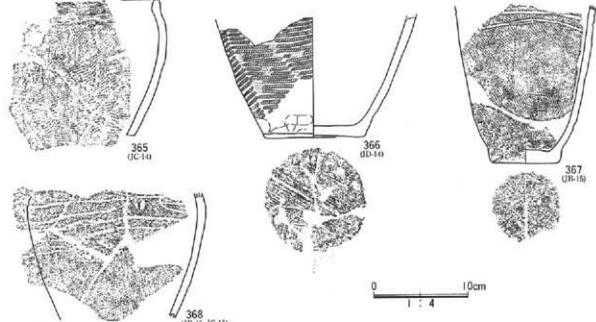
ハート状の区画が描出され、細かい擦りのLRで充填される。沈線間は無文で、幅が一定で、沈線間は丁寧に研磨されるが、内面はかなりざらつく。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色～黒褐色を呈し、器表に赤色顔料の付着が微かに認められる。334は333同様無文部の幅が一定の曲線的な範囲で構成されるが、内面は研磨される。胎土は細砂粒を多く含み、色調は暗褐色を呈す。335は上下端が区画され、3mm幅の明瞭な沈線で、変形工字状の文様が描出される。器面は研磨され、胎土は細砂粒・金雲母を多く含み、色調は黒褐色を呈す。336は1cm幅の無文帯が囲まれされ、沈線の上下に細かい擦りのRLが縦位方向に回転施文される。器面は研磨されるが、内面がややざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は黒褐色を呈す。337・338は同一個体で、上下端の区画沈線内に波状文が描出され、綱文が充填されるが、器表の磨耗が顯著で判然としない。波状文は2段で構成され、上段の波底と下段の波頂が符合し、上段は波状文の上、下段は波状文の下に纏文が充填されると思われる。内面は研磨され、胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は灰白色を呈す。

339～341は臺形の肩部上端の資料である。339は緩く外反し、文様は工字状の彫去が加えられ、変形工字文で構成されると思われる。沈線は3mm幅で浅く、彫去部はやや深い。器面はややざらつき、胎土は細砂粒・赤色粒子を多く含む。色調は灰黄色を呈す。340は工字状の彫去が加えられ、変形工字文で構成される。彫去の右脇は粘土粒で高まり、沈線は3.5mm幅で明瞭である。内面は研磨されるが、器表は磨耗し、胎土は細砂粒・石英を多く含む。341は頭部との境界に段差を持ち、4～4.5mm幅の平行沈線が囲繞され、沈線間は幅広の無文帯をなす。器面は研磨されるが、内面は剥落しており、胎土は細砂粒を多く含む。色調は灰黄褐色を呈す。

342～345は浅鉢形乃至鉢形の体部資料である。342・343は同一個体で、中心より南の小ブロックで出土した。2mm幅の沈線で文様帯が区画され、上位には沈線の反転が対向して認められ、細かい擦りのRLが地文として施される。内面は丁寧に研磨されるが、炭化物が付着し、胎土は細砂粒を含み、色調は灰白色～黒褐色を呈す。344は4.5mm幅の明確な沈線が巡らされ、体下半にはLRが施文される。沈線間にも纏文がみられ、器表には炭化物が多く付着する。器面は研磨され、胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は浅黃橙色～黒褐色を呈す。345は5.5～6mmの幅広の沈線で、工字文が描出され、陽刻の反転部は粘土で多少高まり、体下半には横走するLRが施文される。器面は多少ざらつき、炭化物が若干付着し、胎土は細砂粒・石英を多量に含み、色調は灰黄褐色～黒褐色を呈す。

346・347は鉢形乃至深鉢形の体部資料で、同一個体である。2乃至3条の区画沈線内に波状文が描出され、沈線は3.5mmで浅い。器面は研磨されるが、部分的にざらつき、胎土は細砂粒・石英を含み、色調は褐灰色～にぶい黄橙色を呈す。

348～353・365は深鉢形A類に属する。348・349は同一個体で、口唇は内側に薄く尖锐で、口縁部には指頭圧が加えられ凹凸し、頭部の屈曲は弱い。348の下端には纏文の痕跡がみられるが、原体は判然とせず、349の口頭部には横位の刷毛目が認められる。器面は多少ざらつき、胎土は細砂粒・海綿骨針を多く含み、色調は灰白色を呈す。350は口唇が薄く作出され、体部はLRが施される。器面はざらつき、細砂粒・石英を多く含み、色調は灰黄褐色を呈す。351



第38図 6 a ブロック出土土器 (3)

・352・365は同一個体で、口頭部が屈曲して短く立ち上がり、口唇は丸味を持って外傾する。口内はナデ調整により後が作出され、口頭部も強いナデが加えられ、体部とは明確に区分される。体部にはLRが施され、体下半は横走する。内面は口内以外はややざらつき、器表上半には炭化物が付着する。胎土は細砂粒・滑石を多く含み、色調は灰黄褐色～黒褐色を呈す。353は口頭部が屈曲して短く立ち上がり、口唇は丸味をもって外傾する。口内及び口頭部にはナデ調整が加えられ、体部とは明確に区分され、体部にはLRが施文される。器表には炭化物が若干付着し、内面の屈曲以下には竪状工具の擦痕がみられ、ややざらつく。胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調はにぶい黄橙色～黒褐色を呈す。

底部 (354～364・366・367)

354～357は浅鉢形乃至鉢形の底部である。354はほぼ垂直に立ち上がり、平行沈線と纏文帯で文様が構成される。磨耗が顯著で、色調は褐灰色～黒褐色を呈す。355は推定底径8cmを測り、文様は区画内に波状文が施されると思われ、器面は著しく磨耗し、纏文の有無は判然としない。胎土は細砂粒を多く含み、色調は褐灰色を呈す。356は推定底径7.1cmを測り、体部下端に沈線が巡らされ、弱い上げ底をなす。底面には竪葉状の圧痕がみられ、器表は丁寧に研磨されるが、内面はざらつく。胎土は細砂粒・赤色粒子を含み、色調は浅黃橙色を呈す。357は底径が6.6cm、器厚は6mm、底面の器厚は11mmを測る。底部が弱く張り出し、体部が外反気味に立ち上がり、2条の沈線が囲繞される。上端には纏文の痕跡がみられ、纏文帯を形成すると思われ、蓋形の可能性も高い。器面はざらつき、内面に炭化物が少々付着し、胎土は細砂粒を多量に含み、色調は灰白色～褐灰色を呈す。

358は底径が8cmで、底面は弱い上げ底をなす。体部は無文で、器面は研磨されるが、内面はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙色～黒褐色を呈す。

359は台付浅鉢形で、中心より南の小プロックで出土した。底径は9.3cmを測り、内面には2.3~2.4cm径の円文が配され、緩やかに立ち上がるため、体部との境界は不明瞭である。側面には沈線が巡らされ、脚部との境界は隆線状をなし、段差をもって明確に区分される。器面は研磨されるが、裏面はややざらつき、色調は灰白色~灰黄褐色を呈す。円文の特徴から大洞A'式乃至その直後に位置付けられる。

360は推定底径が5.6cmで、側面は無文である。器面は研磨され、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰黄褐色を呈す。

361~364は縦文が施文される鉢形等の底部である。361は底径が6.3cmで、弱い上げ底をなす。底部直上で外反し、側面にはLRが施文される。器面は研磨されるが、粗雑な仕上がりで、胎土は細砂粒を多量に含み、海綿骨針・石英も含む。色調は灰白色を呈す。362は底径7.4cmで、弱い上げ底をなし、側面にはRLが施文される。器面はざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色~褐灰色を呈す。363は推定底径が6cmで、体部には細かい擦りのLRが施文され、下端の一部にナデ調整が加えられる。器面は研磨され、胎土は石英を多く含み、色調は灰白色を呈す。364は推定底径8.8cmで、体部にLRが施文され、下端にナデ調整が加えられる。器面はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰黄褐色を呈す。

366は深鉢形の底部で、現存の器高は12.6cm、底径は10.6cm、器厚は8.5~10mmを測り、底面は弱い上げ底をなし、葉茎状の疵痕が2重にみられる。側面には横走するLRが施文され、底部は弱く張り出し、その直上は指頭圧痕で凹凸する。原体は3~3.5cmの長さで、節は明瞭で、部分的に炭化物が付着する。器面はややざらつき、胎土は細砂粒・石英・海綿骨針を多く含み、色調は灰白色~褐灰色を呈す。

367は鉢形の底部で、現存の器高は16.7cm、底径は7cm、器厚は7mm、底部の器厚は14mmを測る。体下端にナデが加えられ、底部が弱く張り出し、底面には木葉痕を持つ。体上半には平行沈線が囲繞されるが、蛇行し沈線間は一定ではなく、また地文としてRが施文され、下端では縱走する。器面は研磨されるが、底面はざらつき、胎土は細砂粒・石英を多く含む。器面の一部に炭化物が付着し、色調は暗褐色~黒褐色を呈す。

石器(404~407・409~414): 404~406是有茎石錐である。404はチャート質で、長さ36mm、幅13mm、厚さ7mm、重量2.37gを測る。中央に調整が及ばず、粗雑な作りである。405は頁岩製で、長さ30.5mm、幅13mm、厚さ5.5mm、重量1.8gを測る。基部の先端は切断され、側邊の抉り込みは強い。406は頁岩製で、長さ36.5mm、幅13mm、厚さ4mm、重量1.53gを測る。中央に平坦面を残すが、精巧な作りである。407は柳葉形の小型の石錐である。頁岩製で、長さ18mm、幅7mm、厚さ5.5mm、重量0.73gを測る。先端は鈍く、厚味があることから、未成品と思われる。409は二次加工のある不定形の頁岩製の石器で、重量は47.19gを測る。剝片の表面の縁辺に連續して細かな加工が加えられ、裏面のバルブ付近に散発的に二次加工が加えられ、表面下端及び打点に表皮が認められる。410・411は頁岩製で、共に尖頭部が作出されており、石錐の未成品と思われる。重量は前者が2.02g、後者が1.86gを測る。412は頁岩製で、縦長剝片の側辺に表裏別々の調整が加えられたもので、途中で切断されている。つまみ部の作出が意図されるこ

とから、石錐の未成品と思われる。413は頁岩製で、横長剝片の両側辺に調整が加えられ、上端が尖頭状に作出される。414は頁岩製で、縦長剝片の両側辺に粗い調整が加えられる。

6bブロック (第39・40図、図版12)

6aブロックの東4mに位置し、その中心はJD15・KA15区の6×8mのまとまりで、中心から東7mのKC15区にも小さなブロックが存在する。出土した遺物の総数は764点で、その内の2/3は土器で占められ、弥生土器はブロックの東端と西端から出土した。弥生土器は第I群土器が主体で、6aブロック同様弥生中期初頭の鱗沼式期の土器がまとまっているが、6aブロックでは未検出の第II群土器も出土している。遺物の出土レベルは105.9~106mで、レベル差は10cmで、6aブロックと同様の位置にある。

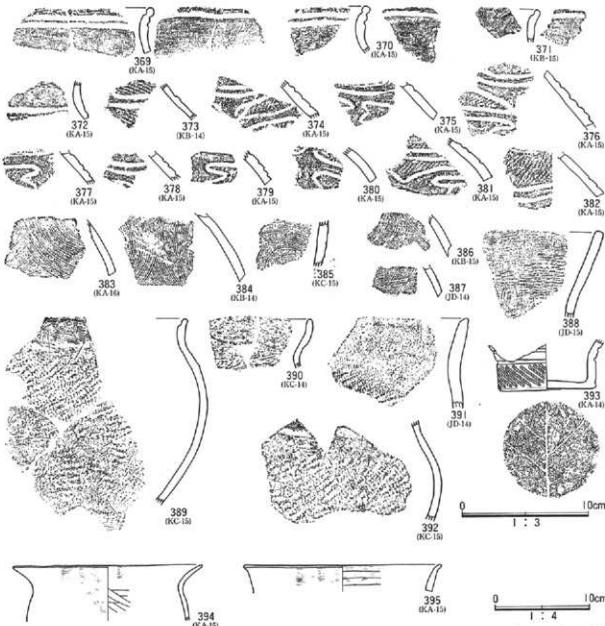
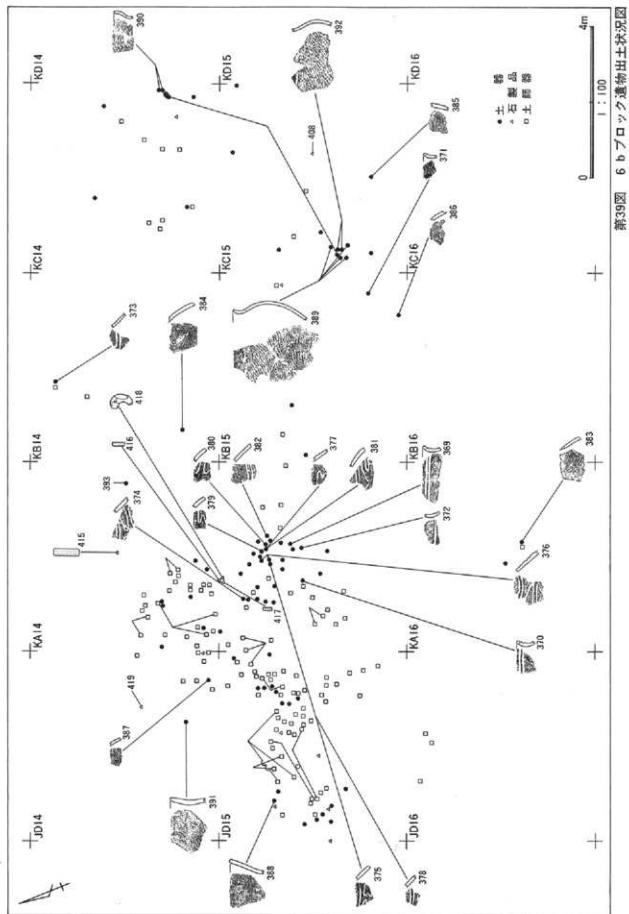
第I群土器 (369~382・389~393)

369~372は鉢形C類に属する。369・370・372は同一個体で、372の天地は逆である。口唇は丸棒状をなし、口内に1条、口縁部に2条の沈線が巡らされる。器面は研磨され、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色~にぶい黃橙色を呈す。371は口唇が丸棒状をなし、口内に沈線が巡らされ、口縁部は無文となる。器面は研磨されるが、内面はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調はにぶい橙色~灰褐色を呈す。

373~382は蓋形である。373はブロックからやや離れて出土した。器面の磨耗が顕著で、胎土は細砂粒を多量に含み、色調は灰白色を呈す。374~381は同一個体と思われるが、379~381は弱く内側する。文様は対向するハート状の範囲を上下で交互に半單位ずらして配置し、区画内はLRが充填され、5ブロック出土の第33図254~259に類似した構成となる。器面は研磨されるが、ややざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色~灰褐色を呈す。382は繩文帯と無文帯で構成され、器面はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。

389~392は深鉢形A類に属する。389・392は同一個体で、体上半に膨らみを持ち、口縁部が弱く外傾する。体上半が球状をなすことから、広口壺とすることもできよう。口唇は丸棒状をなし、口内に沈線が囲繞されるが、沈線幅は一定ではない。口頭部は研磨され、392の体部との境界には段差が形成されるが、389は明らかではなく、体部にはLRが施文される。内面も研磨されるが、上半はややざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、器表に炭化物が少々付着する。色調は暗褐色を呈す。390は口縁部がやや内寄し、口唇は丸棒状をなし、体部にはLRが施文される。器面はざらつき、胎土は細砂粒を多く含み、色調はにぶい黃橙色~褐灰色を呈す。391は頭部が緩く外反し、口唇は内傾し尖鋸形で、口縁右端に指頭圧がみられ、体部にはLRが施文される。口縁直下及び口内にナデ調整が加えられるが、他の器面は多少ざらつき、胎土は細砂粒・海綿骨針を多く含み、色調は灰白色~褐灰色を呈す。口縁部の状況から第37図348・349と同一個体と思われる。

393は底径が7.8cmで、底面は弱い上げ底をなし、木葉痕を持つ。器面は垂直に立ち上がって外反し、繩文帯と無文帯で構成される。器面はややざらつき、細砂粒を多く含み、色調は灰白色~黒褐色を呈す。第36図321との形態の類似から蓋形と思われる。



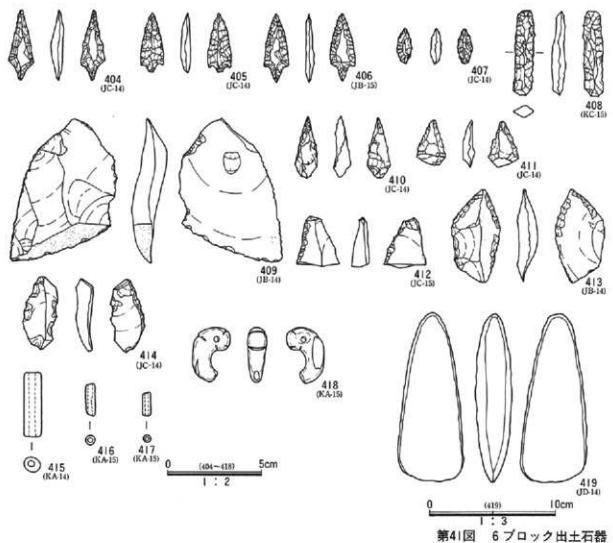
第二群土器 (383~388)

383~385は同一個体で、壺形の肩部と思われ、2mm幅の平行沈線で渦巻文が施される。器面はややざらつき、胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は灰白色を呈す。386も同様の土器であるが、磨耗が著しい。387も壺形と思われ、2mm幅の平行沈線で文様が描出される。調整・胎土・色調は383~385に類似する。

388は壺形で、口頸部が弱く外反し、口頸部に横位方向、体部には縦位方向の細かい反の捺りR R ?が施される。器面はざらつき、胎土は細砂粒を多量に含み、色調は灰黄褐色を呈す。

土師器 (394・395)：いずれも壺の口縁部で、南小泉式に属する。394は推定口径20cmで、口縁部は横位、体部は斜位のハケ目が、395は推定口径21cmで、口縁部に横位のハケ目がみられる。

第40図 第6bブロック出土土器



第41図 6ブロック出土石器

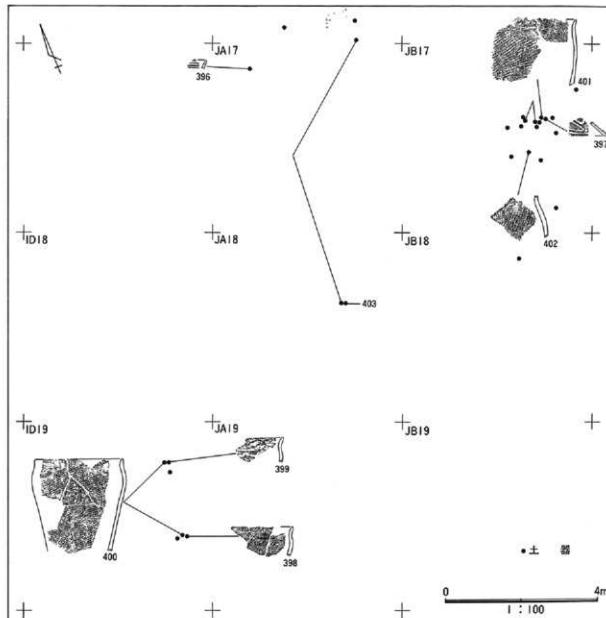
石器 (408・415~419) : 408は頁岩製の石錐で、長さ44mm、幅10mm、厚さ6mm、重量3.25gを測る。棒状を呈し、先端は尖鋸にはならない。415~418は古墳時代の玉類である。415は碧玉製の管玉で、長さ34.5mm、幅9mm、重量4.9gを測る。末端に磨き残しを持つが、精巧な作りである。416~418は近接して出土した(図版7)。416は蛇紋岩製の管玉で、長さ18mm、幅5mm、重量0.7gを測る。丁寧仕上げとなっており、表面は光沢を持つが、下端の穿孔面は斜行し、孔は両面から穿たれ、中央部が狭くなる。417は蛇紋岩製の管玉で、長さ12.5mm、幅4.5mm、重量0.3gを測る。416同様丁寧な仕上げであるが、上端の穿孔面はやや斜行し、穿孔もやや偏る。418は蛇紋岩製の勾玉で、長さ29mm、厚さ10mm、重量5.9gを測る。裏面の一部が剥離し、端部は雑であるが、全体的に丁寧に研磨され、側面に光沢を持つ。穿孔面はやや凹み、側面に弱い刻目が加えられる。419は安山岩製の磨削石斧で、長さ129.5mm、幅51mm、厚さ29mm、重量269gを測る。楔形を呈し、表面は凸凹してざらつき、研磨面が全く認められないことから、未成品と思われる。

6cブロック (第41・42図、図版12)

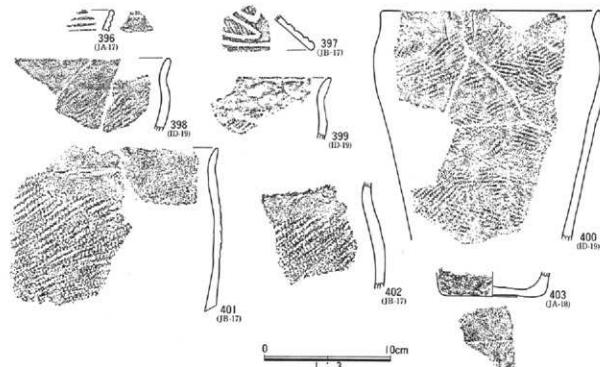
5ブロックと6aブロック間の散漫な分布を一まとめにしたもので、ブロックとは言い難いが、JB17区とID19区に小さなまとまりがみられる。出土遺物総数は59点で、その内第I群土器が43点出土したが、粗製の深鉢形が主体で、文様の判別される資料は少なく、多くは弥生初頭に属するものと思われる。遺物の出土レベルは105.85~105.95mで6aブロックに近く、小ブロック間での差異は認められない。

I群土器 (396~403)

396は浅鉢形C類に属すると思われ、口縁部が直線的で、口唇は丸棒状をなす。文様は平行沈線が囲繞され、隆線文状をなし、器面はややざらつく。胎土は細砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。



第42図 6cブロック遺物出土状況図



第43図 5c ブロック出土土器

397は蓋形で、口縁部は直線的で、文様は3mm幅の明確な沈線で三角状のモチーフが描出され、R Lが充填される。器面は丁寧に研磨され、胎土は細砂粒を多量に含み、色調は暗褐色を呈す。

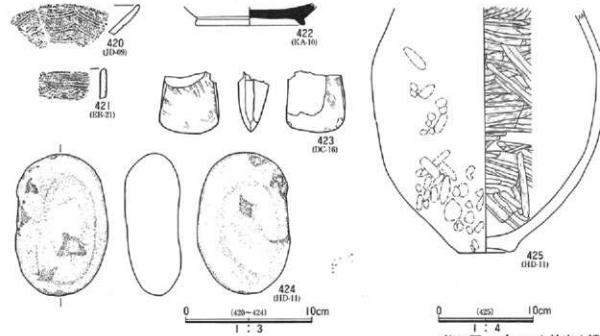
398~400は深鉢形A類に属し、ID19区で出土した。398は体上半が緩やかに膨らみ、口唇は丸棒状をなし、体部にはL Rが施文される。器面は磨耗するが、内面の一部は丁寧に研磨され、器表には炭化物が付着する。胎土は細砂粒・石英を多く含み、色調は黒褐色を呈す。399も同様の土器であるが、器表が大きく剥落する。400は口縁部の1/3が残存し、現存の器高は18.2cm、推定口径は17.3cm、最大径は18.4cm、器厚は6~7mmを測る。口内に稜が形成され、口唇は薄く丸味を持って外傾し、口頭部は研磨される。体部はL Rが施文され、部分的に横走し、上半には炭化物が付着する。内面は研磨されるが、口内は磨耗のためややざらつき、胎土は石英を多く含む。色調は灰白色~黒褐色を呈す。

401・402は深鉢形A類の同一個体で、JB17区で出土した。頸部は緩く外反し、口唇は薄く作出生され、指頭圧で小波状をなす。口頭部に擦痕を残し、体部にはL Rが施文され、炭化物が付着する。器面はざらつき、胎土は細砂粒・海綿骨針を多く含み、色調は暗褐色~黒褐色を呈す。

403は推定底径8.2cmで、弱い上げ底をなし、木葉痕を持つ。側面は無文で、ややざらつき、胎土は石英・滑石を多く含み、色調は灰黄色を呈す。

7 その他の遺物（第44図）

本遺跡から出土した遺物の大多数は、前述した10箇所の遺物集中地点で占められているが、



第44図 ブロック出土遺物

若干ではあるが、集中地点以外からも出土している。出土箇所は調査区の西端、旧河道路跡西側（HD11区）及び同東側（JD09・KA10区）に限られ、総数では僅か19点に過ぎない。

第II群土器（420・421）

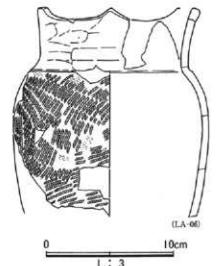
420は蓋形で、4本1組の平行沈線による連弧文が施文され、沈線の幅は10mmを測る。器面はナデが加えられるが、内面はざらつき、胎土は細砂粒・金雲母・石英を含む。色調は浅黄橙色を呈す。421は口唇が丸棒状をなし、口縁部に沿って3.5mm幅の平行沈線が2条巡らされ、その直下に網目文が施文される。器面は研磨され、胎土は細砂粒・金雲母を多く含み、色調は暗褐色を呈す。

須恵器・土師器（422・425）

422は須恵器の壺の底部で、推定底径は11.6cmを測る。

425は土師器の壺で、口頭部を欠損する。現存の器高は26.4cm、最大径は25cm、底径は5.8cmを測る。内面は削りが顕著にみられるが、器表は磨耗しており、調整は判然としない。

石器（423・424）：423は1号住居跡の西側から出土した。流紋岩製の磨削石斧の刃部で、表面は丁寧に研磨される。刃部はやや凹凸し削離痕が残るが、その中まで研磨が及ぶ。424は安山岩製の叩石で、旧河道路跡西側に近接して出土した。表裏面に弱い凹みを持ち、左側面には敲打痕が認められる。重量は475g。



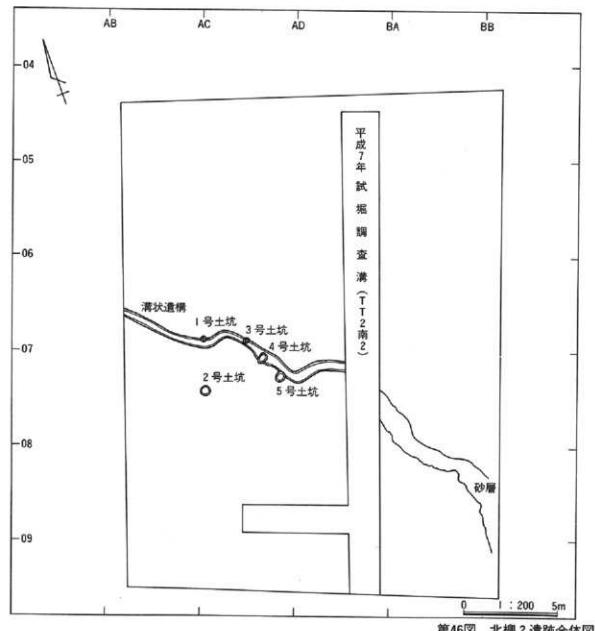
第45図 2ブロック出土土器（3）

IV 北柳2遺跡

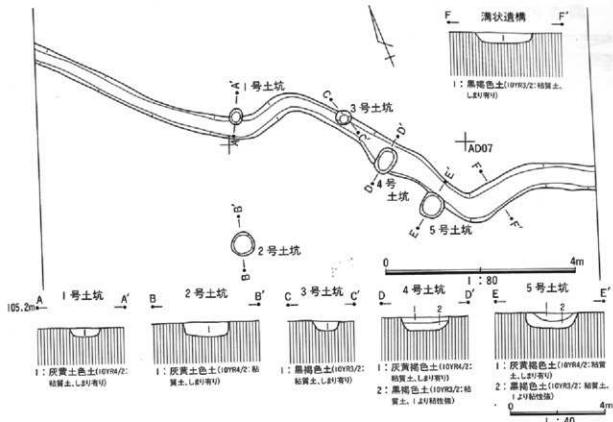
北柳2遺跡からは30数点の土器と溝状遺構1条、土坑5基が検出された。遺構内からの遺物の出土は全く認められず、時期を特定するには至っていないが、検出面や周囲の遺物の状況から古墳時代以降の所産の可能性が考えられる。なお1995年の県教育委員会による分布調査では、遺跡の東側に弥生時代前・中期の遺物の出土が確認されており、遺跡の主体は本調査区外の県立中央病院予定地内にあるものと推測される。

溝状遺構（第46・47図）

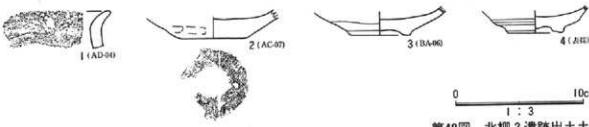
覆土と周囲の土質が近似しており、検出は困難であったが、僅かな土色の違いから遺構と認定した。調査区の西壁中央部から南東へ緩く蛇行し、西に向かって緩く傾斜する。試掘トレン



第46図 北柳2遺跡全体図



第47図 北柳2遺跡遺構実測図



第48図 北柳2遺跡出土土器

チを介した東側には、延長するように帯状の砂の層が認められた。自然作用で形成された層の方向に合致することは、人為的に営まれたものではなかった可能性も残される。

土坑（第47図）

土坑は5基確認された。溝状遺構同様検出は困難であったが、僅かな土色の違いから遺構と認定した。2号土坑を除いては溝状遺構に沿って検出され、溝を切って形成されている。いずれも小規模なもので、平面形態は不整円形乃至不整楕円形をなし、底面は平らで、深さは10~16cmと浅い。

出土遺物（第48図）

出土した遺物は少なく、ほとんどが土師器の細片である。1は縁の口縁部、2は木葉痕を有する底部であるが、所属時期については判然としない。3・4は16・17世紀の唐津焼きの皿と碗と思われる。

V 調査の成果

北柳1遺跡では古墳時代中期の竪穴住居跡が2軒、縄文時代晚期末葉の土坑が3基、縄文時代晚期末葉～弥生時代中期の土器の集中地点が10箇所検出され、遺物は総数で約7,100点が出土した。また調査区の北側中央部から西端にかけて旧河道路跡が検出され、土器の集中地点がそれに沿うように形成され、河川沿いに土器を廻収するという當為の結果が反映されている。取り分け縄文末葉から弥生初頭にかけての遺物が多数出土し、ブロック単位で年代的な推移が看取されており、当域の型式編年研究を進める上で、重要な成果を上げることができた。

北柳2遺跡では、古墳時代以降の所産と考えられる溝状遺構が1条、土坑5基が検出された。遺構内からの遺物の出土は認められず、調査区内からは僅か30点出土したに留まった。県教委の試掘調査からみて、遺跡の主体は調査区より東側の県立中央病院予定地内にあるものと推察され、今回の調査区は遺跡の縁辺部分に相当したと考えられる。

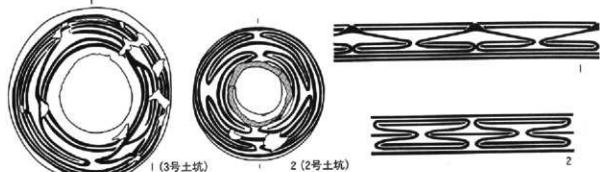
ここでは多大な成果を上げることができた北柳1遺跡の縄文時代末葉～弥生時代中期初頭の土器を検討することで、調査の総括としたい。

1～3号土坑について

本遺跡の縄文末葉期の遺構としては、土坑が3基検出されたのみである。いずれも5ブロック付近の近い位置にあり、大洞A'式期という編年の位置、小型壺を埋設するという行為に共通性が認められる。特に1号土坑と2号土坑は並んで検出され、その形態や小型壺の出土状況から相互に関連を有していたことが想定される。縄文終葉期の埋葬様式としては大型壺を埋設した土器棺が盛行するが、小型壺を埋設した例や、深鉢内に小型壺を埋納した例は皆見入っていない。葬送行為に伴うものと考えるには、土坑や遺物の狭い感は否めず、寧ろ儀礼的なかわりを有するものとみるべきであろうか。以下では土坑出土の土器の編年的位置について、更なる検討を加えたい。

1号土坑では、無文壺が倒立した状態で検出された。体部が無文の細口の小型壺は大洞A式に属する。多くは体部が球状をなし、底部は小さく作出され、口縁部には隆起の工字文が配される。本例も同様の特徴を有することから大洞A式への位置付けも考えられるが、2号土坑の小型壺を考慮すると、大洞A式より後出の可能性が高い。但し大洞A'式の小型壺は一般に底径が広がる傾向にある。東京大学所蔵の大洞貝塚A'地点の標識資料の中に、本例類似の小型壺が含まれている。最大径10.6cm、頸部径3cmの細口の小型壺で、口縁直下に3単位の工字文が施される。底部は欠損するものの、本例より若干大きく、体部が緩やかである(中村 1988)。

2号土坑では、有文の小型壺が正位の状態で出土した。文様は沈線文手法による2単位の流水文が施され、結合することなくそれぞれで完結し、反転部には沈線が充填される(第49図2)。区画内が工字状をなす構成から、一見大洞A式への位置付けが考えられるが、スリットがなく、沈線間が幅広で、反転部がやや尖鋭的な文様や、体上半が強く張り出し、底径が広がる器形の在り方は、大洞A式よりも新しい標相として捉え得る。同様のモチーフで構成される壺形を涉



第49図 小型壺文様模式図

観すると、反転部が丸味をもつものの宮城県山王町遺跡IV1-m層(須藤 1987)、青森県館向II遺跡(宇部・高島 1982)、同砂沢遺跡(弘前市教委 1988)に散見され、大洞A'式～弥生初頭に位置付けられている。特に砂沢遺跡では最大径10cm弱の類似した小型壺が出土しており、また山王町遺跡の層位の状況に立脚すると、本例は大洞A'式乃至その直後に位置する可能性が高い。しかし5ブロック内の出土土器は後述のように大洞A'式を主体としており、これ等を重視すれば、本例は大洞A'式への位置付けが妥当と思われ、従って1号土坑もそれ程時期差はないものと想定される。

3号土坑では、無文深鉢に小型壺が埋納されて検出された。小型壺(第12図2)は3単位からなる変形工字文で構成され、内1単位は間隔が狭く補足的な在り方を呈する。文様は四字状の抜きを基点に斜行沈線が垂下し、観る反転し水平沈線と化し、四字部直下から上方に反転してきた水平沈線と組む(第49図1)。四字部直下は抉り出されず、沈線の結合として描出されるが、基本的構成は第50図3の変形工字文に共通しており、底辺の四字部が貫通してX字状を呈したものと理解される。従って本例は大洞A'式への位置付けが妥当と思われるが、単段の変形工字文の底辺の抜きは、四字状をなすという規範が強く作用しており、底辺中央で充填沈線と区画沈線が連絡する例は、大洞A'式でも新しい段階に多く見受けられる。

小型壺とセットをなす深鉢(第12図1)は、器表が全くの無文で凹凸に富み、製作痕を明瞭に残す。無文であることから時期の特定に困難をきたすが、類似例は宮城県鰐沼遺跡(志間 1971)、同山王町遺跡IV1-m層、福島県岩下A遺跡(松本他 1988)で散見される。鰐沼例の詳細は不明だが、後二者はいずれも接合痕を明瞭に残し、山王町例は大洞A'式、岩下A例は晚期後葉～弥生中期に位置している。本例は接合痕が不明瞭であるが、下半にナデ調整による横位の凹みを持ち、器表に製作痕を残す技法の点では共通しており、同類と見なしえるであろう。伴出した小型壺から推して大洞A'式に位置付けられるが、口唇が尖鋭となる特徴は福島県浦尻磯坂遺跡(玉川・吉田 1987)の製塙土器に共通しており、時期的にもほぼ合致し興味深い。

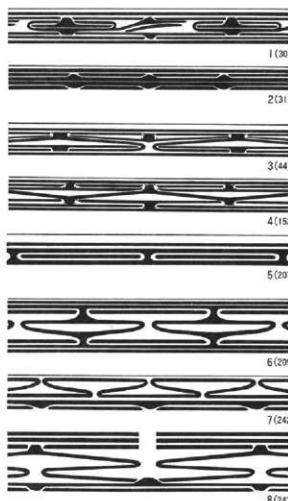
遺物集中地点について

今回の調査では10箇所の遺物集中地点が確認され、晚期大洞A'式乃至A'式～弥生中期鰐沼式

までを主体としたブロック毎の段階的変遷が看取され、特に2・4b・4c・6aの各ブロックにおいて良好なまとまりが観察された。以下ではブロック出土の土器を検討することで、ブロック毎の特性を明らかにし、型式編年研究における本遺跡の意義を明確なものにしていきたい。

1 ブロック

1は浅鉢形F類に属し、底辺に結合点を持たない変形工字文で構成されるが、反転部の様相は一様でなく、体上部は四字文が施される。器形は4bブロックの152に共通し、文様から大洞A'式に位置付けられる。浅鉢形F類は文様帯を口縁直下と体上部の上下2段に持つ点に特徴があり、宮城～福島北部の大洞A～A'式に散見される。口縁部形態は浅鉢形D類に共通することから、強い類縁性が想定されるが、D類の文様の多くが変形四字文で構成されるのに対し、F類は変形工字文の土器が多く、後者がやや後出ともいえる。本例は152に比し体上部の文様帯はあまり発達せず、類似例は宮城県猪俣貝塚（志間 1975）で出土している。7は小型の長胴の鉢で、文様は四字文で構成されるが、抉り込みが刺突状をなし下端が低く残存する。文様から大洞A～A'式に位置付けられ、山王田遺跡IVI-m層、Va・k層に類似する深鉢が散見される。6



1・2：I期、3～5：II期、6～8：III期
第50図 文様模式図

が、宮城県では梁瀬浦・岩ノ入・鹿野・鍛冶沢・鱒沼・赤生津の各遺跡、福島県では羽白C・宮内B・根古屋・道平の各遺跡でまとまって出土し、宮城～福島北部にかけて強い齊一性を有しており、一つの段階を画していたことは間違いない。本遺跡では4aブロック(147)・4bブロック(154)・4cブロック(241)でも出土している。

第45図は頸部の粘土が削り出され、体部とは段差をもって明確に区分される。この手法は4bブロックの200・201、5ブロックの267にも共通し、宮城県内では頸部が緩く括れる粗製深鉢や広口壺にも看取される。多少の時間幅を有するとしても、当該期の特徴と見なしえるであろう。

本ブロックで注意されるのは、変形工字文で構成される44～46(第50図3)が、31に近接して出土したことである。1個体のみの出土であるが、大洞A'式に位置付けられ、ブロックの下限を確定するものである。混在とみるか、共伴とみなすかは議論の分かれるところであり、上記の鈴木氏の立場は前者に、山王田遺跡IVI-m層の成果は後者の見解に該当しよう。いずれにせよ大洞A'式のまとまりである4bブロックと、本ブロックとの間に年代差が存しており、本報告では前者の立場では大洞A'式、後者の立場では大洞A'式古段階と理解し、大洞A'式乃至A'式のほぼ単純ブロックと評価した上で、判断は後日を期したい。

2 ブロック

7は浅鉢として提示したが、丸底の蓋形土器をなす可能性もある。丸底で底部に円文を有し、文様が磨消繩文で構成され例は、鱒沼遺跡の蓋形に看取される。また3本単位の沈線による文様施文例は、大洞A'式及びその直後の台付の脚部に多用される。多くは波状文を構成するが、秋田県横長根A遺跡(見玉 1984)では数条の平行沈線による三角形や連弧状の構図が発達する。本例とは直接結び付かないが、3本沈線の構図を有する点では示唆的である。上記から本例は弥生初頭(山王田III層～鱒沼段階)に位置すると思われるが、口唇の刻目はやや特異といえよう。73は波状口縁をなし、口内に間隔の開いた2条の沈線を巡らす。口内に2条の沈線を巡らす例は、大洞A'式の突起が発達した台付浅鉢に多くみられることから、大洞A'式の範疇であろう。体上部の3条の平行沈線は恐らく中央の線が途切れ四字状乃至工字状の抉りが加えられるものと推測される。

本ブロックは遺物数が少なく散漫な分布を示すため、1つのまとまりとして把握し得るかは疑問であるが、晩期大洞A'式と弥生初頭の遺物が含まれている。

4aブロック

本ブロックからは変形工字文で構成される浅鉢の小片が多く出土しており、大洞A'式を主体とするブロックとみることができるが、以下に記す様に大洞A'式直後の土器も若干含まれている。100は平行沈線を基本とする細い沈線で変形工字文風の文様が描出される。102は変形工字文風のモチーフと磨消繩文で構成され、蓋形とした128と同一個体の可能性もある。103は深く明瞭な沈線で曲線的モチーフが施されるが、波状文の可能性も想定される。133の円文は丸底の浅鉢形の底部と思われ、3ブロックの71に共通するものであろう。

本ブロックで特記されるのは137の条痕文の深鉢である。最上川中流域でも幾つかの遺跡で条痕文の出土が確認されており、佐藤嘉広氏は本例の如く細い条溝を有し条間が不揃いなもの

を大洞A～A'式に位置付けている(佐藤 1985)。本例は在地の器形を踏襲するものの、口縁直下が横位に削り出され、他の深鉢に比し丁寧な作りになっており、技術的に浮線文系土器群の影響が想定される。周辺出土の土器から推して大洞A'式に位置付けられるが、宮城県内では繩文施文の深鉢に併せて条痕・撚糸施文の土器が出土するのに対し、最上川流域での出土例は極めて少なく、太平洋沿岸に比べ浮線文分布域との緊密の度合いがやや稀薄であったことが推測される。なお5ブロックでも条痕施文の土器(273)が出土している。

本ブロックでは全ブロック中で最も多くの遺物が出土しているが、小片がほとんどで、変形工字文で構成される大洞A'式土器が多数を占めており、隣接する4bブロックとの共時性が推測される。また少数ではあるが大洞A'式直後や桜井式も出土している。

4bブロック

152は浅鉢形F類に属し、反転部が結合する変形工字文で構成され、屈曲部に刻目帯が巡らされ、体部上位にも変形工字文が施文される(第50図4)。浅鉢形F類が大洞A～A'式に特徴的であることは前述したが、屈曲部に刻目帯を巡らす例は、180や4aブロックの111・112にもみられ、本遺跡の大洞A'式を特徴付けており、類似例は山王団遺跡IVa・k層に散見される。153・155・160は口縁部に横長扁平の変形工字文が施される。弱く内側することから浅鉢形D類の可能性もあるが、文様の詳細は判然としない。154も浅鉢形D類の可能性が高い。2ブロック出土の30に類似した変形四字文で構成されるが、上段の四字文が大きく描出される。変形工字文を主体とする本ブロックの中では、古い様相を具備しており、混在とみなすべきであろうか。185～189は台付の脚部で、数量的に他のブロックを凌駕する。脚部の器高が短小で、波状文が単線で構成され、後続の型式よりは脚部が未発達であると見なしえることから、大洞A'式に位置するであろう。207は大型の浅鉢で、文様は隆線による単段の工字文で構成される(第50図5)。酒田市生石2遺跡(山形県教委 1987)、宮城県鹽沼遺跡、秋田県地蔵田2遺跡(菅原・安田 1986)等で類似資料が出土し、大洞A'式乃至その直後に位置付けられているが、本例は152に近接して出土したことから、大洞A'式へ位置付けられよう。大洞A～A'式の四字文の大型浅鉢の系統を引くもので、四字状の抉りが工字状に変転したものと思われる。

200・201の蓋の頭部の作出の特徴(頭部の削り出し)については前述したが、0段多条や境界付近のナテ調整の多用も看取れる。208は最大径を体中央に持つ球状の大型の研磨蓋で、口縁端部や肩部の装飾の有無は判然としない。大洞A式の蓋の系統を引くと思われるが、出土状況から判じて大洞A'式に位置するであろう。

本ブロックでは桜井式が若干出土したが、上記のように変形工字文で構成される土器が多数を占めることから、大洞A'式のほぼ単純ブロックとみなすことができる。東西2つの小ブロックから形成され、ブロック間に接合関係は認められないが、土器の内容に大きな差異はなく、ほぼ同時期の所産と考えられる。本ブロックの器種構成をみると、浅鉢・台付浅鉢・鉢・深鉢・蓋の5器種から構成され、蓋形土器は明瞭でない。時期的に近い位置にある2ブロックと比較すると、浅鉢ではF類やB類が顕著となり、脚部の出土から台付浅鉢が比重を増し、2ブロックに特徴的な対向する四字文は出土しない。また大型蓋や鉢形A類(176)が新たに加わ

り、底部の笠葉状圧痕(202)が認められ、深鉢では口頭部が伸長し、平縁が主体となる。限られた資料で一概に言いつけるのが、本ブロックの器種構成やその内容は2ブロックの系統下にあるものの、後続型式との連続性がより強まり、両ブロックが大洞A～A'式期の新古相を指示し、弁別されるものと理解される。

4cブロック

本ブロックからは変形工字文で構成される浅鉢形B類が出土する一方、流水文状のモチーフによる変形工字文の大形破片が出土した。

210・211・218は浅鉢形B類の同一個体で、4bブロックの161に類似する文様構成をなす。ブロック西側で出土し、大洞A'式に位置する。209は浅鉢形C類に属し、工字文のモチーフで構成され、上下端の反転部には抉りが加えられる(第50図6)。体下半には繩文帯を巡らし、類似例は宮城県青木畠遺跡(加藤 1982)に看取されるが、青木畠例は流水文状に横位に連続し、反転部間が離れ、本例の如く多段化しない。242・243は深鉢形C類に属する。深鉢形C類と鉢形B類の分別は主観的なならざるを得ないが、器高が高く、口縁部が長く立ち上がり、山形突起を配するものが前者に含まれ、本遺跡では4cブロックからのみ出土した。文様は横位に連続する流水文(第50図7)と、充填沈線を持たない複段の変形工字文(第50図8)で構成され、いずれも四字状の抉りが加えられる。本例は大洞A'式の口縁部が屈曲する装飾深鉢(山王団遺跡IVa・k層、IVl・m層に散見)の系統を引くと類推されるが、大洞A'式直後に位置する青木畠遺跡や山王団遺跡III層の中には認められず、他地域では小型化し、鉢形B類に収斂されてしまうのである。209・242・243は流水文状の文様からみて大洞A'式以降に位置するが、文様の基点に抉りが加えられ、磨消彫文が未発達であることは、山王III層式よりも古い特徴であり、青木畠式段階に相当するであろう。244は口端部に装飾を持たない広口の壺で、頸部との境界に3条の沈線が巡回され、体部には繩文が施される。沈線を1条巡らす壺は多くみられるが、3条を巡らす例は遠賀川系とされる大型壺に見出されており、その関与が想定される。遠賀川系の影響を想定すると、青木畠式相当の209・242・243とは同時期とみなして大過ないであろう。

本ブロックは西側に大洞A'式が含まれているが、中心からは青木畠式相当の土器がまとまって出土しており、ブロックの主体は大洞A'式直後と判断される。器種構成をみると浅鉢・深鉢・蓋・鉢・台付浅鉢の5器種からなるが、小破片資料は型式の判別が困難で、明らかに青木畠式段階と断定し得るのは前三者のみで、粗製深鉢が少なく、深鉢形C類が新たに加わる特徴が看取され、蓋形土器は検出されていない。また本ブロックからは剥片・chipが多く出土した。toolが殆ど出土せず、剥片等が多く占めていることは、他ブロックよりも石器製作に深く係わり、ブロック内に石屑等を廻棄した行為の結果を示していると思われる。

5ブロック

本ブロックはIA19区付近の南側ブロックと、HC16区付近の北側ブロックの2つの小ブロックから構成される。前者では変形工字文施文の浅鉢(251・252)や、頭部に段を持つ蓋(267)、条痕施文の深鉢(273)が出土したことから大洞A'式に特定され、3号土坑出土の土器と時期的にも合致する。一方後者ではハート状の範描文を基調とする鉢(254～259)が出土している。

このモチーフは菱形文乃至三角文に加えられる舌状突起が発達し分離したもので、同様のモチーフは寒河江市石田遺跡にもみられ、宮城県鰐沼遺跡で多く出土している充填繩文手法を伴う入組文の土器に共通する。従って北側小プロックは弥生中期初頭の鰐沼式(須藤 1984)に相当するまとまりで、時期的には6aプロックに近似する。

上記した様に、本プロックは大洞A式と鰐沼式の2つの小プロックから構成され、本来は別個のプロックとして取り扱うべきものである。

6a ブロック

本プロックからは、範囲 5×8 m、層厚10cm内の幅で土器が密集して検出された。出土状況から鰐沼式の一括性の高いまとまりということができるが、それ以前の土器も含まれている。

278~280は浅鉢形B類で、複数の変形工字文で構成される。沈線が2本1組を単位とし、区画内が繩文で充填され、沈線間が無文となることから、大洞A式以降に位置するが、沈線が直線的で、交点に粘土粒の貼付がみられるることは、古い様相を残しており、大洞A式直後の青木畠式に併行する可能性が高い。282~285・304は同一個体の浅鉢形A類で、文様は波状文で構成されると思われ、磨消繩文は認められない。頂点に抉りがなく、細い沈線で施文されるることは、変形工字文の系統を引くものの、崩れた構成となっており、青木畠式～山王III層式段階への位置付けが妥当と思われる。307は刺突文を持つ鉢形C類で、御代田式に特徴的な頸部の収縮する丸底の鉢に対比される。刺突文は東北北部の砂沢式に多用されるが、東北南部の御代田式にも看取され、本例は小さい刺突文であることと器形的特徴から、後者との類縁性が強いよう思われる。305も同類の丸底の底部であろうか。

308~311は鉢形C類で、口縁と口内に沈線を巡らし、310・311は繩文帯が形成される。器形は前述の御代田式の鉢に共通するが、御代田例は口縁直下に文様が展開する。口縁に繩文帯を巡らし、頸部が無文となる鉢は福島県糸六橋遺跡(須藤 1984)にみられ、体部は充填繩文手法を伴う複雑な文様構成をなし、後続の鰐沼式段階に位置付けられる。本例も同類の鉢と思われる。なお鰐沼遺跡では体部に刺突が充填される同様の鉢が出土している。

318・319・368はプロックの中心の縁辺から出土した鉢形A類である。斜行斜線や刺突を挟んだ対称的構図(368)は、変形工字文の残影とも受け止められるが、ナゾリが加えられない蛇行した沈線で、磨消繩文は展開しない。鉢形A類は一般には丁寧に施文され、器面に煤が付着することが多く、煮沸容器としての機能を果たしていたと考えられ、鰐沼式期に盛行する。本例は稚拙な文様抽出ではあるが、変形工字文がかなり形骸化しており、蓋形土器と同時に位置するものであろう。320も鉢形A類に属し、変形工字文で構成される。文様の詳細は明確ではないが、磨消繩文で表現されず、半肉彫的な手法が用いられることが、318・319・368より古く、大洞A式直後に位置するであろう。

321~332は蓋形土器で、331を除いてプロックの中心から出土している。いずれも充填繩文手法を伴う入組文で構成され、笠形の形状を呈する。321は略完形で、3単位からなる対向する三角形と舌状突起のモチーフで構成される。3単位の文様は大洞A式以来の伝統であり、三角形が対向する組合せは変形工字文の変転したものとも受け取れ、同様のモチーフは鰐沼遺跡

に認められるが、鰐沼遺跡では4単位の文様構成が目付く。322は内彎する器形で、鼓状のモチーフで構成され、赤色顔料が付着する。鼓状のモチーフは山王III層式に盛行する磨消繩文手法を伴う工字文や台付脚部に展開する垂下文に系統が辿れ、前者が直立し横長であるのに対し、後者は横臥し太く短い構成となる。いずれの系統にあるかは判断しかねるが、類例は鰐沼遺跡の蓋形土器にみられる。323は上の繩文帯に対向した山形状の突出が加えられ、324・325は繩文地に沈線が團結され、磨消繩文はみられない。蓋形土器は口縁にかけて直線状をなし、口内に沈線を持たない笠形のものが多数を占めるが、沈線を巡らす例も知られている(297・298?)。蓋としての用途は晩期終末の合口土器帯に用いられた浅鉢や鉢に起因するが、器種として独立した蓋形は東北南部では福島県一人子遺跡(馬目・古川 1970)に、中部では青木畠遺跡、山王圓窓III層にみられる。従って東北南半の太平洋側では大洞A式直後に定着するが、当初は台状のつまみが付く粗製の蓋が多く、磨消繩文が頗著にみられるのは鰐沼式の段階であり、本プロック出土の蓋形土器は文様の特徴からいざれも鰐沼式に位置するであろう。

333は蓋の肩部で、5プロックの254~259と同様のハート状の竪描文で構成され、鰐沼式に位置する。337・338も蓋の肩部で、沈線を挟んで上下2段の波状文で構成され、繩文が充填される。波底と波頂が符合する波状文の構成は、山王III層式の台付脚部や鉢の体部にみられるが、通常は中央に複数の沈線を巡らす。338の下段の波頂の両脇に沈線の痕跡が看取されることから、本例も2条の沈線を巡らす可能性がある。346・347は鉢乃至深鉢の体部であるが、同様の単線による波状文で構成される。いずれも山王III層式～鰐沼式段階に位置するが、波状文が横長扁平に描出され、やや軟化した感を有することから鰐沼式段階の可能性が高いであろう。

351～353・365はプロックの中心の東側で出土した深鉢形A類で、口頸部が屈曲して短く立ち上がり、ナデ調整により体部とは明確に区分される。周辺出土の土器から判じて大洞A式直後～鰐沼式段階の粗製深鉢と思われるが、青木畠遺跡や山王圓窓III層では口頸部が短く立ち上がる例はなく、また鰐沼遺跡では伝統的な深鉢(深鉢形B類)に、列点文・ナデ調整を有する定型化した蓋形土器が加わる。山王圓窓III層では口頸部が軽く磨かれ、鰐沼例も横ナデがみられる点では本例に共通するが、体部と明確に区分される特徴は前述した大洞A式の蓋にも認められており、時間幅を持って考えるべきものであろう。

312・314～317・342・343・355・359は、プロックの中心から南に4m離れたJB15～JB16区の小プロックから出土し、時間的にまとまりを持った資料と思われる。312・314は鉢形C類の小プロックから出土し、時間的にまとまりを持った資料と思われる。312・314は鉢形C類に属し、口唇に突起が配され、直下に沈線が巡らされる。315～317は鉢形B類で、繩文を充填した変形工字文で構成され、342も磨消繩文の変形工字文風の文様が描出される。いずれも磨消繩文を伴う変形工字文で構成されることから大洞A式直後に位置し、314・316の体上端の描出技法(体上端が隆線状をなす)が4cプロックの242・243に共通することも、その妥当性を示唆するものといえよう。359は底部内面に円文が施される。底部内面の円文は大洞A式新段階(沈線と刺突の交互文様を持つ台付浅鉢)に広くみられ、東北北半では砂沢式(大洞A式新段階併行)に盛行するが、二枚構式には残らない。東北南半では東根市蟹沼遺跡出土の大洞A式にみられることから、大洞A式まで残存することは確実であるが、下限は明確ではない。本例は周

辺出土の土器から大洞A'式直後に位置する可能性が高く、円文が弥生初頭まで残存し得るものは、本例を以て問題提起としたい。

本ブロックからは鱗沼式に位置する土器が密接して多数出土したことから、一括りの高いまとまりということができるが、大洞A'式とその直後の土器も若干出土しており、多少時間軸を持って形成されている。本ブロックの器種構成をみると、浅鉢・台付浅鉢・鉢・深鉢(甕)・壺・蓋形土器の6器種で構成されるが、大洞A'式直後(青木畠式～山王Ⅲ層式段階)でみると浅鉢・台付浅鉢・鉢・深鉢・壺の5器種からなるのに対し、鱗沼式段階では蓋形土器が新たに加わる一方、台付浅鉢(高坏)が不明瞭となり、また御代田式の系統を引く鉢形C類(308～311)と、蓋形とセットをなす鉢形A類(293～295・318・319・368)が盛行する。台付浅鉢(高坏)が稀になる傾向は鱗沼遺跡でも看取られ、台付浅鉢(高坏)が盛行する前後の型式とは対照的である。本ブロックの精製土器は太平洋沿岸と転を一にした展開を示すようであるが、粗製深鉢をみると鱗沼遺跡のように定型化した壺は一切みられず、多少地色が存していることも想定される。本ブロックでは蓋形土器が新たに加わることで、以前のブロックに比し弥生土器の色彩が強まるものが多く、未だ弥生土器に脱却しきれない様相をも窺わせている。

6bブロック

6aブロックに隣接し、土師器に混在した状態で弥生土器が出土している。369・370・372は鉢形C類に属し、口縁と口内に沈線を巡らす。大洞A'式に盛行する浅鉢形F類との類似性が強く、類似例は大洞A'式(宮城県赤生津遺跡)～青木畠式(宮城県田柄貝塚)の中に散見される。374～381は蓋形土器で、ハート状の箋描文で構成されるが、5ブロックの254～259に類似することから鱗沼式段階に位置する。

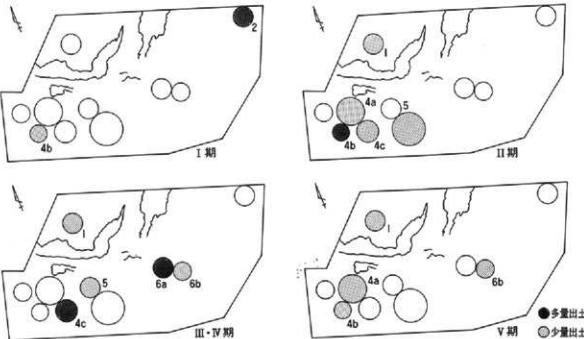
本ブロックからは上記の様に大洞A'式前後と鱗沼式、更には桜井式が出土しているが、主体となるのは古墳時代中期の南小泉式であり、6aブロックの主体を占める鱗沼式は僅かしか出土していない。なお玉類(415～418)はいずれも南小泉式期の所産である。

6cブロック

本文に記した通りブロックとしてのまとまりは持たず、5ブロックと6aブロック間の散漫な分布に過ぎない。JB17区では充填編文手法による蓋形土器(397)が出土しており、鱗沼式に位置する。近接して出土した401・402も同時期であろうか。

小 結

本遺跡から出土した土器について、10のブロック毎に詳細な検討を加えてきた。その結果本遺跡の晩期終末から弥生中期初頭にかけては、大洞A'式乃至A'式(以下大洞A'式と表記)段階、大洞A'式段階、青木畠式段階、鱗沼式段階の4つの段階の存在が明らかになり、更に桜井式を加えることで5段階の変遷を捉えることができる。最も古い大洞A'式段階をI期、最も新しい桜井式段階をV期と区分して各ブロックを概観すると、I期は2ブロック、II期は1・4a・4b・4c・5ブロック、III期は4c・6aブロック、IV期は5・6a・6bブロック、V期は1・4a・4b・6bブロックが相当する。特に主体となるブロックの変遷を明示すると、以下の通りである。



第51図 北柳I遺跡時期別変遷図

2ブロック→4bブロック→4cブロック→6aブロック→1ブロック (I期) (II期) (III期) (IV期) (V期)

上記の5期にわたるブロック毎の時間的推移を簡略的に図示したものが、第51図である。調査区の中央を流れる河川に沿って各ブロックが形成されるが、I期には2ブロックのみが上流の調査区東端に孤立して形成されたものに対し、II期以降は下流の調査区西方に広がりをみせ、II期は4bブロックとその周辺、III期はそれに近接する4cブロックと6aブロック、IV期は調査区中央の6aブロックとその周辺へと分布が推移し、V期は遺物の著しい集中ではなく調査区の広い範囲に認められる。なお5ブロックから検出された1～3号土坑はII期に属しており、遺物量は少ないが、5ブロックもII期の主体的なまとまりと見なすことができよう。

本遺跡で出土した晩期終末～弥生中期初頭の土器は、深鉢・鉢・浅鉢・台付浅鉢・壺・蓋形の6器種で構成される。その内蓋形はIV期に定着するもので、4期を通じて普遍的にみられるのは5つの器種である。以下では各器種類型の変遷を時期区分に沿って跡付けてみたい。

深鉢は煮炊き用の一般的な器種で、3類型に分類されるが、口縁部資料は非常に少なく、詳細は判然としない。多数を占めるのは口縁が屈曲し外反するA類で、I期は小波状口縁が短く立ち上がり(58・59)、II期では平縁で口縁部がやや長くなる(191～193)。V期では強く外反した定型的な壺(141)が出土するが、その間のIII・IV期の様相は判然とせず、平縁で口縁が短く立ち上がる例(351～353・365)を提示するに留まる。器形や製作技法・調整手法等の規格化(口頭部の強い屈曲・口唇の繩文・横ナデ調整・列点文・縫合文等)は、V期に明確となり、弥生土器特有の壺が定着する。屈曲しないB類はII期(190)にみられるが、口縁直下に横ナデが加えられており、A類同様口縁直下が製作工程において意識されていたことを窺わせている。

装飾深鉢であるC類はIII期(242・243)にのみ認められる。大洞A'式の口縁部が屈曲する装飾深鉢の系統を引くと思われるが、IV期にはみられず、III期特有の類型である。屈曲部を削り出すことで、区画沈線が痕跡と化し体上端の文様が隆線状をなす特徴的な製作手法が認められる。

鉢は深鉢と浅鉢の中間形態で、3類型に分類され、口縁が緩やかに内彎するA類が最も多く出土する。A類はII期(176)に出現し、IV期(6?・253・254・293・318)に最も盛行する。一般的に丁寧に施文されるが、煤の付着が顕著で、煮沸容器としての機能が類推され、蓋形土器とセットをなすものと推定される。口縁が短く立ち上がるB類は、I期(40?)には判然とせず、II期(119・120・177)に明確化し、III期(315~317)まで認められる。I期の広口壺(52・53)の系統を引くと思われるが、IV期にはA類が取って代わるのであろう。外反する無文の頭部を有するC類は、少数ではあるが連續とみられ、特にIV期(308~311)に盛行する。

浅鉢は底部が欠損するものが多く、台付との判別が困難で、認証を避けるため同一に扱った。口縁が直立乃至外傾するA類が最も多く出土するが、IV期の様相は判然としない。口端が屈曲して緩く外反したり、突起を配するものはI期(32・34・35・42)に多く、II期以降は少なくなる。口縁が強く内彎するB類は、II期(161・162・165・170~173・210・211・213・218)に盛行する。変形工字文で構成されるものがほとんどで、平縁で台の付くものが多い。逆台形状をなすC類は、I期(31)にみられるが、底部が張り出しており、寧ろD類に近い。本遺跡のII期では判然としないが、III期(209)にもみられる。周辺の遺跡を観察すると、本遺跡に明確でない大洞A'式新段階に盛行する器形で、大洞A'式直後~鱗沼式そして卦形乳皿まで継承される。底部が強く張り出すD類は、I期に特徴的な器形(30)で、丸底を呈し、口縁がやや内彎するものが多く、文様は変形四字文で構成される。II期ではF類が取って代わるように盛行し、D類は少なくなるが、他の遺跡では大洞A'式新段階に張りの弱い平底の浅鉢が散見される。底径を狭めることでIV期の蓋形土器への変容の過程を示唆しているようにも受け取れる。体部が屈曲するF類は、口縁形態がD類に共通し、II期(1・93・152)に盛行する類型であるが、I期(43)にもみられる。文様が変形工字文で構成され、屈曲部の刻目帯(111・112・152・180)が特徴的である。台付の脚部はII期(185~189)に盛行し、III期(359?)にもみられるが、I・IV期の様相は判然としない。宮城県内では鱗沼式に台付浅鉢が稀になる傾向が指摘されている(須藤 1984)が、本遺跡でも同様の過程を辿りうる。なおII期に比定される浅鉢には、磨耗の顯著なものが多々見受けられる。それは製作工程においてきめ細かな粘土が使用され、表面が擦れ易く風化したことによるもので、二次堆積による影響とは考え難い。特にA類とB類に分類されたものに多く、色調も灰白色を呈するものがほとんどである。

壺は4期を通して出土しており、II期に大型の研磨壺(208)がみられる。I~II期には頭部を削り出し、体部との間に段差を持つC類(200・201・267・268・第45図)が盛行し、境界付近のナデ調整や体部の0段多条を特徴とする。III期の244は3条の沈線を巡らすことから、遠賀川系の関与が想定され、IV期(333)は鉢や蓋形に共通する崩消繩文で文様が構成される。

蓋形土器は東北南半の太平洋側では大洞A'式直後に定着するが、本遺跡で明確となるのはIV

期で、それ以前の状況は判然としない。本報告では128・130・179を蓋形として提示したが、その可能性は低いといえよう。IV期の蓋形はいずれも笠形を呈し、充填繩文手法を伴う入組文で構成されており、粗製の蓋形は明確ではない。器形は浅鉢形D類に共通し、晚期終末の土器棺からの系統を窺わせている。なお東北北半に特徴的な円盤状の蓋形はみられない。

日本海沿岸の弥生初頭にみられる笠形状压痕は、II期(202)に確認され、IV期(321・356・366)に盛行しており、網代痕は少なく、木葉痕がやや卓越するようである。

本遺跡では、体部が内彎し、口縁が屈曲して外反する台付浅鉢が、ほとんど検出されず、また体上位が張り出す筒形の鉢も出土していない。これを地域性と見なすことも可能であるが、東根市蟹澤遺跡でまとまった出土がみられることから、1つの段階(後述の大洞A'式新段階)が欠如しているとみた方が妥当であろう。

以上を要約すると、I期は上下対称の匹字文(第50図1)と変形匹字文(同図2)を主要文様モチーフとし、浅鉢・鉢・深鉢・壺で構成され、浅鉢形D類を特徴とする。II期は変形工字文(同図3・4)を主要文様モチーフとし、浅鉢・台付浅鉢・鉢・深鉢・壺で構成され、浅鉢形B・F類が盛行し、大型壺や鉢形A類が加わる。III期は流水文状モチーフ(同図6~8)を主要文様に持ち、浅鉢・台付浅鉢・鉢・深鉢・壺で構成され、浅鉢形C類や深鉢形C類を特徴とする。IV期は充填繩文手法を伴う入組文を主要文様に持ち、浅鉢・鉢・深鉢・壺・蓋形で構成され、蓋形や鉢形A・C類が盛行し、台付浅鉢は稀となる。本遺跡において、蓋形土器に象徴される弥生土器が確立するのはIV期の段階であり、更に定型的な壺はV期になって定着し、それ以前の段階は晚期終末の器種構成が継承されており、著しい変化はみられない。

発掘調査当初、遺物の分布が河川に沿ってみられたことから、ブロックが二次堆積によって形成された可能性も想定された。しかし上記した様にブロックが時期的なまとまりを有し、磨耗した土器が特定の器種に限られ一般的でないことを、そしてブロックが形成された地点の土層がいずれも暗褐色の粘質土で、砂質土や砂利層からの出土が認められなかったことから、冠水による堆積作用の影響はないものと判断するに至った。河川沿いの淀みのような場所に土器等を廃棄した営為の結果が、今回の調査でブロックとして検出されたもので、廃棄単位としての一括性が極めて高く、年代的変遷の指標に十分耐え得るものと判断される。

編年的位置について

これまで本遺跡で検出された個々のブロックの出土状況を検討することで、晚期終末から弥生中期初頭にかけの4段階の変遷が認められることを説明してきた。即ち2ブロックが大洞A₂式段階、4bブロックが大洞A'式段階、4cブロックが青木畠式段階、6aブロックが鱗沼式段階に相当する。しかし精緻に体系付けられた東北地方の編年研究に照射すると、必ずしも連続した変遷過程を辿るものではなく、幾つかの段階が欠落する可能性が指摘されるようである。

先ず、須藤 隆氏が提示した山王塚遺跡の層位区分に基づく宮城北部の型式区分との対比を中心として、本遺跡の編年的位置について考えてみたい。山王塚遺跡では大洞C₂式から弥生初頭にかけての膨大な資料が出土し、7つの文化層に分離され、V・VI層からは大洞A式、IV層からは大洞A'式、III層からは山王III層式が出土した(伊東・須藤 1985)。この内のV層上部の

Va・k層からは匹字文や間隔の狭い平行線に2個一对の粘土粒を付した「工字文」、IV層下部のIVI・m層からは変形工字文や匹字文、IV層上部のIVa・k層からは変形工字文、III層では変形工字文C型や波状文を特徴とする土器が主体的に認められ、層位毎のまとまりを持つことが示されたが、更に青木畠遺跡出土土器群を加えることで、連続する土器型式の変遷を提示した(須藤 1983)。即ち山王ⅣVa・k層(大洞A式)→同IVI・m層(大洞A式古段階)→同IVa・k層(大洞A式新段階)→青木畠遺跡(青木畠式)→山王Ⅲ層(山王III層式)という序列であり、1984年の時点ではIVa・k層までを繩文土器に含め、青木畠式から弥生土器とする区分案を提示した。

この変遷序列に北柳1遺跡のブロックを対比させると、I期の2ブロックは四字文を主体とする文様構成から山王ⅣVa・k層に、II期の4bブロックは文様帶の幅の狭い変形工字文を主体とする文様構成から山王ⅣIVI・m層に、III期の4cブロックは磨消繩文を伴わない流水文状のモチーフで構成されることから青木畠式に相当すると考えられる。この対比が妥当であるとすれば、本遺跡では山王ⅣVa・k層と同III層に相当する段階が判然としないことになり、II~III期、III~IV期の間に断絶期が想定される。大洞A式の細別の問題と、青木畠式と山王III層式の細別の問題を、最上川中流域の他の遺跡を含めて検討する必要がある。

須藤 隆氏は、山王Ⅳ層を上下層に二分することで、大洞A式の細分案を提示した。下層のIVI・m層出土土器群は、壺・鉢・高环が定型化し、主要文様帶は幅が狭く、変形工字文・四字文が盛行する。変形工字文は上層に比べ彫刻的・浮線的で、主要文様間に斜線が充填される。一方上層のIVa・k層出土土器群は、壺・鉢・高环の文様帶幅が著しく拡大し、変形工字文がより齊一的な構成をとり、弥生土器に共通する變形土器が伴う。IVI・m層を山内清男博士が設定した「大洞A式」の古段階、IVa・k層を新段階に相当させ、後者が砂沢式に併行する可能性が高いことから、1987年以降は「弥生 Ia期」として弥生土器に含めている(須藤 1987)。

大洞A式は、1925年に調査された大洞貝塚A'地点出土の資料をもとに設定された土器型式であるが、山内博士が図示した標本は、沈線による変形工字文で構成された鉢で、頸部と体部の文様帶の合体を特徴とし、文様帶の幅が広く、斜線がやや弧状を呈し、結合点に大粒の粘土瘤が貼付される。東京大学所蔵の大洞貝塚A'地点の標識資料に新古相が存することは、中村五郎氏によって指摘されたが、その中でも図示資料は新しい部類に属している(中村 1988)。もし須藤氏が示した大洞A式新段階、山内博士の提示した標本資料に相当するものであるとすれば、標本資料が亀ヶ岡式土器の範疇でないことを意味することになろう。

須藤氏がIVa・k層出土土器群を弥生土器に含めた根拠には、畿内第I様式中段階に併行する砂沢式との器種構成・装飾・施文手法の共通性が挙げられており、IVa・k層から弥生土器に共通する平口縁の壺が出土したことが重視されている。従来みられなかった器種構成の変化に区分原理を見出し、平口縁の壺と蓋形が農耕文化の影響によって定着したと見なすことにより、生活様式の変化を想定した。確かに砂沢遺跡や生石2遺跡では、従来なかった蓋形や定型的な壺が器種構成に新たに加わる。しかしIVa・k層出土の平口縁の壺が、他地域の影響を想定しなければ出現しない器種であるかは問題であろう。東北中部の大洞A式には、口縁が屈曲し、体部との境界に沈線を巡らす小波状の粗製深鉢が多く出土するが、僅かではあるが平口縁も認められる

(岩手県九年橋遺跡等)。新たに加わった器種とみるとよりは、この類型が発展的に継承されたとする解釈も可能であろう。因って筆者はIVa・k層の内容が晩期終末の土器製作の伝統を強く引いているものと理解し、山内博士の標本資料を弥生土器に編入することには賛同しかねる。

先に本遺跡の4bブロックを山王ⅣIVI・m層に対比させた。その根拠は、浅鉢形B類に特徴的な文様帶幅の狭い変形工字文が多数を占めたことにある。しかしIVI・m層には四字文が多く、斜線を持つ変形工字文もみられることから、2ブロックに共通する特徴も留めており、単純に対比することは問題かもしれない。一方IVa・k層には三角形モチーフを主体とした定型的な変形工字文が盛行しているが、変形工字文の多段化や、斜線の平行沈線構成・弧線化と、青木畠式に連なる新しい傾向が看取される。斜線が弧状を呈する在り方は、大洞貝塚A'地点の標本資料にも共通しており、口縁部突起の発達、台付の大型化と共に大洞A式新段階の特徴とみなすことができるであろう。本遺跡にはこれ等の特徴を持つ土器群は判然としないが、周囲の遺跡を渉猟すると、東根市蟹澤遺跡(加藤他 1989)に顕著に認められる。蟹澤遺跡では脚部が発達し、口縁部が屈曲し外反する台付浅鉢や、変形工字文の斜線に平行沈線が加わり、体上位が張り出る筒形の鉢が多数出土するが、特に後者は大洞A式新段階から青木畠式にかけて、山形・宮城でみられる特徴的な器形である。4bブロック(II期)と4cブロック(III期)との間に、蟹澤遺跡を介在させることにより、山王Ⅳ層の層位的状況に対応した変遷を辿ることが可能になると考える。因って4bブロックは大洞A式古段階のまとまりとして把握されよう。

山王III層式は、山王Ⅳ層をIII層出土の土器を基に設定された土器型式で、壺と蓋形の定着、高环の盛行、C-C型変形工字文と磨消繩文手法の盛行が特徴として指摘され、更に先行する特徴を持つ青木畠遺跡出土土器群を介在させることで、晩期終末から弥生初頭にかけてのスムーズな変遷が想定された。青木畠式は壺と蓋の出現、高环の大型化、C-C型変形工字文の盛行と磨消繩文手法の未発達を特徴とし、大洞A式と山王III層式の間に位置付けられた(須藤 1983)。従って青木畠式は層位的に区別されたものではなく、型式学的に導出された土器型式である。

本遺跡の4cブロックは磨消繩文を伴わない流水文状モチーフで構成される土器が主体的であることから、青木畠式段階に位置付けた。流水文状をなすが、抉りが加えられ、変形工字文の影響が強く看取されることから、大洞A式直後に位置付けたのが実情である。しかし本遺跡に特徴的な深鉢形C類(242・243)は、青木畠遺跡にはみられず、また類似するモチーフも存在しない。宮城南部に該当する型式がないため、青木畠式に対比させた訳で、積極的根拠を欠いており、この位置付けの妥当性は、今後の資料の増加を待って検討する必要がある。周囲の遺跡の類型は、変形工字文の影響を強く残す山形市漆山遺跡出土の壺(菱形文を重層的に捺出)や、定型的な文様に軟化の兆しをみせる蟹澤遺跡の一部に可能性を指摘するに留まる。

本遺跡では山王III層式段階が判然としない。須藤氏によると、山王III層式に共通する特徴を持つ土器は広範囲にひろがりをみせるということであるが、高环V-a類や磨消繩文を伴うC-C型変形工字文に着目すると、蟹澤遺跡や天童市地蔵池遺跡に該当例がみられる。本遺跡では1ブロックの6が、王字文で構成されることから山王III層式に相当する可能性を持つが、山王III層式には鉢形A類は組成化しない。当域において大洞A式までは、比較的の齊一性を持った土器

地域 型式	北 柳 1 遺 跡	最上川中流域 (村山地方)	最上川上流域 (置場地方)	阿武隈川下流域 (宮城南部)	追 川 流 域 (宮城北部)
大洞A'式段階	2ブロック	蟹沢・的場	觀音岩・坐代	鱗沼・梁瀬浦	山王開Va+k層
大洞A'式古段階	4bブロック	蟹沢	坐代	椿貝塚・鶴治沢	山王開VI-m層
大洞A'式新段階	(+)	蟹沢・松留	觀音岩・岡ノ台	鱗沼・鶴治沢	山王開Va+k層
青木畠式段階	4cブロック	蟹沢・漆山	觀音岩・岡ノ台	鱗沼・薬師堂	青木畠
山王田層式段階	(+)	蟹沢・地蔵池	岡ノ台	鱗沼	山王開山層
鱗沼式段階	6aブロック	松留・地蔵堂	神立・坐代	鱗沼	(+)
椿形圓式段階	(+)	漆山	堂森	(+)	(+)

表2 繩文時代晩期末葉～弥生時代中期編年試案

(1997年3月作成)

製作技術が共有されるのに対し、青木畠式～山王田式段階ではやや地域色を強めており、太平洋岸とはあまり符合しないようにも見受けられる。なお須藤氏は山形市松留遺跡に山王田層式の出土を指摘するが、いずれの土器を指しているか判然としない(須藤 1990)。

後続の鱗沼式は、鱗沼遺跡の主体的な土器群を標識とし、北上川下流域から仙台平野にかけての守下四式に相当するが、仙台湾沿岸から福島北部にかけて強い齊一性を有している。本遺跡では6aブロックに主体的に出土したが、充填繩文手法を伴う入組文を特徴とし、平口縁の鉢(鉢形A類)と精製の蓋形が発達し、太平洋沿岸と符合した展開を示しているが、鱗沼遺跡で出土した定型的な漁は認められない。文様は三角形や菱形を基調とするものが多く、変形工字文との関連を想起させるが、太平洋岸に顕著な複雜な入組文はみられらず、やや古相の感を呈している。同期の資料は山形市松留遺跡や村山市稻下遺跡に散見される。最上川中流域では椿円文を重層させた磨絞繩文が特徴とする地蔵池式が知られている。本遺跡ではみられないが、鱗沼遺跡に類似のモチーフで構成される鉢や台付浅鉢が出土しており、鱗沼式に併行すると考えられる。

鱗沼式に後続する椿形圓式段階は、最上川中流域では極めて少なく、漆山遺跡例を挙げるに留まる。当城で遺跡数が飛躍的に増加するのは桜井式の段階(V期)であり、石包丁(七浦・江保遺跡)や初穂丘痕(江保遺跡)等の水稻耕作の証拠もこの段階から明確になる。従って本遺跡では、IV～V期の間に空白の段階が想定される。

本遺跡のブロックと山王田遺跡の層位の状況を中心として、周辺遺跡との対比を試みたものが、表2 の編年試案である。從来最上川中流域では佐藤庄一氏(佐藤 1978)等によって、大洞A'式・蟹沢I式→蟹沢II式→地蔵池式という編年区分が示されてきたが、当城においては一括りの把握できる資料の報告が非常に少なく、型式編年が断片的な資料に基づいて組立てられてきたのが実情である。本遺跡のブロックを基軸に据え、周辺遺跡との対比を行うことで、更なる細分の可能性が明示されるが、佐藤氏等が提示した3つのそれぞれの型式には、筆者の考える2～3の細別型式が内包されており、単純に対比せることはできない。

繩文土器から弥生土器にかけて土器型式に表れた大きな変化が、甕・蓋という器種が煮沸形

態として新たに出現し、かなりの出現頻度を示す点にあるとするならば(須藤 1983)、本遺跡で蓋形が出現するのがIV期(鱗沼式段階)、定型的な漁が定着するのがV期(桜井式段階)であり、中期以降になって弥生土器の器種構成が明確になる。宮城県内では大洞A'式直後に蓋形が出現し、石包丁や遠賀川系の大型甕の出土がみられ、更に中期前半には水田跡や始刃石斧等の弥生土器、木製農具が検出されており、安定した弥生農耕社会の成立が確認されている。最上川中流域でも狩猟・採集社会から農耕社会への生活様式の変化が、ほぼ同一歩調で進行したものと推測されるが、現時点では稲作圧痕や石包丁が出土し、稲作農耕の定着が窺えるのが桜井式の段階であり、それ以前の状況は判然としない。本遺跡から判断する限りでは、III期までの土器製作手法には晚期終末の伝統が強く継承され、大きな器種構成の変化がみられないことから、日本海沿岸から東北北部にかけて指摘されるような、弥生文化の急激かつ均質な受容は認められず、暮らし様式の変化が漸移的に進行し、IV期以降に稲作農耕が本格化したものと推測される。この傾向は東北中部に共通した在り方であり、日本海沿岸とは対照的である。

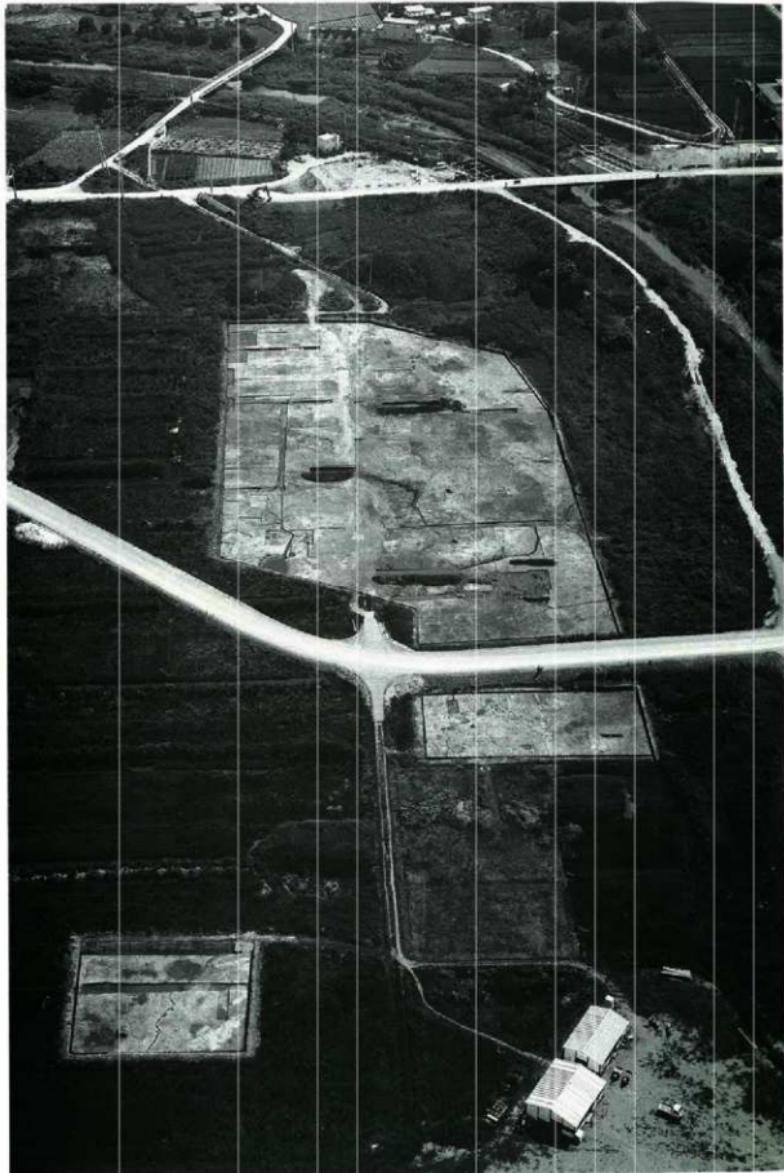
引 用 文 献

- 伊東信雄・須藤謙 1985 「山王開遺跡調査図録」宮城県一迫町教育委員会
 宇垣則保・高島芳久 1982 「馬鹿川流域における縄文晩期末の新資料(1)」『奥南』第2号 奥南考古学会
 柏倉亮吉他 1968 「山形市史 別巻1 編遺跡」
 加藤道男 1982 「青木畠遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集
 加藤駿・佐藤義広他 1986 「最上川流域の弥生土器集成」資料編一(II)村山編「山形考古」第4巻第1号
 児玉 岸 1984 「横長根人遺跡」若美町教育委員会
 佐藤庄一 1978 「山形県における縄文時代最末期の土器様相」『山形考古』第2巻第3号
 佐藤義広 1988 「最上川流域における弥生文化の成立」『北東古代文化』第16号
 志賀泰治 1971 「鱗沼遺跡」
 志賀泰治 1975 「亘理町史 上巻」
 菅原俊行・安田忠市 1986 「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田市教育委員会
 鈴木正博 1985 「弥生式への長い道」『古代』第80号 早稲田大学考古学會
 鈴木正博 1987 「続 大洞A式考」『古代』第84号 早稲田大学考古学會
 須藤謙 1973 「土器組成論」『考古学研究』第19巻第4号
 須藤謙 1976 「鬼ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究』第23巻第2号
 須藤謙 1983 「東北地方の初期弥生土器—山王田層式」『考古学雑誌』第68巻第3号
 須藤謙 1984 「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』第1巻 考古学篇
 須藤謙 1987 「東日本における弥生文化の受容」『考古学雑誌』第73巻第1号
 須藤謙 1990 「東北地方における弥生文化」『考古学古代論叢』伊東信雄先生追悼論文集刊行会編
 玉川一郎・吉田芳享 1987 「浦原鐵坂遺跡の繩文晚期土器と製錆土器」『島嶼考古』第28号
 中村五郎 1988 「弥生文化的曙光」未来社
 弘前市教育委員会 1988 「砂沢遺跡発掘調査報告書一図版編一」
 佐藤信男編 1988 「九十九里浜遺跡第11次調査報告書」北上市文化財調査報告第47集
 松本茂樹 1988 「真野谷・馬頭遺跡発掘調査報告書 XI」福島県文化財調査報告書第193集
 馬目順一・古川豊 1970 「一人子遺跡の研究—所謂鬼ヶ岡式土器群末期の吟味—」南奥考古学研究叢書1
 馬目順一・1983 「東北南部」『南生土器 II』ニュー・サイエンス社
 山形県教育委員会 1987 「生石2遺跡発掘調査報告書(3)」山形県埋蔵文化財調査報告書第117集
 山内清男 1930 「所謂鬼ヶ岡式土器の分布と鉢紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号
 山内清男 1979 「日本先史土器の鉢紋」先史考古学会

報告書抄録

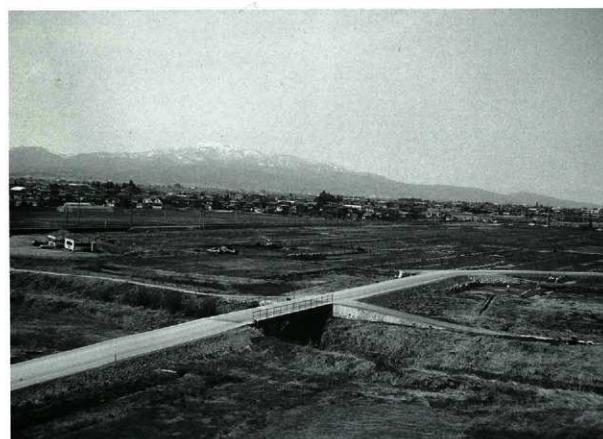
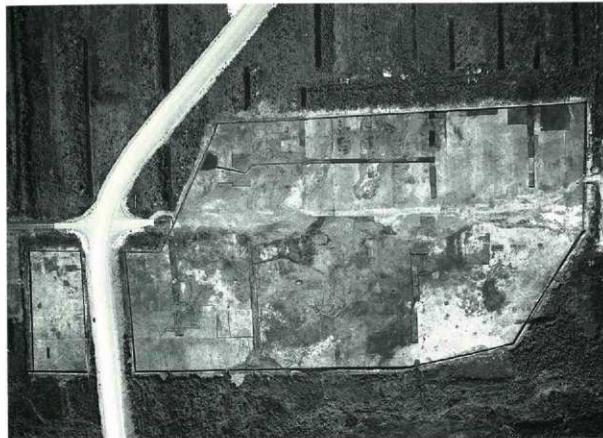
ふりがな	きたやなぎ 1・2 いせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	北柳1・2遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第48集							
編著者名	小林圭一・大泉壽太郎							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一F 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
北柳 1	山形県 上山市 大字青柳 字北柳	6201	平成7年 度登録	38度 17分 46秒	140度 20分 59秒	19960508 19960906	8,000m ²	健康の森 整備事業
北柳 2		6201	平成7年 度登録	38度 17分 48秒	140度 20分 54秒		500m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
北柳 1	集落跡	縄文時代	土坑 遺物集中地点	3基	縄文土器（晩期）	山形県内では数少ない 縄文時代終末～弥生時 代中期後葉にかけての 遺物集中ブロックが10 箇所で確認され、年代 的な変遷が看取される。		
		弥生時代	遺物集中地点	計 10箇所	弥生土器（前・中期） 石鏃			
		古墳時代	竪穴住居跡	2軒	土師器 石製品 (幻玉・管玉・紡錘車)			
			河川跡	1条				
北柳 2	集落跡	古墳時代	土坑 溝跡	5基 1条				

図版

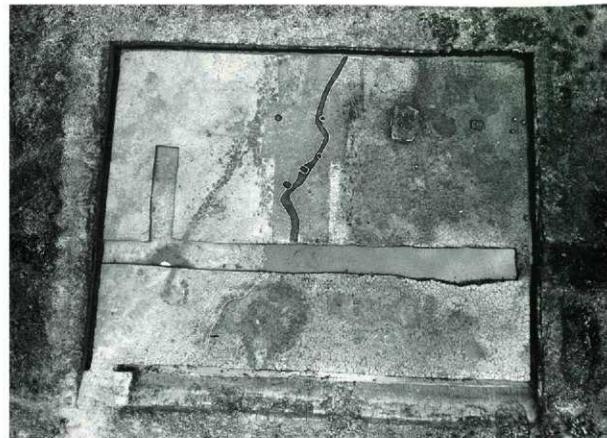


北柳1・2遺跡 航空写真（西から）

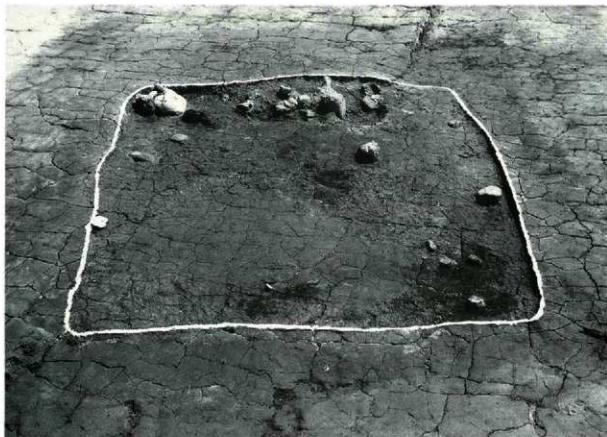
図版2



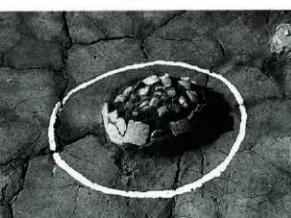
図版3



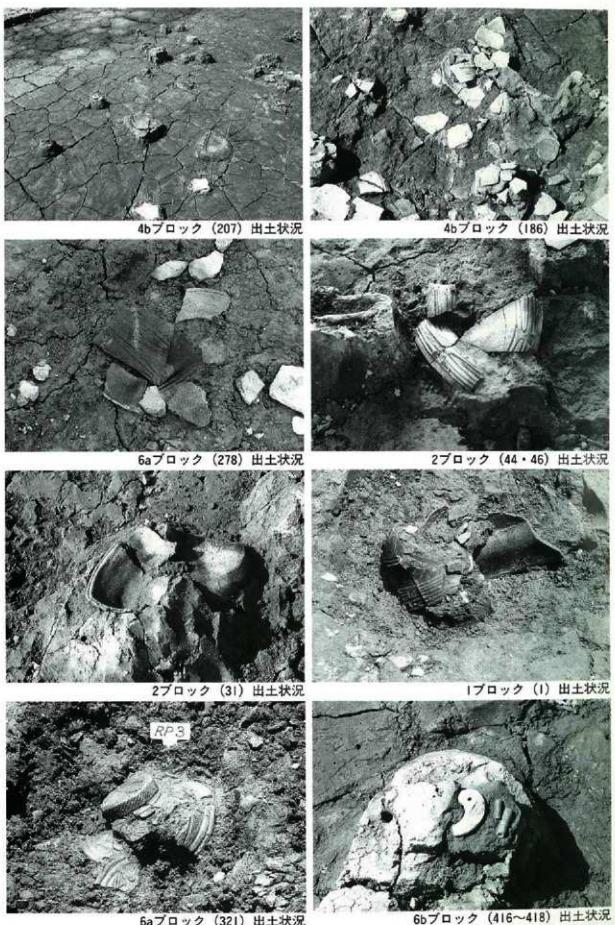
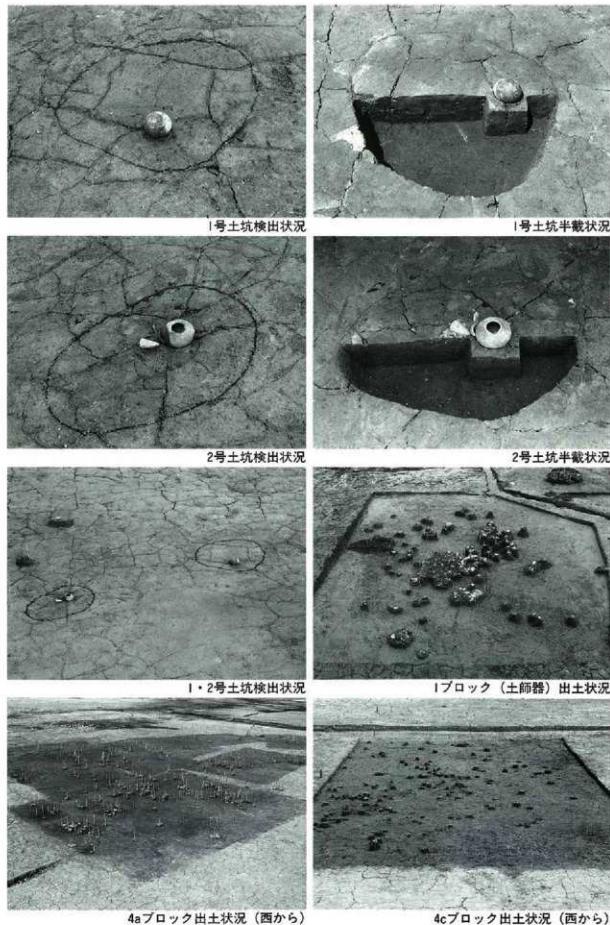
図版4



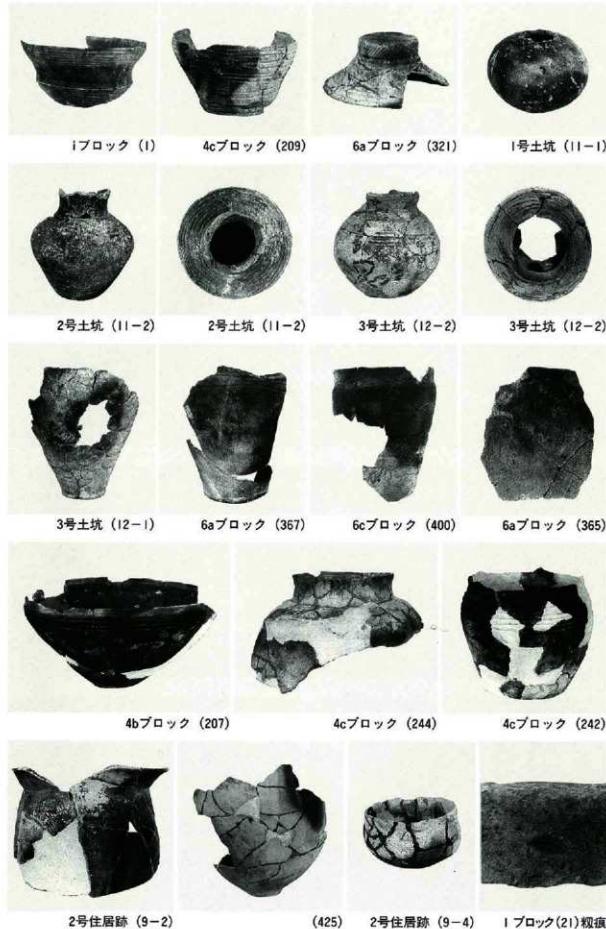
図版5



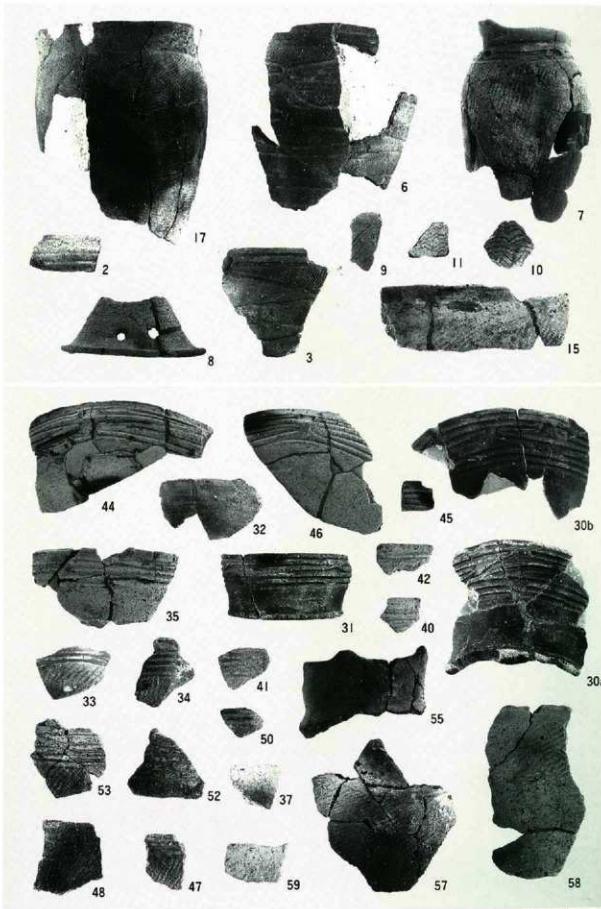
3号土坑完掘状況



図版8

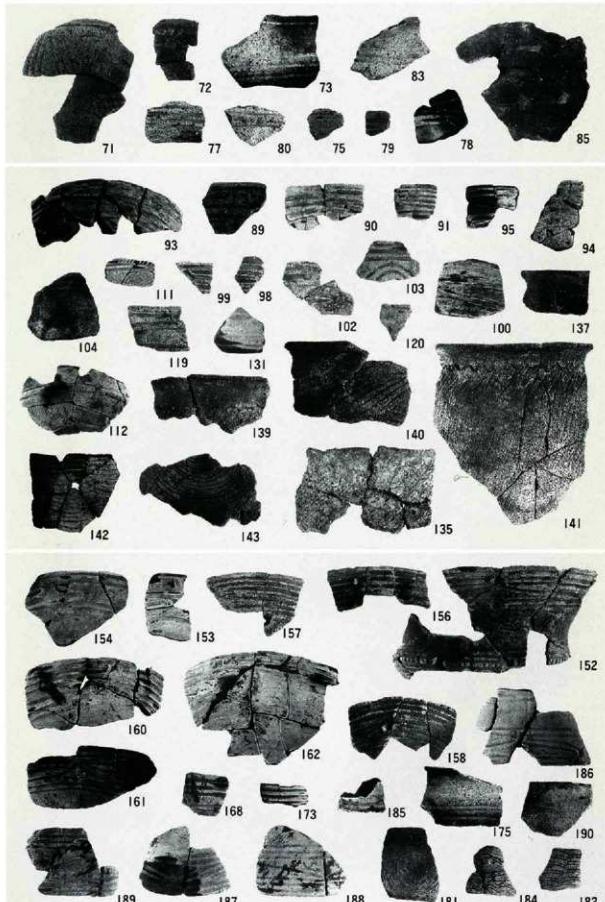


図版9



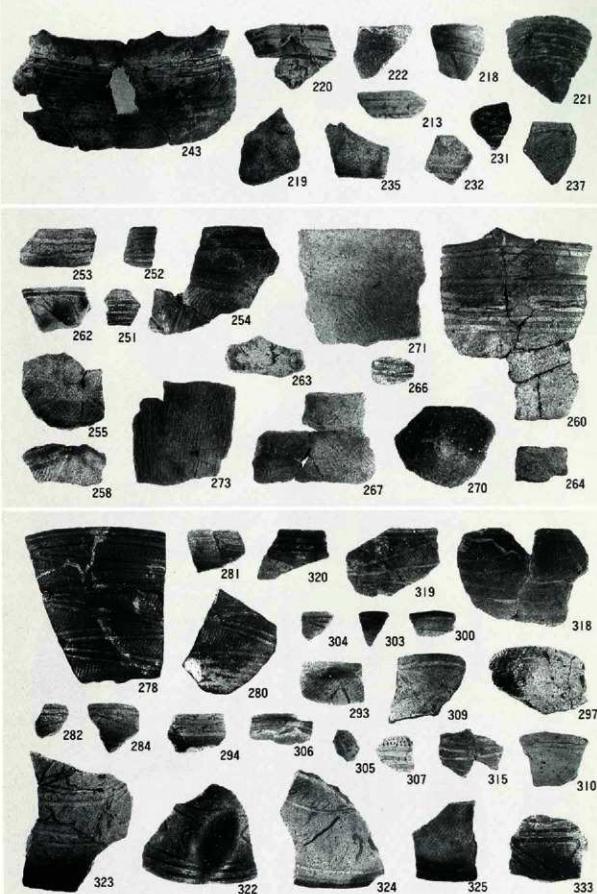
(上) 1ブロック、(下) 2ブロック

図版10

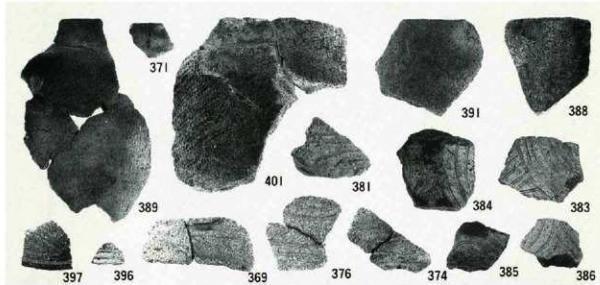
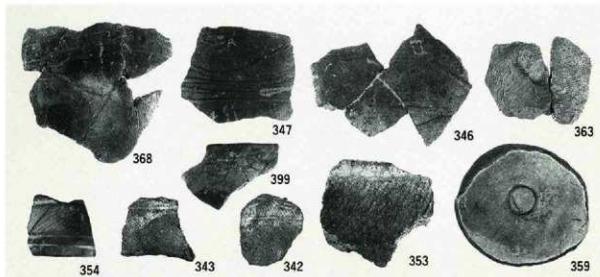


(上) 3ブロック、(中) 4aブロック、(下) 4bブロック

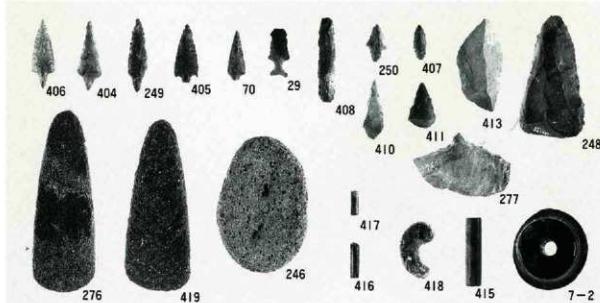
図版11



(上) 4cブロック、(中) 5ブロック、(下) 6aブロック



(上) 6aブロック、(下) 6b・6cブロック



石器・石製品

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第48集

北柳1・2遺跡発掘調査報告書

1997年3月31日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
 〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号
 電話 0236-72-5301
 印刷 山形印刷株式会社

1997 1677